機動六課のお荷物

ナバター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動六課のお荷物

【Ｎコード】
Ｎ４９１５Ｙ

【作者名】
ナバター

【あらすじ】
妄想？レアスキル？転生？前世の記憶？

生まれながらにして前世と思わしき記憶と、十数年後までの、それも特定の人物達にまつわる記憶を持っていた少年は、その記憶に疑問と混乱を抱きつつ、それでも大切な仲間の為に持ち前の正義感と使命感に身を委ねる。

例え自分がどう思われようと、どうなろうと、反面教師になって

でも皆を守る、意地と信念を貫き通せる男になる。

これは自分の行動の良否に迷い、苦悩しつつも精一杯生きる男の物語です。

第一話

はじめまして、僕は灘将臣（なだ まさおみ）、今年で九歳になったばかりです。
自分で言うのもなんですが、特に人より優れているような長所や社会に溶け込めないような人格破綻者でもありません。
ただちょっとだけ自分でも変わってるな、と思う所があります。人には決して言えませんが、どうやら僕には前世の記憶が残っているみたいなんです、もしかしたら僕の妄想かもしれないので、両親にも言った事はありません。

「じゃぁ続きは将臣くんが読んで下さい」

「…はい？」

あ、まずい…いくら小学校だからと言って授業中に気を抜いてしまった、前世ではあまり勉強しなかった事を後悔したのにな…。

「えっと」

「３２ページの三行目だよ」

読む場所が分からず若干テンパり始めた僕に、救いの手が差し伸べられた。

声の主は右隣に座る女子、月村すずかちゃんだ、察しが良い人ならわかったかもしれないけど、どうやら僕はリリカルでマジカルな世界にいるみたいです。

職場の先輩や同僚がリリカルなのはを好きで、ＤＶＤやら漫画を

3日間かけて見せられたからある程度の流れや登場人物は知っているのだけれど、たしかあれって原作があるとか言ってたし、ここがリリカルなのはの世界なのかはまだ分からない。

でも、今僕は小学三年生…確か高町なのはちゃんが魔法少女になる頃だったと思う。僕の妄想でなければ、ですが…。

元々僕はバトル系やSF系アニメが好きだったのですが、戦いは嫌いです、ロストグラウンドの悪魔がいる世界に生まれなくて良かったですが、生で彼の反逆を見てみたかった気もしています…あ、ちなみこの世界にも前世と同じアニメや漫画がいくつか存在したので、きっとそれらはこの世界にはフィクションとしてしか存在しないんだと思います。

月村すずかちゃんのフォローのおかげで難を逃れた僕は、なんとか先生に怒られずに済んだ、もっとしっかりしないとなぁ…。

「ありがと」

「うん」

椅子に座ってから小声でお礼を言うと、すずかちゃんは軽く頷き返してくれた。

この小学校がいわゆるエリートコースである為か、皆どこか小学生らしからぬ知識や態度をしている事もあり、僕は特別目立たずに済んでいる。

成績は中の下をキープ、前世の記憶があるからもっと上位を狙えるのだけれど、何だか卑怯な気がしてテストでは絶対に合っていると確信出来る十問程度をあえてミスして、残りの問題に全力を注いでいる。仮に楽をしても後々困るのは僕自身、それに前世で学んだ

事や後悔した事を無駄にするのは嫌だった。

そして放課後、習い事のある僕はバスから下りそのまま高町家へと直行した。

僕が習っているのはごく一般的な剣道で、まだ九歳という事もあり基礎体力作りが中心のメニューだ。 指導してくれるのは学校が終わった高町恭也さん、当初はお金を取ってまで人に教えるような実力はないと言って断られたのだけど、正式な弟子や入門者ではなく、道場を借り恭也さんに保護者兼アドバイザーとして見てもらっていると言う名目で承諾してもらったらしい。

らしいと言うのは僕が親に何とか体を鍛えたいと頼み込み、時間的な問題からも高町家の道場しかなく、同じ学校という事で交流もあったためなんとか首を縦に振ってもらったと親がこぼしていたからだ。

と言う訳で月謝二千円と言う道場の使用料を払い、僕は殆ど毎日道場に入り浸っている。本当は毎日来たいのだが如何せんやり過ぎてしまい恭也さんから強制的に休むよう言われてしまう事があるのだ、成長期なだけにかなり気を使われてしまっているのもある。

「今日のメニューは…今日は基礎だけか」

恭也さんや美由希さん、なのはちゃんが帰ってくるまで高町家には誰もいない、そのため道場に直行し、恭也さんが前もって用意しておく書き置きとメニューに従って練習し、恭也さんが帰ってきたら剣道の技や立ち振る舞いを見て貰う流れになっている。

今日は恭也さんがちょっと遅くなる為基礎練習のみのメニューと言う訳だ。

「よし！やるぞ！」

体操着に着替え一人気合いを入れる、人が見ていない時頑張れなければその人は永遠に頑張る事はできない、前世の自分は努力が足りなかった、だからその失敗は繰り返さない。

準備運動をしっかりとやり、道場の中をぐるぐると走り始めた。前世と言うのは反面教師であり、時に人生のアドバイザーでもある、だから僕は人の見本になれる人間に憧れている、自分の失敗を人に伝え成長を促す、とても素晴らしい事だ。

同時刻、なのはちゃんが魔法少女になった事を僕が本格的に疑う原因の出来事が起きていた。

ユーノ・スクライア、彼のもう一つの姿である怪我したフェレットを、なのはちゃんが発見し、飼うことになったと仲良し三人組の会話を小耳に挟んだ事で知ったのは翌日だった。

◇

「…どうしょう」

昨日、実は助けを呼ぶような声が聞こえた気がした。空耳かと思い深く考えなかったのが仇になった。

今日の昼休み、真偽を確認すべくなのはちゃんに話しかけた、内

容は至極簡単で。

フェレット預かったって本当？と何気ないものだ、その問いかけになのはちゃんは、「うん、将臣くんも今度見せてあげるね」と何気なく返して来た。

この世界がこのまま僕の知る通りの流れで進むのならば、僕が関わる必要はない。むしろ下手に関わってなのはちゃん達の未来が悪い方向に変わってしまう可能性が高い。　だが、この世界が前世で誰かが考えた娯楽アニメと似ていて、仮に全く同じ道筋や結末を辿るとしても、僕達は自分の意志で確かに生きている、確かな現実が今だ。

だから安易にほうっておいても大丈夫とは思えないし、思いたくない、だけど僕はどうしようもなく無力だ。

「違う…やるかやらないかだ、力がないからっていうのは言い訳だ」

あの人ならきっと生身でも拳一つで戦っただろう、信念を貫き通すのは意志の力だ。

「やろう、出来る事だけやるのなら誰にでもやれる、出来ない事に挑戦するんだ、いや…違うか……出来ない事なんてない、決めつけるな！」

気が付くと僕は部屋から飛び出していた、まずは関わる、そこからだ。

「おや？将臣くん今日は休みだって言わなかったっけ？どうせ昨日もメニュー以上に練習したんだろ？」

「恭也さんこんにちは、えっと…今日は練習じゃなくて、なのはちゃんがフェレットを預かったって聞いて見てみたくて」

「なる程ね、なのはなら部屋にいるよ、あがってあがって」

「お邪魔します」

時刻は午後五時過ぎ、約束もなしに来たのは非常なのだけど、まだ小学生であり仮道場生という立場を使ってなんとか多目に見てもらう事にした、高町家はすごく良い人ばかりなのでその優しさに甘えて常識を疎かにしないようにしてきた。

だから恭也さんは突然の訪問に驚いていたけど、フェレットが見たいという言葉を聞いて、やはり僕も年相応の男の子と思われたらしくちょっと微笑みを浮かべられた時はかなり恥ずかしくなった。

「なのはー、将臣くんが来たぞ」

「ふぇ！？はーい！」

やはり驚かせてしまったようだ、無理もないよね。

「ごめんなのはちゃん、フェレットがどうしても見たくなって」

携帯のアドレス知らないしね、元々奥手の僕は会話はするようにしているけど異性に連絡先を聞く勇気がちょっとない。

「大丈夫だよ、じゃぁ私の部屋に行こっか」

「うん」

あ、なのはちゃんの肩にフェレットが乗ってる。普通人懐っこく

ても昨日の今日であそこまで懐くかな？やっぱりあれはユーノ君なのかな？

なのはちゃんの案内で部屋に入った僕は、初めての異性の部屋に来た事と、これからどう二人に関わって行くのか悩みかなり緊張してしまっている。

「えっと…可愛いね、名前はもうつけたの？」

「うん、ユーノ君って言うの」

魔法少女な可能性が上がりました。

「ユーノ君って事はオスなの？」

「そうだよ」

ユーノ君はフェレットになりきっているらしく、僕が撫でても嫌な素振りは見せない。元々ユーノ君ってかなり人が良かったし男だからって嫌がったりしないか。

「あ、怪我してるね。野犬かなにかに襲われたのかな？」

「え…あ、うん、たぶん」

嘘が苦手なのか、嘘をつく事に罪悪感を感じているのかなのはちゃんは何時になく歯切れの悪い返事をした。たぶん両方だろう、きっと今頃念話でユーノ君がフォローしているに違いない。

「実は僕さ、昨日練習を早く切り上げて本屋に行ったんだ」

「え？」

「その途中で、動物病院の近くを通ったんだけど…」

なのはちゃんとユーノ君がピクリと反応した、動物病院や周りの道路の破損は学校帰りに確認した、新聞通りにガス爆発ならば、二人は慌てないと思う、魔法少女の可能性がまた上がった。

「そこでさ、…見ちゃったんだよね」

なのはちゃんに視線を向けると、予期していなかった事態に戸惑っているらしく、視線をユーノ君に逸らしたまま黙っている。

「見たって…ガス爆発？」

きっとユーノ君と相談してとぼける事にしたんだろう、下手に真実を話して僕が本当は何も見てなかったら笑い話にもならない。

「ううん…実は携帯に写真も撮ったんだ、明日お父さんに見せてみようと思ってる」

なのはちゃんの肩がビクリと震えた、ユーノ君はこちらをじっと見つめ威嚇し始める。二人からすれば僕は完全な悪者だ、あえてそう演じているんだから当然だけど、ツラい。

「話してくれないかな？そうすれば、誰にも言わないし、誰にもバラさない」

一分程度の沈黙の後、なのはちゃんは漸く僕に視線を向けて口を開いた。

その表情には僅かに軽蔑の色が見え隠れしている。女の子を驚かして秘密を聞き出す、あぁ…この気分となのはちゃんのこの視線は…トラウマになりそう…だ。

その後、なのはちゃんは真実を話してくれた、少なくとも僕はそう思う。

そして”やはり”なのはちゃんは魔法少女になっていた。これから彼女はアニメや漫画、ゲームや小説で語られたストーリー以上に数々の事件を経験し、そして苦しい思いをするのだろう、リリカルなのはと同じ未来なら、だが。

「魔法かぁ…僕も使えないかな？」

ここからが本番だ、聞き出すだけならなのはちゃんもユーノ君も脅さなくてもきっと時期がくれば話してくれただろう。

ならなぜ脅したか？それは魔法のノウハウを教えてもらう為だ、きっとこればかりはただ頼んでも教えては貰えないし、リンカーコアがないと言われれば終わりだ。

だが今なら少なくとも教えられないとは言えないだろうし、リンカーコアの問題もクリアしている。

何故なら最初の念話を僕は聞いているからだ、個人ではなく魔力をもつ人間に聞こえるよう広域に響かせた念話、空耳かとも思ったけど確かに聞いた。

だからリンカーコアがないと言われた時、僕は念話が聞こえた事

を材料に真実を引き出せる。

「それは…えっと、素質というか魔力がないとダメみたい…なの」

「さっきなのはちゃん言ったよね？魔法が使える素質のある人にユーノ君が呼びかけたって、僕も聞いてるんだよね」

再び沈黙、僕の心臓は罪悪感で破裂しそうだった。

第二話

結論から言います。魔法が使えるようになりました、なのはちゃんに嫌われました。鬱だ…。

幸いにも魔力を持っていた僕ですが、ディバインバスターやディバインシューターなど、とてもじゃないですが連発出来ません。

簡単に言えば砲撃魔導師になれる程魔力がありません、魔力変換資質もレアスキルも勿論有りません。

幸い空戦適性はあり空は飛べるのですが、デバイスもない僕はバインドでの援護が精一杯なのですが、なのはちゃんの手伝いはした事がありません、明らかに…避けられています。

「はぁ…駄目だなぁ、わかってたのにツラい」

日曜日、魔法の訓練をする為近くの森に来たのですが、学校でなのはちゃんに自然と警戒され避けられてしまっている現状に心が折れそうです…いや、ダメだ。今やる事は少ない魔力での戦い方と技術の向上だ。

「チェーンバインド！」

右手を翳すと同時に足元に魔法陣が現れ、そこから銀色の鎖が出現し狙った樹木に巻き付く。

僕の魔力光は銀、まぁ…どちらかと言うとクリアグレーって感じだけど。

「1対1と純粋な支援なら使えるかも知れないけど、僕には向かないかな」

バインドを消し、次はディバインシューターを一つだけ作り出し、木々の合間を高速で走らせる。

複数出して魔力をバラまく事は出来ない、だから砲撃は最小限、そして必中させなければならない。

「あ…やば！」

操作を誤り樹木に向かって直進してしまうシューターを慌てて止める、だが一瞬遅く当たった樹木が激しく揺れる。止めるのが遅かったら折れていただろう、威力を抑えておいて本当に良かった。

「ん？これって」

樹木の確認に近寄ると、さっきの衝撃で枝に乗っていたらしい青い宝石のようなものが落ちて来た。

スッゴく拾っちゃいけない気がする…。

「で、でも…無視出来ないよね、危ないし」

シリアルナンバー？か…このナンバーって誰が回収するナンバーだっけ……ダメだ、流石にそこまで詳しく知らないや。

ジュエルシード、確か願いを叶えてくれるロストロギアなんだよね。

「でも楽して叶えたい願いは僕にはないなぁ」

とりあえずポケットに……しまって置いて平気か分からないけど、デバイスないし仕方ないよね。

◇

「で、あんたなのはに何やった訳」

…アリサちゃんに呼び出されました、すずかちゃんも一緒です、なのはちゃんはいません。

「えっと…」

アリサちゃん曰わく、最近なのはちゃんの様子がちょっとおかしいらしい。

そしてすずかちゃんも曰わく、最近僕となのはちゃんのやりとりがぎこちなく、なのはちゃんが僕の話題を避けるようになったらしい。

多分前者は魔法少女になった事が原因だと思うけど、全く僕が関係ないとも言い切れない。

なのはちゃんとの仲が悪化したのは言わずもがな僕が悪い、ただ僕はこれからなのはちゃんとは距離を置くつもりだから仲直りする気はない。

「さぁ…僕には分からないよ、なのはちゃん何か変わったかな？」

これまでクラス内での人間関係は良好だった、でも悲しいかな一緒に遊ぶような仲にまで進展した友人はいない。理由は分からないけど昔から人との距離感は良く分からない。

「あんた本気で言ってるの？」

「えっと、なんで怒ってるの？それに変に思ってるならなのはちゃんに直接聞けばいいじゃないか」

「聞いたわよ！でもなのはったら何でもないって言って話してくれないのよ！」

なる程、確かアニメでもちょっと仲違いし始めた時期があったっけ、

「何でもないって言うなら何でもないんじゃない？」

自分で演じているとは言え、このヘラヘラして頼りない男は僕でもつい拳を握り締めたくなるなぁ…。

「ッ！あんた…」

「将臣くん…」

「そろそろ休み時間終わるし…いいかな？あ、なんなら僕が聞いてみようか？最近暗いね、それと何で僕避けてるのってさ」

言い切った瞬間僕は尻餅をついていた、自分でも吐きたくなるくらいムカつく台詞だっただけにめまいでも起こしたのかと思ったけど、それは間違いだった。

「…酷い、酷いよ将臣くん」

「すずか…将臣あんたサイテーね」

顔を上げると目の前にはアリサちゃんの前に割り込み、右手を振り切ったまま目に涙を浮かべていたすずかちゃんがいた。

すずかちゃんはそのまま逃げるように走り去っていき、アリサちゃんも一度僕を睨んでから追って行った。

「…痛い」

初めて女の子に本気で叩かれた、痛い、ぶたれた頬が、心が、痛い。

その日、僕の信念はは激しく揺らいだ、だけど、折れず、曲がらず、強さを増した。そう思う、思い込みたい自分がいる事もわかった。

「どんなに嫌われてもいい…僕が望んだ事が叶うんだから」

とりあえずこの後どうしょうか、授業には間に合うけどきっと左頬にはくっきりと手形がついてるだろう。

でも冷やすには保健室に行くしかない、流石にただサボったら家に連絡が行く…でもすずかちゃんは泣いていた、もしかしたら保健室で休んでいるかもしれない。

「教室に行くのが無難だよね」

とりあえず手形を消す為に僕は自分の手で左頬を三回ほど殴った。

平手打ちするつもりが自分への苛立ちかつい拳を握ってしまっていた、ま、まぁきっとこれで手形はある程度ごまかせただろう、先

生に聞かれたら…そうだなぁ、ヘディングをミスった事にしよう。

とりあえず今は教室へダッシュだ！僕は立ち上がり走り始めた。きっと、あの後すぐ立ち上がっていれば良かったんだと思う。

僕はまさかすずかちゃんの平手打ちで脳を揺さぶられ、自分の拳でだめ押ししているなんて夢にも思っていなかった。

「うわぁあああああ！？！」

全速力で僕は階段を転げ落ちた。

◇

「…遅れました」

「遅いですよ将臣くん、早く席に……きゃぁぁぁ！？」

担任の先生が悲鳴をあげた、クラスメートもポカンとした表情で僕を見ている。

無理もない、今の僕は鼻血をハンカチで抑え、階段を転がったせいで白い制服はかなり汚れが目立ち、さっき窓ガラスで見た床殴った左頬と目元は青あざになっているのだ。ちなみに服の下も痣だらけ、右足首は捻ってしまい結局三時間めの授業に１０分前後遅れてしまった。

まぁ痛みで数分うずくまっていたのが一番の原因なのだけど…う

ん、平行感覚を損なった全速力の状態で階段で受け身を完璧にとるのは無理だった。

というか床が堅いので受け身を完璧に取ってもダメージをゼロにするのは不可能だったと思う、受け身って別に万能技じゃないし、ダメージを減らすだけだし…あ、なに言い訳してるんだ僕は。

「ちょっと階段から…あ、たいした事ないので大丈夫です」

あ、素で話してしまった。ここは泣きながら痛がって情けない男を演じる場面だった筈。

先生が何か言う前にささっと席につく、足は痛かったが引きずってしまうと確実に保健室に連行されてしまうので歯を食いしばって普通に歩いた。弱いなぁ僕は。

予想外な事に、すずかちゃんはしっかりと授業を受けに来ていた、僕が思っていたよりもすずかちゃんは強かったらしい。

というか鼻血が止まらないんだけどな…ハンカチが真っ赤になってきた…折れてるのか？いや、触った感触は普通だしその内とまるだろう、ただ今にもハンカチの吸収力を越えてノートや教科書に鼻血が垂れてしまいそうだ。

「…これ」

「え？」

隣りのすずかちゃんがポケットティッシュをくれた。本当に、優しいんだね、すずかちゃんは。

「ありがと」

遠慮なくティッシュで鼻を塞ぎ手で抑える、鼻にティッシュを突っ込むのは個人的にやりたくない。

授業終了間際やっと鼻血は止まったものの、手やら顔やら血だらけになってしまった僕はそのままティッシュで鼻を抑えて隠す事にした、この時間が終わったらトイレの洗面台で綺麗にしようと思う。

それにしても、なのはちゃんは才能もあり努力も欠かさない子だし、ユーノ君も頼りになる魔導師だ。

僕が手を貸さなければいけない場面など想像出来ない。ここで僕がいくら努力しても足手まといにしかならないって思考はなしだ、やると決めたらやる。

ではどうするか？という最初の問題に戻る訳だけど…やはり地道に鍛えるしかないのは間違いない。どこをどう鍛えるかが問題ななってくる…まず砲撃型魔導師は無理だ、弾丸（魔力）の絶対数が少ないしなのはちゃんの劣化版にもならないだろう。

そこで僕が目を付けたのはベルカ式魔導師だ、撃ち合いが無理なら少しでも身体能力でカバー出来るベルカ式にするべきだ、と。

シグナムさんよりやや万能寄りで、タイプとしてはフェイトちゃんに近くする予定だ。

だがそこでまた問題が…まずベルカ式も何もデバイスがない。次に防御力、フェイトちゃんはスピードがあるからあまり目立ってな

いけど強度の高いバリアジャケットやフィールドを展開するのは無理、あれ展開している限り魔力使うみたいだし…。最後に威力、こればかりは身体能力ではカバーしきれない、魔力が低いのできっと大技はそうなんども使えないだろう。

スピードもない、硬さもない、威力もない、舐めてるのか僕は？残ったのは技量の向上と工夫…でも僕が考えてすぐに画期的な解決策が出るだろうか？正直厳しい…それなら誰だってエースになれる筈なんだ。

ダメだ！ネガティブな考えは捨てろ！考え方を変えるんだ！誰だってエースになれる、努力さえすれば…きっと見つける、僕の道を。

「ち、ちょっとあんたどうしたのよ！？」

「あれ？」

いつの間にやら授業が終わってる、ちょっと考え込み過ぎたみたいだな。

「あぁアリサちゃん、いやちょっと階段からね」

「あの、さっきはごめんね将臣くん」

「何かあったっけ？」

とりあえずとぼけよう、下手に許してしまうと仲直りしてしまう。

「あ、僕ちょっと顔洗いたいから」

そそくさと逃げようと立ち上がった僕だったが、失念していた、

右足首を捻っていた事を…。

「痛っ」

痛みでしっかりと踏ん張れなかった僕は、よろけた所をすずかちゃんとアリサちゃんに手を貸されなんとか倒れずに済んだ。

「ありがとう、はは躓いちゃったよ」

「嘘、あんた痛いって言ったじゃない」

「言ってないよ？」

「ふぅん」

ニヤリと笑ったアリサちゃんが僕の右足を軽く捻った。

「…っ」

「やっぱり痛いんじゃない」

「あ、アリサちゃん！」

このまま保健室に連行されるのはマズい、せめてごまかさないでヘタレを演じておけば…。

こうなったら。

「僕の事はほっといてくれ！」

心の中で二人に謝りながら、僕は二人の優しさを踏みにじって教

室から飛び出した。

第三話

あれからまた少し月日がながれた、といっても1ヶ月も経っちゃいない。

あの日、すずかちゃんとアリサちゃんの優しさを拒絶してから僕はクラスでも浮いた存在になった。

僕を気にかけてくれる度にそれを感謝せず、余計なお世話だ、という態度を撮り続けた結果なのはちゃんを含めすずかちゃんとアリサちゃんとは事務的な会話しかしないただの他人状態にまで落ち込んだ。

一方でなのはちゃんとユーノ君は順調にジュエルシードを集め、僕が知り得る限り順調に物事は進んでいる。

なのはちゃんがフェイトちゃんと出会い、そして何度も戦って…そして遂に管理局が介入してきた。

どう関わるべきか悩んだが、多分ユーノ君が僕の事を報告したのだろう、僕はクロノ君に捕まって今はアースラの一室に軟禁されている。

独房でないのはリンディさんの配慮だ、僕がした抵抗と言えばただ逃げるだけだったしね。

ならなぜ僕が軟禁されているか、それはジュエルシードを隠し持っていたからだ。ユーノ君からジュエルシードの見本を見せてもらい知っていた僕は言い逃れ出来ず、なにか野心があると思われた。

もちろん野心はあった、あれを僕がもっていればいつかは管理局が接触してくるとわかっていたからだ、まぁ単純に保険の品だった。

「でろ」

「了解」

噂をすればなんとやら、クロノ君が来た。僕は軽薄で頼りなく、そのくせ目立ちたがりやで脳天気、自分には隠された才能がある！なんて思っているキャラをロールしている。

理由としてはワガママを言いやすく、なめられやすく、信頼されないからだ、要は凄く動きやすい。

「なぁ～、いつ帰してくれるんだ」

「君の態度次第だ」

到着したのはブリッジ、今日も艦長のリンディさんの取り調べ、もといお話だ。

期待されないように、だが危険な人物や社会不適格者とは思われない程度に評価を落とす、やってみると案外難しい。

とりあえずヘタレは元々の僕にもちょっと当てはまる気がするので、ヘタレを演じているとは言え時折演じずとも同じ結果になりそうな気がして怖い。

「おはよう将臣君、早速だけどちょっとお話しましょう。君はなぜジュエルシードを隠し持っていたの？」

「えぇ～？だって願いが叶うって聞いたし」

この場にいるのはリンディさん、エイミィさん、クロノ君、ユーノ君、そしてなのはちゃんと名も知らぬ数名のクルー、自己紹介がないので原作キャラしか分からない。

というよりクロノ君とリンディさんしか自己紹介されていないので、もしかしたらエイミィさんの名前は違うかもしれない。

「なんの願いを叶えたかったの？」

「無敵のヒーロー！せっかく魔法覚えたのに術は鎖出すやつしか使えないしさ、でもジュエルなんたら使えばパパっと強くなれるじゃん」

普通の9歳なら有り得なくもない返答をしたつもりだったのだけど、やっぱりブリッジの空気は冷たくなった、皆少し苛立ってる。

因みに僕はチェーンバインドしか出来ないと思われている、ユーノ君やなのはちゃんに教わった中でこれしか発動を成功させていないからだ。

「君は努力家だったって聞いたのだけど」

「あ～、道場通いは親が行けってうるさくて、なんか僕が頼みこんだ事になってるし、それに練習見てくれる恭也さんは後半しかいないから適当に流してもバレないし」

リンディさんの目が細められ、なのはちゃんが遂に下を向いた、ユーノ君はそれを慰めるように手を肩に置き、クロノ君とエイミィさんは軽蔑の眼差しを強めた。

道場通いは現在でも続けているが、なのはちゃんとの関係が悪化した現在は僕が罪悪感を感じてしまい少し居心地が悪い。

「何故君はヒーローになりたいの？」

「だってカッコいいじゃん！ねぇ、僕もなのはちゃんみたいに手伝わせてよ、今はあんまり魔法使えないけどそのうちスッゴい魔法考えるから！」

誰か僕の代わりに僕を殴ってはくれないだろうか。…クロノ君その握った拳を僕に振り抜いてくれ。

「考えておきます、クロノ後の事は…」

「はい」

魔法と管理局を知り、魔法も多少とは言え使えるからには僕をただ放置は出来ないはずだ。

だが油断は出来ない、なんとか管理局入り出来る流れにしていかないといけない…。

再びクロノ君に連れられ移動したのは食堂、丁度昼食の時間なのでついでに話すつもりなのかもしれない。

「結論から言うと君の協力は必要ない、君は足手まといだ」

「そんな事ないって！やって見なきゃ分からないじゃんか」

やっぱり厳しいよね、なのはちゃんも民間協力者って扱いだし、

その後に本人の希望と実力を評価されての管理局入りだからね、試験もあるみたいだけど。

「わかったから最後まで聞け、君がどうしても協力したいと言うなら条件がある」

「条件？なになに？」

何となく分った。実際クロノが言ったのは実力をつけて試験を合格し、正式に管理局入りしろって内容だった、間違ってはいない。

なのはちゃんやユーノ君は必要だったからこそ、協力者として迎え入れてもらってたのであって、足手まといの協力者はいらない。

「え～、試験っていつあるの？」

「三ヶ月後になるな」

この事件中には間に合わないな、多分最終決戦も近い筈、ただ現状僕が使える魔法はバインドが数種とディバインバスターもどきとディバインシューターもどき、飛行魔法とプロテクションのような防御魔法のみ、なのはちゃんと持つ魔法の系統は同じだけど、なのはちゃんの弾数が１０とすると僕はいいとこ３だ、すぐ弾切れになるだろう。

「とりあえずこれから君の正式なデータを取る、今の内言っとくが君の魔力値は精々Ｃか良くてＢだろうな。因みになのははＡＡＡだ」

ため息まじりに言い切るとパンを千切り口に運ぶクロノ君、話に夢中になっていた僕もスープを口に運び一口飲む。

「大丈夫大丈夫、きっともう少し成長すればＳとかＳＳＳとか行くって！」

それにしてもＣか良くてＢかぁ、やっぱりそのくらいになるか。予想はしていたんだけどね、

やっぱり３って言ったけど多く見積もって２くらいがいいとこかな。

「まぁ思うのは勝手だが…多分さほど変わらないぞ、とだけ言っておく」

「ほぅへふは」

「パンを食べながら話すな…本当に君は人を苛立たせるのが得意だな」

クロノ君ごめん、そう演じているからね。というかいつかこれが素の自分になってしまいそうでちょっと怖い訳でして…。

その後の測定では魔力値はＢ、チェーンバインドの発動速度と耐久値、消費魔力などの数値もかなり低い数値を記録した。魔導師ランクで例えると、最低のＦにも満たないそうだ。

手を抜いたとは言え、多分本気でやってもランクはＣに達しないと思う、先は長いなぁ。

因みに僕の出来の悪さは大体予想していたらしく、特に皆が呆れたりする事はなかった。

その後でリンディさんにダメ元で聞いた訓練室の使用と、クロノ

君に魔法の基礎を教わる事に許可が出来たのは嬉しい誤算だった。
危険な力なので中途半端なままではなくある程度使いこなせるようにした方がいいという判断なのだらう。
本当に融通の利く人達で助かった。

◇

「一騎打ち？」
「あぁ、ジュエルシードを賭けた真剣勝負だ。君も見るだけ」
測定から3日、執拗に協力したいとクロノ君やリンディさんに頼み込んでいる内に遂になのはちゃんとフェイトちゃんの決着の日が訪れてしまった。
薄々気付いてはいたけど、やっぱり僕が手助け出来るレベルになるのは最低でもこの事件の半年後、闇の書事件の始まるＡ－ｓがいいとこだろう。
それに今の戦力ならば十二分に事件を解決出来る筈だ、僕が今やれる事は邪魔にならない事、ただそれだけだ。
「僕も見ていい？」
「あぁ、まぁ君とは魔力差が有り過ぎて魔法は多分手本にはならないぞ」

ブリッジに着くと険しい表情でリンディさん達がモニターを見つめていた。

そう言えば、なのはちゃんの両親を説得したようにいつの間にか僕の両親を説得していたリンディさんの手腕には驚いた。

確かに僕くらいの年頃の子が1日でもいなくなったら大騒ぎだ、多分変身魔法とかで僕に化けたクロノ君あたりが同席したんだろうなぁ…。僕の両親って高町家に負けず劣らず良い人だし、ワガママもちゃんと意味や考えがあれば承諾してくれる。

「あれがフェイトとか言う子かぁ」

「あぁ、単純な技量はなのはよりちょっと上だ」

モニターでは黒と白の少女が互いの相棒を構え視線を向け合っている、睨んではいない所を見るとやはりただの敵同士という関係でない事が伺える。

モニターから視線を外し再びブリッジを見渡す、ここにも、なのはちゃん達の所にも、僕の居場所やいる必要性がないように感じられた。

関わるべきじゃなかったかもしれない。良くは覚えていないけど、原作通りのようで現実は違っている。

「やっぱり速いな」

クロノ君の呟きに我に返った僕は慌てて視線をモニターに戻す、案の定既に同い年の女の子達の戦いとは思えぬハイレベルな攻防が始まっていた。

スピードを生かし接近戦を挑むフェイトちゃんに対し、なのはちゃんは誘導弾を使い迎撃と動きの阻害を狙い、スキあらば高威力の砲撃を放っていく。

フェイトちゃんも接近戦を仕掛け続けるとなのはちゃんにイメージ付け、雷の槍を使った奇襲と魔力砲を叩き込んでいく。

防御の上から一発で削るなのはちゃんに対し、フェイトちゃんは手数で着実に削っていく、ただなのはちゃんの防御が堅い事もあり五分五分という所だ。戦略や技量はやかり訓練を受けたフェイトの方が一枚上手のようだ。

だがなのはちゃんは切り札を隠し持っているはずだ、もっとも原作通りなら…だが。

焦るな…僕は必ず、必ず力をつける…ただ見ているだけの今を変えて見せる。このままでは終わらない。

僕は無意識に拳を固く握り締めていた。

第三話（後書き）

まだ本編（ｓｔｒｉｋｅｓ）が始まらないという罠…

第四話

灘将臣（なだ・まさおみ）、『ＰＴ事件』中結界内に取り残された事から当時民間協力者であり、クラスメートでもある高町なのはと接触。

魔法の存在を知り、将臣少年にリンカーコアが確認された。以後は本人の希望もあり高町なのはと共にユーノ・スクライアの指導を受けつつジュエルシード回収に尽力、その後介入した管理局に民間協力者として行動を共にする。

『闇の書事件』の際には地球におらず、嘱託魔導師の試験は受験せずミッドチルダにて魔法学院に一時的に在学し基礎を習得していた。

事件解決後に年末休暇に伴い地球に一時帰還、その一週間後に発生する闇の書の欠片による『闇の欠片事件』に立ち会い、事件解決に協力した事で陸士部隊への将来的な入隊が決定、小学校卒業と同時にミッドチルダに移住する。

これが灘将臣という人物に関する経歴データの一部であり、偽りでもあり見方を変えれば真実でもある困った経歴だ。

「いらんとは言えんよなぁ…やっぱり」

機動六課、その部隊長である八神はやては本局より送られてきた書類を見て引きつった笑みを浮かべた。

それも仕方ない事だろう、何故ならこの灘将臣と言う男は一言で言い表すならば。

「将臣さんって…あのヘタレですか！？」

自分の仕事を中断しはやての書類を覗き込むリインフォース？。

そう、彼は一言で言うなら「ヘタレ」であり、「雑魚」とも言える。とてもじゃないが書類に書いてある通りの人物ではない、この書類だけみるとまるで事件解決に貢献した優秀な魔導師のように見える。

が、実際に彼は足手まといにしかなっていない、ＰＴ事件では常にユーノとなのはの裏に隠れ、唯一可能なチェーンバインドは拘束力が弱く発動も遅い、しかも彼は飛べず、ジュエルシードで変異した動物にまるで歯が立たないのだ。

最終決戦時にも半ば無理やり参加したものの、傀儡兵を破壊する事も拘束する事も出来なかった。

嘱託魔導師の試験も二度とほど受験したのだが、フェイトとは違い成績は凄惨なもので、見かねたクロノ・ハラオウンに冗談混じりに進められたミッドチルダの魔法学院留学の話に食いつき、留学し基礎を学ぶが、習得した魔法は相変わらず申し訳程度のものだ。

が、本人が管理局入りや魔法の使用に楽しさを感じている事から、このまま地球に放置する危険性や本人がミッドチルダに移住する事を希望していた事もありミッドチルダ国籍を取得。

陸士部隊への入隊もコネではないかと囁かれている程に実力が伴っていない。

「そうなんよ、なんで将臣なんかが回されて来たんかわからん」

「ま、まぁでもその人がいなくても戦力は十分なのですよ！」

確かにはやての思い描いた部隊に限りなく近い、むしろ理想そのものとも言えるメンバーに六課は仕上がりつつある。

唯一の不安は二人の隊長が目を付けた期待の新人が六課入りを承諾してくれるかという事くらいのものだった。

「そやね。うん、それにもう子供やないし、成長しとるやろ」

はやての願いも虚しく、件の将臣は完全に厄介払いとして六課に押し付けられる程に…残念な実力の男だった。

◇

機動六課が本格的に活動を開始した日、まず最初に行われたのは部隊長である八神はやての挨拶だった、無論六課の隊員達は全員集合し様々な思いを抱きながら真剣に話に耳を傾けている。

ただ一人、腹痛を理由にサボった男を除いて。

（なのはちゃん、フェイトちゃん、将臣知らへんか？）

（えっと…腹痛だって連絡が）

（ぁ～、フェイトちゃん？それ多分嘘…）

（え！？）

（なのはちゃんの言う通りや、多分嘘やな…あんの阿呆）

なんとか表情に出さぬよう念話で会話しつつ情報を整理するはやて、将臣がこの類の行事を良くサボる事をはやては知っていた、フェイトは仮病とは疑っていなかったようだが、なのはとはやては昔腹痛で帰った筈の将臣が街を歩いているのを目撃した事があった。

後日聞いてみると、その日は腹痛で家でずっと寝ていたと平然と嘘をついた、以来将臣の病気や怪我はまず疑ってかかるようにしている。

（そうなんだ…ごめんはやて）

（ううん、フェイトちゃんのせいやないよ）

やっぱり将臣のスターズ入りは考え直した方が良いかもしれない。散々悩んだ末に決めた考えが揺らぐはやて。

だが将臣にはヘリの操縦スキルや整備のスキルもない、しかも紛いなりにも戦闘員として配属された将臣をどこの分隊にも組み込まずデスクワークさせる訳にもいかない。

とりあえず名前だけでもスターズ5として置かなければならない。非常に面倒な、そしていらない人材だ。

（なのはちゃん、アイツの事ビシビシ鍛えたってな！）

（任せてはやてちゃん！）

「ックション！風邪かな？」

同時刻、自室のベッドでウトウトしていた将臣はくしゃみで目覚め大きく腕や体を伸ばす。

魔導師ランク陸戦Ｂ、階級は陸士長、保有魔力Ｂ、レアスキルなし、魔法形態はカートリッジシステムの安全性が向上した事により爆発的に増えた近代ベルカ式に便乗、デバイスは盾型のアームドデバイス「イージス」、片手剣型ストレージデバイス「グラム」。

グラムには最低限の補助機能しか存在せず、アームドデバイスよりのストレージデバイスに分類され、カートリッジシステムは左手に展開される小型の盾、イージスに搭載されている。

技能の低い将臣は攻撃をグラム、魔法の補助とカートリッジシステムの制御をイージスに依存しようやく中の下、下の上程度の実力を得ている。

因みにデバイスの名の由来を知る者達には完全に名前負けしていると囁かれている。

「そろそろ挨拶は終わったかな？まぁいいか、さて…午後の訓練まで時間あるし、地球で取り溜めといたアニメと特撮見よっと」

いざとなれば午後の訓練も腹痛でサボればいいしな、と呟きながらデッキの前にしゃがみ込みＤＶＤを選ば始める。

「ほう、サボリか」

「あんなの突っ立ってるだけで暇だし……………………イタタタタ！腹が突然！」

「どれ？見てやろう」

慌てて小芝居を始めた将臣の襟首を掴むと強制的に立たせ、引きつった笑みで振り返る将臣の腹に拳をめり込ませる。

将臣の体はくの字に折れ曲がるが、すぐに悶絶しつつしゃがみ込んでしまう。

「立て、その根性を高町の教導で直して貰うんだな」

「し、シグナム副隊長殿…不法侵入…じゃ…」

抗議しつつ顔を上げる、すると目の前のシグナムは一枚のＤＶＤをパキンと割って見せる。

「ァアアアアアアァアァアァアアアァ！？！」

「うるさい、早く行かないともう一枚…」

「今行く！今行くから待てぇぇぇ！」

気力で立ち上がった将臣は素早く上着を脱ぎ捨て訓練服に着替える。

「くそぅ！後で覚えてろよ！」

「早く行け」

メキッと2枚目のＤＶＤが悲鳴をあげると同時に将臣は駆け出していった。

「やれやれ…」

破壊したブラフである新品のＤＶＤを回収し、まだ言い足りないが残りはなのはに任せシグナムは部屋を出た。

◇

「ひぃひぃ…ありゃ？挨拶終わっちった？」

訓練場にヘロヘロになりながら走って来た将臣は、なのはを始めとしたスターズとライトニング分隊メンバーの視線を受けながら悪びれた様子もなく首を傾げる。

「スターズ５！灘将臣だ、よろしく！」

なのはとフェイトのじと目から逃げる為新人と思わしき四人に挨拶をする、もっとも階級が上とは言え六課でのポジションはフォワード陣と大差がない。

「じゃぁ早速訓練、始めようか」

「え？ちょっとなのはまだ俺この子達の名前知らないんだけど」

「はぁ…右からスバル、ティアナ、エリオ、キャロだよ」

「了解っ！」

なのはが珍しくぶっきらぼうな話し方になってしまうのは今に始まった事ではない。

単純に言ってしまうとなのはは将臣が苦手なのだ、それも好きか嫌いかで言えば限りなく嫌いな部類に入る苦手である。

昔から調子が良く反省もしない、ヘラヘラ笑いながら現れては足を引っ張りそれでいて努力はせず、何より平気で嘘をつき責任感はない。面倒な事からは逃げ人に簡単に頼り甘える。

だがなのは達にとって将臣との出会いと触れ合いは人生においてプラスになった。将臣という反面教師の存在が彼女達を奮い立たせる一因になったからだ。「あぁはならない」悪く言えばその感情が将臣に知り合った者の全てが一度は思い自分を見つめ直すのだ。

「えっと…俺も基礎からやんの？」

「たりめーだ、オメェ体力ねぇだろ」

苛立った様子でヴィータが口を開いた、因みに将臣を殴った回数が一番多いのはヴィータである。

「基礎とか誰でも出来るって、まぁしゃーないな」

この言葉になのははピクリと反応するが、直ぐに笑顔を浮かべながら訓練メニューの説明を始めた。

そして

「うっぷ…後何周だ？」

「二周です…灘陸士長大丈夫ですか？」

「ぜぇ…ぜぇ…将臣でいいよスバルちゃん。いやぁさっき走って来たから体力が…何時もなら余裕なんだけど今日は体調悪いな」

スバルと将臣の会話に残り三名のフォワード陣はウンザリしていた、まだアップが始まったばかりであり、このランニングも体を温める事を目的とした軽いものだ、だが将臣は既にバテ始めたばかりでなく仕切りに言い訳を口にするのだ。

（この人大丈夫なのか？）

同じ男性という事もあり将臣に少し期待していたエリオの落胆は早かった。明らかに体力が無さそうなキャロでさえ弱音は吐いていない、同じ男として年上の将臣の言動は恥ずかしかった。

「あの野郎もうバテてやがる」

「うん、昔より体力落ちたみたい」

「あ…でもほらお腹痛いって言ってたし、明日はきっと」

流石にフェイトもフォローする言葉に力がない、既に念話でシグナムからサボリだと聞かされてはいたが、いつか将臣も自分のように弱い心を奮い立たせて真面目になってくれると願っている自分がいる。

「フェイトちゃん…大丈夫だよ、これからビシビシ鍛えるんだから」

「なのは…」

「ま、アイツが潰れなければだけどな」

ラスト一周、徐々にエリオ達から離されていく将臣を見ながら三人はそれぞれどうやれば将臣を真人間に出来るのか真剣に考えた。

第五話

初日の訓練から将臣の不甲斐なさは周知の事になった。

フォワード陣はそれぞれの長所を伸ばしつつ、全体的な底上げをする方向で訓練メニューが組まれているのに対し、将臣には長所がなく、全体的な底上げどころかその基盤である基礎から見直さねばならなかった。

「ねぇティア？」

「ん～？」

「灘士ちょ…将臣さんって私達と同じBランクなんだよね？」

蛇口をひねりシャワーを止める、隣りではスバルがキャロの頭を洗ってあげている。

「そうね、まぁあんたが聞きたい事もなんとなく分かるけど」

「うん、こう言っちゃなんだけど…良く受かったな、って」

今日みた感想ではお世辞にもBランクの実力があるとは思えない、それが本年だった。

「あの人私達みたいにペアで試験受けたらしいわよ、相棒が凄腕がだったんだって」

「それで受かっちゃうんだ…」

「多分アシストに徹したんじゃないの？小型スフィアの攻撃の盾役とか。先上がるわよ」

「あ、うん」

その頃廊下では…

「おっせぇな」

「あ、はい」

先にシャワーを済ませたエリオが将臣の愚痴を聞きながら女性陣を待っていた。

フリードと共に大人しく待っているエリオと対照的に、将臣はせわしなく動き周り一向に落ち着こうとしない。

「でも仕方ないですよ、女の人は髪が長いですし」

「スバルと俺達に大差あるか？」

「あ…いや、でも」

エリオ自身なぜこんなに時間がかかるのかわからない為、それ以上のフォローは出来なかった。

「お、来た来た」

「ふぅ」

スバル達の姿にエリオは静かに安堵の息を漏らした。

そして

「食いきれる気がしないんだが」

「あ～…大丈夫だと思いますよ？」

「マジで？」

食堂に到着し注文と運搬は任せてくれと言われた将臣が言葉に甘え待っていると、テーブルに何人前か判断出来ない山盛りのスパゲティがスバル達に運ばねてきた、反射的にティアナに顔を向け唖然とした様子で呟いたのだがティアナの発言から注文ミスではないらしい事がわかった。

「はい、まぁすぐ分かりますよ」

注文ミスだと思っていた将臣は、いざ食事が始まった時スバルとエリオの食べっぷりを目撃しその食べっぷりと減っていくスパゲティをまじまじと見ていた。

「すげぇな…」

「将臣さんはもう食べないんですか？」

「ん？エリオやスバルと違って成長期は終わったしな」

最後の一口を口に運ぶと将臣は立ち上がった。

「んじゃお先！ちょっと見たい番組があるんだよ」

「あ、はい」

「お疲れ様でした」

口に何も入れていなかったキャロとエリオが返事をし、ティアナとスバルが軽く会釈するのを確認してから背を向ける。

「なんて言うか…フットワークの軽い人ですよね」

「エリオ、あぁ言うのはチャラい、もしくは軽い奴って言うのよ」

溜め息混じりに遠くなった将臣の背に視線を送る、あんな男とチームを組む者、しかもフォワード陣の司令塔としては頭が痛かった。

「ちょ、ティア言い過ぎ」

「事実じゃない」

スバルの苦笑いを軽く受け流しながらオレンジジュースを口に流し込む、まだ知り合った初日だと言うのに印象はお世辞にも良いとは言えなかった。

そして初出動までの1ヶ月に及ぶ訓練を経て、将臣に対して遠慮や年上という概念が薄れ、だらしがなく頼りない男とフォワード陣の中で認識が統一される事になるとは流石にまだティアナ達は思っていなかった。

◇

「みんな集合、じゃぁ朝の訓練ラスト、シュートイベーションをやるよ、五分間私の攻撃を避けきるか一撃与えられたら終了。だれか一人でも被弾したら始めから、みんなまだ出来る？」

「「「「はい！」」」」

「…はィ」

ボロボロながらしっかりと背筋を伸ばし立っているスバル達とは違い、将臣は膝に手を付き顔を上げていない。

この１ヶ月に及ぶ訓練メニュー、どれも将臣は満足にこなせていないのだ、例えば初日…。

「もらったぁぁぁ！！って！？固すぎだろコイツ！うおぁ！？」

訓練でお馴染みの適役となっている疑似ガジェット？型、疑似的に再現されたＡＭＦを持ち、強度も攻撃精度も１対１ならば兎も角数が揃うと並の魔導師では手に負えない厄介な相手だ。

設定レベルを低くしていたとは言え、スバル達はこの後まだつたない自分のスキルと連携を駆使し、初日でガジェット？型を破壊してみせた。

だが将臣は違った、将臣は初日、キャロの償還したアルケミックチェーンの捕縛から逃れた一機に片手剣型ストレージデバイス、グラムで斬撃を繰り出したのだが、その攻撃は呆気なく装甲に弾かれ

レーザーを腹に食らってしまった。

「将臣士長撃墜、そこでじっとしてて」

「いやいや！あれぐらいじゃ墜ちないって！」

非殺傷設定でなければ将臣は自分の薄いフィールド魔法など貫通し、即死していたという事を棚に上げまくし立てる。

バリアジャケットがあったとしても、将臣が所属していた１０８部隊から事前に送られてきた防御数値を上乗せして考えても戦闘継続は厳しいダメージを受けたのは間違いなかった。

「これは命令、将臣士長は撃墜。だからそこでじっとしてて」

「チッ！これからだってのに」

ヤケになかったのか将臣はその場に大の字に寝そべり目を閉じた、スバル達の技能を見る気も反省する気もないという態度だった。

なのはとは一応幼なじみとなる将臣だが、二人の関係はあまり良好ではない。

ジュエルシード事件の際に二人の間には小さな溝、亀裂が入った。その後事件中何度か行動を共にしたが良い印象も仲直りの機会もなく、ただ漫然と時間は過ぎた。

再開したのは闇の欠片事件、偶然里帰りしていた将臣は謎の結界調査に協力、だが結果的に過去思念体に勝てずシグナムに救助された。

その事件から先は偶然顔を合わせる程度の関わりしかなく、こうして同じ部隊となった現在もなのはは将臣との距離感に戸惑っていた。

只の上司と部下として接すればいいのか、スバル達のように教え子と考えればいいのか、フェイト達同様に友達であり職場の仲間と考えればいいのか。

考えていた以上に実力がなく、いや、実力がない事は問題ではなかった。ないならば鍛えて力をつければいいだけなのだから。

だが将臣からはただ「やる」という言葉だけで本心からのやる気が感じられず、立場上教官であり上司の自分を軽く見ているように感じられた。

そして場面は1ヶ月後に戻る。

「将臣士長無理なら外れててもー」

「はっ！余裕だから！」

何とか顔を上げた将臣は左腕のイージスに差し込まれたグラムを抜く、盾と腕の合間に鞘の役割をするスペースが儲けられており、一時的な格納場所になっている。

もっとも盾の全長より刀身の方が長いので刃が盾から飛び出してしまうので完全な格納とは言えない。

「じゃぁみんな行くよ、１０…９…８」

なのはのカウントと同時にティアナが念話で指示を飛ばす。

まずは初撃を絶対に回避し姿を眩ませる、後は幻影魔法を組み合わせたスバルの奇襲からリズムを作り状況に応じた攻め手を用意する。

だがこの作戦の問題点は将臣が初撃を避けられるかにあった、このボロボロ状態で出鼻をくじかれるのは精神的にかなりキツい。

（スバル！開始と同時に将臣士長を担いで逃げて、将臣士長を隠したら作戦通りに）

（おいおい俺は荷物扱いかよ！ちゃんと足はあるしそれに俺はクロスレンジ以外なんもできねぇぞ！）

（もう時間が有りません！とりあえず作戦通りに！）

荷物扱いではなく、本当にお荷物だろうと心の中で毒づきながらティアナは舌打ちしたい衝動をぐっとこらえた。

「1…スタート！」

「散開っ！」

なのはの合図と同時に無数のアクセルシューターがフォワード陣に降り注ぐ。

案の定回避のタイミングを誤った将臣だったが、間一髪スバルに

抱えられ回避に成功した。

（ま、将臣さんなんで動いたんですか！？今ギリギリでしたよ！）

（避けられると思ったんだよ！悪ぃなスバル！もう大丈夫だ！）

ビル内部で将臣と別れ、ティアナの指示に従ってスバルはウイングロードを展開する。

「へぇ…やるねティアナ」

スバルとティアナの幻影をアクセルシューターで打ち消し、落ち着いた様子で辺りを見回す。

なのはは空間把握能力が高く、戦いと訓練で磨き抜かれた洞察力も相俟って奇襲を事前に察知していた。だが。

「え？」

周囲のビルからの奇襲ではなく、何故か一直線に剣を構え走ってくる将臣を確認した時、なのはは一瞬戸惑った。

普通に考えればティアナの幻影魔法だ、空を飛んでいる自分に空を飛べず、クロスレンジしか攻撃手段を持たない者が真正面から走って来る訳がない。

なら何故戸惑うか？ごく簡単な事で、『将臣ならやりかねない』からである。

「ティアナの作戦かな？」

もし単純な独断行動だったら流石に目も当てられない、いや、幻影魔法かどうか戸惑わせる事まで読んでの行動なら褒めるべきかもしれない。

（アクセルシューターは二発、あれを迎撃するとなると守りが薄くなる…ウイングロードがない限りもし本物でも将臣くんの攻撃は届かない）

跳躍や剣の投擲を想定し高度をやや上げながらなのははウイングロードが背後に展開された事を感じ取り後ろを振り返る。

「でぇやぁぁぁぁ！！」

ウイングロードには拳を振りかぶったスバルの姿、それと同時にストラーダのブースター音が右から鳴り響いた。

後ろには将臣、正面にはスバル、右にエリオ。

それらを見たなのはの判断は早かった。

まず考え得るパターンを同時に幾つもシミュレートする。

まずフリードが奇襲、または援護して来る事は確実だ。後方の将臣が幻影だった場合、術中のティアナは攻撃が出来ない。将臣が変わりに奇襲要員になるが周囲のビルから飛びかかってくるか剣を投げる博打しかない。

スバルやエリオ全員が幻影だった場合も同じだ、だがメリットがない。奇襲パターンが絞られる上に稼げる時間も少なくジリ貧だ。

全員本物だった場合、恐らくフリードは上空、ティアナは誘導弾で狙撃してくるだろう。

だがそれはない、自分が避ければスバルとエリオは衝突するだろう、ならばどちらかがタイミングをずらす筈だ。

同じタイミングで同じ場所を狙うメリットはない、この状況なら時間差攻撃が有効なのはティアナなら見落とさない。

（スバルと将臣くんは幻影…多分キャロはエリオのブースト中、エリオの突進からフリードの奇襲、スバルと将臣くんがウイングロードで挟み撃ち、かな？）

一秒後、なのはの予想通りの展開になるのだが、自分の動きを制限しているなのははスバルの一撃を浅いとは言え受け、朝の訓練は終了となった。

ただティアナとスバルのデバイスは遂に限界を迎え壊れてしまった。

第六話

予想していた通り、だが予想よりもずっと早く事件は起きた。

レリック、機動六課が探しているロストロギア。赤い宝石のような結晶は高密度の魔力結晶であり、暴走すれば大規模な被害をもたらす危険な存在だ。

それが今、山岳地帯を走るリニアレールに積まれ、今この瞬間にもそれを回収しようとするガジェットがリニアレールのシステムを乗っ取っている。

この日、部隊長である八神はやては、機動六課初の出動命令を下した。

「空戦タイプ？うん、わかった。そっちはまかせて」

現場に向けて移動中のヘリの中で、なのははシャーリーからの新たな情報と任務の修正を聞いていた。

本来ならばリニアレールのガジェット攻略にはなのはも参加する筈だった、だが空戦型ガジェットが出現した事でそれは叶わなくなった。

空戦魔導師でないフォワード陣には荷が重い、何より確実に制空権を確保しなければヘリやスバル達にも危険が及ぶ。

やはり心配だったが、何時までも守ってあげられる訳ではない。

「私は先に行っちゃうけど、緊張しないで、普段通りやればきっと大丈夫。いざとなったら私やフェイト隊長がついてるから、みんな通信で繋がってる、一人じゃない事を忘れないで」

開けられたハッチの前に立ち、風に髪をなびかせながらそう力強く、優しく言葉を言い残しなのはは走り出した。

「スターズ1、高町なのは…行きます！」

そのまま空へと飛び出し、数秒後眩い桃井の光が発生したかと思うと、その光の中から白い魔導師が飛び出していった。

ヘリのパイロットであるヴァイスはなのはを見送った後、首を正面に戻すついでにフォワード陣とリインフォースを何となく見た。

場慣れしたリイン曹長は情報の整理と作戦の見直し作業中のようで真剣な表情でモニターを見ている。

スバルとティアナはやはり緊張している様子だが目には力を感じる。

エリオはどこか怯えた様子のキャロの手を握り、優しく何か語りかけているようだった。

そして、一番気になっていた人物に視線を向けた瞬間、ヴァイスは顔が引きつるのを感じた。

この作戦に参加させるかどうか部隊長や隊長陣が一番悩んだであろう人物、灘将臣。

陸士部隊出身であり管理局入局前からなのは達と事件に何度か関わっていた経験を持っている。

活躍はともかくその実戦経験がある事で作戦参加許可が出た男、ヴァイスも流石に緊張してはおらず普段通りおちゃらけているとばかり思っていた。

だが違った。

将臣は手を組みそるを口元に当てた状態で固まっている、視線や床に向けられているが明らかに床を見ていない、心ここにあらずという状態なのが一目で分かる。

顔色は蒼白で、硬直した表情とは裏腹に体は小刻みに震えているように見える、決してヘリの揺れだけではない。

ヴァイスは正面に向き直り操縦桿を握った。あそこまで怯えた人間を見た事がなかった、いや、見た事はあった。

だがそれは悲惨なめにあった被害者や過ちを犯した過去の自分のような、そんな手遅れの状況に陥った人々だけだった。

始まる前からただの恐怖であそこまで絶望的な表情をしている将臣に呆れを通り越し怒りを覚えた。

「っ！おぉっし新人共！なのはさんが制空権を抑えてくれてるお蔭で安全にポイントまで到着だ！頑張って来いよ！」

階級こそ下だが将臣は一応先輩にあたる、だがヴァイスはもう何も言う気にはなれなかった。

「「「「はい！」」」」

新人達はやはり緊張を感じさせる返事を返しながら、それでも自分に出来る事、やらなければならない事に向き合っていた。

キャロもまだ不安を抱えてはいるが、返事はしっかりと返した。

「スターズ3！スバル・ナカジマ！」

「スターズ4！ティアナ・ランスター！」

「「行きますっ！」」

二人の少女がハッチから身を踊らせ、次にゆっくりと立ち上がった将臣がハッチに立った。

「出来ないと思うなら、無理に行かないほうがいいんじゃねぇか？」

ワザと乱暴で投げやりな言葉を言いながら、もう知らねえ！とほうっておけない自分は隊長達ほどではないがお人好しだと思ってしまう。

「…スターズ5、灘将臣、出る」

ヴァイスの言葉に反応し、振り返って苦笑いを浮かべてから将臣はハッチから一歩踏み出し落ちるように飛び降りた。

「セットアップ」

落ち着いた、だがどこか嘆くような口調で呟いた将臣の体をクリ

アグレーの魔力光が包み込んだ。

装着した騎士甲冑はスターズでありながら将臣が白を嫌がり、カーキ色を基調とた上着とズボン、黒いインナー、細部も色に合わせた配色がされたものになっていた。

なのはのバリアジャケットをイメージしている為、スバルと似通ったデザインをしており、長ズボンである事以外は特に変わった点は見受けられない。

どことなく、荒野を当てもなくさまよっていそうなそんな印象を受ける。

ガンッ！と軽い金属音と衝撃音の混じった着地音を出しながらリニアレールに降り立った将臣だったが、その場に片膝をついた着地姿勢のまま動こうとしない。

ガジェットがすぐ襲って来ないのはスバルとティアナが既に戦闘中である為だ。だが発見されるのも時間の問題だろう。

だが将臣は何の装飾もなく、一見鉄の切れ端のようにも見える片刃の片手剣、グラムを抜く事さえしない。

ヘリの中からずっと悩んでいるからだ。

（おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい、なのはさんの台詞はもっとあったし、キャロちゃんに話しかけてた筈だ…僕の記憶違い？いや…元々僕の記憶なんて只の妄想の可能性が高いんだ、でももし僕が六課に来た事で未来が変わっていたら？本来なら苦戦はするが誰も死なない、だが本当に未来が変わり始めてるなら

そうとは限らない、だけど僕が手助けしたとして皆は成長するか？問題の先送りじゃないのか？）

これまで訓練の進行スピードを落とさないギリギリの実力を維持させて来たつもりだった、むしろお荷物である自分がいた分皆は記憶より強くなっている気がする。

だが結局その記憶が信じるに値するものか今でもわからない、何より持っている知識は最初から完全ではない上に途中から完全に途切れている。

そう、ジェイル・スカリエッティを逮捕し事件を解決するまでしか将臣は知らない。そこから先は知らないし、細部も記憶の風化や元々の知識の限界でわからない。

子供時代にノートに思い出せる事全てを纏め、些細な事も全て思い出し次第書き留め毎日読み返している。

それでも記憶が風化しそのノートの内容が果たしてちゃんとした記憶かどうかも疑う事がある。

突き進むと決めたあの日から今日まで自分を鍛えて来たが、早速変わった現実に決意と判断が揺らいだ。これが危険を伴う事件であり、結末や詳細を知っている場面に自ら参加した初の実戦、遠回しに関わる事があってもこうして手の届く位置まで来た事は今までない。

「エリオ君っ！」

「っ！？」

キャロの叫びが放心状態の将臣の耳に届き、意識を刺激した。

顔を上げると数メートル先で宙に舞うエリオと、それを助ける為に飛び出してキャロの姿があった。

（僕は何分放心していたんだ？）

リインフォースから通信がないとは思えない、きっと耳には届いても頭には届いていなかったのだろう。いや、もしかしたらガジェット？型のＡＭＦのせいで通信が遮断されていたのかもしれない。

「エリオ！キャロ！」

石になったように動かなかった将臣は漸く立ち上がり谷底に視線を落とす、そこには眩い光が広がっていた。自分とは違い、立ち止まらず前に進み続ける少女が出した光だった。

（皆生きている、物語じゃない…だからこそ、僕はどうしたら）

シュキンと金属がこすれる音を響かせながらグラムを抜き、這い出してきたガジェット？型に向かって走り出す。

こちらに気付いていたらしくガジェット？型はアームを伸ばしこちらを捕獲しようと動き出すが、将臣はそれを受けも避けもしない、必要がないからだ。

「一閃必中！うおぉぉぉぉ！」

将臣にアームが届く瞬間、エリオのストラーダの強化された一撃がガジェット?型を捉え、真っ二つに引き裂いた。

それを確認した将臣はグラムをだらんと一度垂らし、それから峰で肩を数回叩きながら苦笑いを浮かべた。

「あーあ、俺が倒そうと思ったのによぉ」

「え?あ…すみません」

ガジェット掃討とレリック確保の通信が入ったのはその直後だった。

◇

帰りのヘリの中、将臣はリインフォースにこっぴどく叱られた。

予想通りＡＭＦの影響で通信は荒れていたようだが、雑音としては届いていたらしく、流石になんの返答もしないのは有り得ないとの事だった。

それに一番の問題はスターズＦと合流せず、着地したままずっと放心していた事だった。

「聞いてるですか！？」

「聞いてる聞いてる、いやぁあれだ…ちょっとぼぉっとしてたのは悪かったよ」

ごめんごめん、と付け足しながら手を合わせ頭を下げる将臣、リ

インフォースはギリギリと歯軋りし、「もう知りません！この事はしっかり報告するです！」と言って離れていった。

「ふぅ…」

やっと終わったか、とでも言いたげな溜め息と視線をリインフォースの背中に向けた将臣の頬を何かが打ち抜いた。

乾いた音はヘリの出す音にかき消される事なく響き、視線を向けていた者も視線を向けたものもギョッとした。

「痛たた、これってパワハラじゃない？」

右頬をさすりながら平手打ちを繰り出した人物に視線を向ける、そこには真剣な表情で将臣を見つめるなのはの姿があった。

見つめる、というよりも『睨む』というニュアンスの方が正しいかもしれない。

「どうして…そんな風にしてられるの？」

「十人十色って言葉知ってるか？こういう性格だからな俺は」

「…そう、いくら話しても無駄だって。そう言う事？」

将臣は初めてハッキリとした失望と軽蔑の眼差しをなのはに向けられた、以前までは眼差しの中にはそうじゃないと言う期待と、少なからず友人と言う気持ちが込められていたからだ。

「いくら頑張ったって給料はおんなじなんだ、死なない程度に頑張

るのが賢いやり方だろ？」

その場にいた全員の気持ちを代弁し、なのははもう一度将臣の頬を叩いた、先程よりも強く。力と怒りと軽蔑を込めて。

第七話

リニアレールの事件から2日、僕は2ヶ月の減給処分、停職にならなかったのは実働部隊でいざ人が停職でいませんじゃ意味がないからだと思う。

あの日以来、当然ながら僕への風当たり、というか視線は目に見えて冷めていった。当然だろう、まるで反省も改善しようと努力も見せてはいないんだから。

あの後はやてちゃんに呼び出されたり、シグナムさんに殴られたり、ヴィータちゃんに辞めちまえと言われたり、とりあえず全てが終わってから部屋で自分を殴らずにはいられなかった、我ながら最低の態度と言葉だった。

「あぁ言う言葉が思いつくって事は、内心ではそう考えているって事なのかな」

最近こうしてベッドに寝てもなかなか寝付けない、なのはちゃんの教習も負荷をかけてるからもちろん疲れるし、自主錬も続けてる、体は疲れてるのに眠れない。

僕がやってる事が間違っているのはわかってる、ちゃんとした実力を出してしっかり出世していれば救える命はもっと多い筈だ。

でも記憶が忘れられない、ハッピーエンドだとわかっているけど、知っている自分が知らない顔して無視は出来ない。

でも少なからず関わった事で状況が悪化しているかもしれない、

関わるのを止めるにしても、今更遅いかもしれないし。いや…今なら間に合うのかも知れないけど…わからない。

「どうしたらいいんだ…」

思わず壁に八つ当たりしてしまった。ズンっと鈍い音が響く、ズボッでも良いかもしれない…どうしょう…か、壁に穴が。

「将臣、いるか？」

「シグナム？」

何だろう、わざわざ来るって事は仕事の連絡じゃないよね。

ドアロックを解除して扉を開ける、同時に何故か木等が飛んできた、こう…ひょいって感じじゃなくて、ブン！って感じで…。

「あだ！？」

「拾え、そして準備しろ…特別訓練メニューが組まれた」

流石に予期していなかったフライング木刀アタックは僕の顔面に直撃、鼻血が出た。

「と、特別メニュー？」

「あぁ…一応私が教官だ、武器も似ているからな。早くしろ、私も暇ではない」

誰が言い出したんだろう、すっかり見放されたと思ったんだけどな。

「何を泣いている？」

「木刀が痛かったんだよ！」

◇

特別訓練メニュー、誰が考えたのかはこの際考えない事にするとして…ごめんなさい凄く怖いんで止めませんかこの訓練？

「目を瞑るなと言っているだろう、お前にはまず度胸が足りん。それともお前は目を瞑った攻撃も防御もこなせる天才か？」

シグナムさんの振るう木刀が鼻先数ミリを通過していく、時に眼前、時に急所、背後とつい反応してしまいそうな恐怖を感じる場所をワザと大振りで空振っていく。

（これは…キツい！）

バリアジャケットでもデバイスでもない、ただの服にただの木刀…殺傷設定でもシグナムさんはレヴァンティンを振るってミスはしないだろう、でもこの木刀はどうなのだろうか？今日初めて握ったという訳ではないと思うけど…。

（な、なんでこんな訓練を？）

時折顎の下も通過するので下手には喋れない、多分下手に動くと当たる。

（お前は足が竦んでいたようだからな、それにその後ガジェットに突撃したが、間合いもなにもなかった）

だってあれはエリオ君を感知させない為のアシストだし、攻撃も防御もいらなかったからただ派手に突っ込んで！

なんて言える筈もなく…。

ビッ！

「うおぁぁぁ！？袖斬れたぁぁぁ！？！」

「下手に動くな、体には当てないと言ったハズだが？」

「無理だから！つかこれ訓練じゃなくてイジメだろ！」

「なら辞めるか？」

六課を、という言葉が前後どちらかにつくような気がした。…でも正直怖いよこれ、いや叫んだりは演技…だけどさ。

「もっと他のにしようぜ！組み手とか！」

「ほぅ？」

地雷踏んだ。そう思った時には背中から倒されていた。

木刀を手放し、顎を右手で押しつつ左手は僕の右手を引く、後は右足を僕の両足の後ろに滑り込ませるとあら不思議。重心を後ろに崩された僕は下がる事も受ける事も出来ずに背中から倒れるって寸法だ。

因みにこれを本気でやると後頭部から地面に激突する、そのまま自分の体重も加えれば人は下手すると死ぬ、背中から倒れたのはシグナムさんの手加減だ。

「痛〜〜〜っ！」

ゴロゴロ転がる僕を見下ろしながらシグナムさんが落とした木刀を構えた。

「セットアップしろ、組み手をやる」

「ぐ…上等っ！セットアップ！」

イージスと騎士甲冑が瞬く間に展開される、グラムは抜かず右手には木刀を握ったままだ。

「はやくそっちも甲冑出したほうがいいんじゃないか？」

「いや、…これで十分だ」

ですよね〜。っと、冗談言ってる場合じゃないよね…ここはしっかりと！

「舐めるなぁぁ！」

「遅い」

上段に構えた木刀を振り下ろす前に、シグナムさんの強烈な太刀筋が騎士甲冑ごしの胴にめり込む。

「がふっ！？」

薄いとは思ったけど、騎士甲冑の強度あって無いようなものじゃないか！

胃からこみ上げて来たものをなんとか喉で留め、再び胃に押し返すと同時にようやく一時的に止まった呼吸が再開された。

「どうした、終わりか？」

「い、今のはレディーファーストの精神をつい出しただけだ」

これはとても勝てない、レベルが違うぞ。

「ならばもう遠慮はいらんぞ、来い」

「でぇやぁぁぁ！！」

でもこれは太刀筋や返し方を見る良いチャンスだ、僕とどう違うか検証出来る。

渾身の力で放った突きは、シグナムさんが右手前に一歩踏み出した事で呆気なくかわされる。

間合いを詰める速度と詰めてくる距離が洒落にならない！

突きを引き戻す暇なく再び胴に木刀がめり込む。予想していた為吐いてしまう事はなかったが、鈍い痛みと共に再び呼吸が止まる。

「んの野郎ォ！」

だがそれでも構わず左手で胴を打った木刀を掴み、卑怯だとは思いつつも全力で木刀を横一閃に振る。

「苦し紛れか…醜いな」

屈み込み余裕を持ってその攻撃を避けながら、シグナムさんは体を捻って木刀を引き抜く。片手でそれに対抗する事は出来ず、重心を崩され二、三歩前に踏み出してしまう。

「せぃ！」

捻りの勢いをそのままに横に一回転した鋭い太刀筋が三度目の胴に吸い込まれていく。

もう騎士甲冑の有無も予想も関係ない、今までで一番強烈な衝撃と痛み、そして吐き気に襲われた僕はそのまま倒れ込んだ。

「ここまでにしよう、やる気があるならまた明日この時間にここへこい」

失望も期待もこもっていない淡々とした声、「仕事でやっている」そう言われたのと同義の声色だった。僕が望んだ影響力が少なく、見ていられる立ち位置、そこに立った事を実感した。

だからこそ、目を瞑り、歯を食いしばっていなければ泣いてしまいそうだった。

（待って下さい、僕は…僕の力はこんなんじゃない！こんなんじゃないんだ！）

決して言葉にも念話にも出来ない叫びが頭の中でこだました。

◇

本当はなのはちゃん達と仲良くしたかった。

本当は活躍したかった、一緒に戦いたかった。

でも…それが皆の成長や、戦いの邪魔になってしまったら？未来が悪い方向に変わってしまったらどうしたらいい？

関わらない方がいいんだ…でも、僕の記憶を信じるのか？少なくとも今は殆ど順調だ…そう、『殆ど』。

『闇の欠片事件』、まずそれがおかしいんだ…あれは確かゲームオリジナルの筈だ、いわゆるifやパラレルワールドの話だ、だから僕が知っている未来とは分岐してしまう可能性が高い。

それにゲームでは皆は勝ったけど、実際にリインフォースやマテリアル、過去とは言え守護騎士やなのは達、それらに勝てるとは思

えなかった。

いくら過去の自分達より強くなっていたとしても多勢に無勢、負けは目に見えていた。

あの日、休みを利用して僕は地球に帰った。闇の書事件に関わらなかったのはミッドでデバイスの入手と、魔法についての知識をしっかり学びたかったからだ。

そして『闇の欠片事件』は行った。もちろん僕も参戦した、本気だった。

五ヶ月間授業を殆どサボって漸く手に入れたストレージデバイスのグラムと、インテリジェントデバイスのイージス、もっともこの時の2つは外見こそ変わらないものの中身はかなり旧式でシンプルなものだった。

いわゆる骨董品だ、まともなデバイスなんて手に入る筈もなく、使えそうなジャンクパーツや古代ベルカ色のデータを集めてはデバイスマスターの元に足を運んでなんとか実用段階まで仕上げてもらったものだから使用者の事やスペックなんて二の次だった。

グラムは斬れれば、イージスはカートリッジシステムさえあれば良かったからだ。

僕が戦ったのは王のマテリアル、相性が良かった事もあって撃破に成功した、ただカートリッジシステムの負担で体はイカレた、グラムを振る右腕と砲撃魔法を使う左腕は特に酷かった。

その後だ、理のマテリアルと遭遇した、泣いていた…。

闇の書が集めた記憶をもっているからか、なのはちゃんの意識がまだ強いからなのか、マテリアルは僕を避けた事、中途半端に巻き込んだ事をひたすら謝ってきた。僕は精一杯謝罪をして、それから目を閉じたマテリアルにグラムを突き立てた。

夢から覚めたら仲直りしようと僕は嘘をついた。

最後に戦ったのは力のマテリアルだった。相手も戦闘後なのかダメージはあったけど、勝てる見込みはもうなかった。　事前に用意していたカートリッジはまだあったのだけど、やはりガラクタ同然のデバイスには無理があった、カートリッジロードと同時にイージスは魔力を処理出来ず暴発してバラバラになった。

盾と唯一の生命線を失った、右手はバインドで無理やりグラムを握らせていたけど、マテリアルのスピードとパワーの前に傷ついた僕は成す術がなかった。

死を覚悟した時、助けてくれたのがシグナムさんだった。シグナムさんもボロボロだった。

後から聞いた話では、マテリアルを始め思念体の攻略には多対一で望んだらしい、なのはちゃんやフェイトちゃん、シグナムさんの思念体を始め、マテリアルの力も圧倒的だったからだ。

フェイトちゃんに似た力のマテリアルが満身創痍で逃げ、それを捜索している時にたまたま僕がいた結界を見つけたそうだ。

マテリアルを倒せば思念体は消える、逆にマテリアルがいる限り思念体は増える。シグナムさんはマテリアルの相手をせず、目眩ましに一度大技を使ってから結界の外に出た。

僕がアースラに治療の為収容されたのと、マテリアルの全滅したのは殆ど同時だった。

きっと、僕が余計な事をしなくとも皆は勝ったのだろう。そんな事を感じたのを覚えている。

以降僕は体にリミッターをかけた、静養の為だ。

僕はカートリッジシステムを扱えず自爆した事にした、カートリッジシステムの危険性をもう一度考えて欲しかったという理由もある。

そのおかげかわからないけどなのはちゃん達はシャマルさんから定期的に検査を受けて、あの撃墜事故を防ぐ事が出来た。

傷は負ったもののなのはちゃんは僕の知るような重傷ではなくなったのだ、でもなのはちゃんや周りの人達は無茶させてしまった、してしまった事認識をしたようだった。

これは改善だったのか、歪めてしまったのか、僕にはまだわからない。

第八話

灘将臣、彼の事を考えるといつも溜め息が出る。

何を隠そう六課に彼をねじ込んだのは僕だ。もっとも彼は最悪犯罪紛いの手段を使ってでも六課に転属する算段だったらしいが…。

彼への印象は出会った頃からあまり良い物ではなかった、今でも彼の考えは理解出来ない。そんな僕が彼の六課入りに協力したのは九年前の会話が発端だ。

（クロノちょっと訓練したいんだ、良いか？）

（ん？あぁ別に構わないが…）

（ありがとう）

「訓練にクロノ借りて行きます！」

「ちょっと出て来るよ」

「あら？せっかくのお休みに珍しくわね二人共」

「クロノ君やりすぎちゃダメだよ？」

「わかってるよエイミィ」

この日は長期休暇で地球にいた、珍しく将臣も地球に帰還していて、これまた珍しくやる気を出したのかと少し驚いた。

「で、なんでまた突然やる気になったんだ？」

「その前に結界を頼む、俺張れないから」

街の一角に結界を張り一応その前にエイミィに念話で結界の事を伝えておいた、思ったより本格的にやるつもりのようだ。

「これで通信は通らないね。…ふぅ、ごめんねクロノ君せっかくの休暇なのに」

「どうした突然、君がそんな事言うと少々気味が悪いな」

「単刀直入に言うよ、僕はこの先の未来をちょっとだけ知っている。その未来を変えたくない、だから見守れるポジションにいたいんだ。その為に協力して欲しい」

「…馬鹿な冗談で僕をからかうなら僕は帰るぞ？」

「そう思うのも無理ないよね、だけど事実なんだ、君はそう遠くない将来はやてちゃんを部隊長にした部隊設立に力を貸す。クロノ君が協力してくれれば部隊入りは難しくないんだ」

とりあえず話だけ最後まで聞いてやろう、そう思った僕は将臣が話終えるまで黙っておく事にした。

「信用出来ないよね？逆の立場なら僕も信用出来ない、だから手合わせしよう。実力があれば、問題ないと思うから」

そう言って将臣はセットアップした、将臣の騎士甲冑の性能はかなり低い。今は武装隊のアンダーウェアをイメージした甲冑のデザインにしている、理由はデザインを考えるのが苦手だからなんだそ

うだ。

「…デュランダル」

続いて僕もバリアジャケットを装着する、最後に将臣と手合わせしたのはいつだったか？実力は言わずもがな平均以下だった。

そう思った僕を責められる人がいるだろうか、彼と行動を共にした者なら誰もが負けるとは思わないはずだ、何故なら彼はそう思われる実力しか見せていなかったのだから。

だから僕もその時は一撃で終わる、そう思った。しかし出だしから予想を覆された。

「な！？」

「どうしたの？」

「な、なんで飛べるんだ！？」

たしか将臣空は戦適性もなくユーノやなのはが教えても飛べなかった筈じゃないのか！？

「なのはちゃんやフェイトちゃんには敵わないけど、僕も戦えるんだよ」

ガシャンとカートリッジが一発ロードされ、盾の側面から薬莢が排出された。

「カートリッジでドーピングすれば、僕でもそこそこ戦える！行け

アクセルシューター！」

「なんだって！？ちゃんと説明を…く！スティンガー！」

五発生み出した誘導弾で向かってくる二発のアクセルシューターを迎撃する、カートリッジをロードしたにしては威力はなのはの通常時よりやや低い。

「アーク！」

っ！そうか、今の誘導弾は基本魔力、この追撃にカートリッジの魔力を使ってるのか！

とっさにバリアを張り、同時に空間固定型のバインドを詠唱する。場所は僕の背後、不意打ちに対する罠だ。

「セイバーッ！」

グラムの刃に上乗せされたクリアグレーの魔力刃が太刀筋にそって打ち出される、フェイトが良く使う技だ。バリアに噛む性質がありなかなか消えないので本来は避けるべきなのだが、生憎油断していた僕にはその余裕がなかった。

「今まで手を抜いてたのか！なんの為だ！」

「僕がでしゃばるのは危険なんだ」

「なんだって？一体どういう！」

アークセイバーを受け止め、動けなくなった僕を背後から攻撃するものだと思っていた僕は完全に裏をかかれた。

「バリアブレイク！？」

罠を張っていた事でまだ僕は油断していた、将臣はアークセイバーを受け止めているバリアに左手を押し付けた、そして次の瞬間にはプログラムに外部から割り込まれたバリアが簡単に砕けた。

「紫電…一閃！」

グラムを振りかぶっていた将臣は一気に二発カートリッジロードした、確かにこの間合いなら一番有効な技だ。

（どれだけ魔法を盗んでいるんだ！？）

ギリギリの所でデュランダルでのガードに成功した僕は高度を上げ間合いから離れる、ベルカ式相手にクロスレンジでやり合う必要はない。

「斬れなかったか…やっぱり魔力変換資質がないと、時間がかかるし威力も出ないや」

グラムが纏った炎はカートリッジ数を考えても弱い、シグナムは一発のロードであれの二倍の火力は出すだろう、もし今のがシグナムならデュランダルを斬られていただろう。

「わかった、手加減はいらないみたいだな。小手調べはもういいな」

「僕は精一杯の不意打ちだったんだけどね」

きっと将臣は僕らの魔法をあらかた習得している筈だ、やたらと色んな魔法をしりたがっては失敗していたのは演技だった訳か。

（現時点…いやこれから先もクロノ君には勝てないかもしれない、だから実力も手の内も知られていない今しか勝つチャンスはない、勝てばきっと信用して貰えるはずだ）

「イージス！カートリッジロード！フルドライブ！」

イージスに一度に装填出来るマガジンは三つ、全部で三十発。今はまだ一度に五発までしかロードした魔力をコントロール出来ない、いつか一気に三十発ロードをものにするつもりだ、出ないとなのはちゃん達を手助け出来るような力は出せない、基本魔力の低さはどうしょうもない。

「雷光一閃！ジェット・ザンバーーッ！」

「エターナル・コフィン！」

劣化版雷の剣が闇の書の防衛プログラムさえ凍結させる氷と正面からぶつかる。

本来なら勝ち目はない、だけどクロノ君の詠唱を破棄し急遽発動させたエターナル・コフィンは本来の威力を発揮していない。

「イージス！カートリッジロード！」

無茶だ。僕とクロノ君は同時に思った、だが僕は止めなかった。押し返される雷の剣を届かせる為、断続的にカートリッジをロードする、制御は追いついていない、だが今はそれでもいい。魔法は発動した、魔力刃に回す魔力と体を強化する魔力に大ざっぱに分ければいい、体には痛みが走ったが止める訳にはいかない。

「斬り…裂けぇぇぇぇぇ！！！」

◇

「ん…久々にぐっすり眠れたなぁ」

将臣は自室のベッドで上体を起こし、両手を目一杯左右に伸ばした。

なにか懐かしい夢を見たような気がした、唯一自分の実力を知る人物とのやりとりだったような気がする、なんで今更思い出したのだろう、やはり誰かに評価して褒めて欲しいのだろうか。

全てを話した時、クロノ君は苦虫を噛み潰したような表情をしていた。僕の行動と考えはおかしいと、親身にアドバイスと忠告をしてくれた。

僕自身もっと違うやり方があったとは思う、一重にこの道を選んだのは自信の無さ故だ。

期待されるのも怖い、自分に自信なんてない、何より自分の記憶が気持ち悪かった、僕はきっと壊れているんだと感じる。

全てを話して避けられるより、期待されてそれを裏切るより、最初からなにもない方が楽で、何より無くすものはなくて済んだ。

これは自己満足でとてつもなく楽で迷惑な人生を歩んでいる。記憶なんかなければ僕はただなのはちゃん達の友達でいられたかもし

れないのに…。
あ…早く朝練行かないと…。

「あれ？早過ぎたかな…」

まだ訓練所には架空の建造物すら展開されていない。

「あぁ…一時間早くアラームかけてたんだっけ」

最近寝付きが悪い　ので夜練を止め、寝る努力をする時間に回した、故に今日から朝練の前に秘密の朝練をする事に決めたんだった。

ここで何かやると熱中して人が来るのを忘れそうだ、イージスと魔法のプログラムを弄ろうかな。僕は創作力があまりないから使ってる魔法は他人が作ったものばかりだ、魔力はプログラムだからデータと条件さえ満たせば使う事が出来る。

僕が使えないのはスターライト・ブレイカー、苦手なのは魔力変換資質が必要な魔法だ。

紫電一閃もジェット・ザンバーも発動時間や消費魔力をかなり使う、威力も本家には敵わない。それでも使ってしまうのはベルカ式の戦闘スタイルに合うからだ。

「収束砲はとても実用出来ないからなぁ」

やろうと思ったら収束だけで五分以上かかる、実戦で使用出来るレベルじゃない。

「イージス、リミッターを解除しても平気かな？ほんのちょっとだけでいいから」

帰ってきた答えはＮＯだった、僕のリミッターはなのはちゃん達とはちょっと違う、魔力にではなく魔力で体に制限をかけている。闇の欠片事件意外にもちょくちょく続いた無茶のツケだ、それをイージスはいざという時に力を発揮する為に私生活や訓練ではこれ以上のリミッター解除は控えた方が良いと判断されたようだ。

「そうだね、それじゃなくても訓練してるから体力は使ってるからね」

スカリエッティ逮捕まで持てばいい、そのつまりで体力配分している。多少の無茶をしないと力にはなれない差が存在するからだ。

なのはちゃん達がやっているのが長距離走だとすると、僕はある区間だけ付いていこうとする短距離走だ、だから燃え尽きる気で体を酷使出来る。

「無駄な話をし過ぎたね、バインドの発動短縮を模索しようか」

様々なバインドのプログラムを検証し、より自分に合い、尚且つ効率的で効率化出来そうなものを探る、これをやるとあっという間に時間が過ぎる。行為作業は好きだ、なにか宝探しをしているような気分になれるからかもしれない。

「あ、変換資質が必要なヤツは除外しようか、攻撃は攻撃で分けよう。僕が欲張ると中途半端になるだけだからさ」

まだ冷たい朝の空気がとても心地よかった。案の定なのはちゃん

達が来たのに気づかない程僕は宝探しに没頭してしまい、ギリギリの所でイージスに教えてもらい事なきを得た。

「おは～！みんな遅いぜ寝坊かぁ？」

久々に清々しい気分だったからかもしれない、いつもより余計に声を大きくしてしまった。

第九話

現在時刻１４００、午後の訓練の真っ最中だ、内容はほぼ恒例となっている対ガジェット戦。

今回はガジェット?型２０機の捕獲及び破壊が目的だ、動きや攻撃精度の詳しい数値はわからないけど、以前と比べ明らかに強くなっている事は確かだ。

現在の撃破スコアは1機、僕は基本的にスバルちゃんとの同時攻撃が基本なので攻撃パターンは一番少ない。

「ハァ…ハァ…」

マズいな、そろそろ本気で体力の限界が近いかな…個別訓練が加わってから更にハードだ、回復より消耗の方が上回って来てるな。

（スバル！そっちに追い込むから手筈通りお願い！将臣士長もお願いします）

（ＯＫティア！）

（了解だ）

やっぱり階級も上、年も上だとティアナちゃん的には指示し辛いよね、実力は下だから余計に使いどころに困るし。

ビルの影に隠れていた将臣は念話で聞こえるティアナのカウントに合わせグラムを握る手に力を込める。

相変わらず目立った成長が見られない将臣だが、それでも最低限の役割をこなせるのはティアナの指示と仲間との連携があればこそだ。

（3…2…1…今！）

「リボルバァァァ！シュート！」

「空牙！」

間合いに入ったガジェット？型の進路に同時に飛び出し、互いにカートリッジを一発ロードした衝撃波攻撃を放つ。

将臣の使った技はシグナム直伝であり、将臣用にアレンジされた魔法だ。一度イージスに納めたグラムをカートリッジロードと同時に居合いの要領で抜き放ち、衝撃波の斬撃を打ち出す対ＡＭＦ用に使えとのシグナムの心遣いだ、何より魔力変換資質が必要のない単純な魔法の為将臣も体得出来ると踏んだらしい。

スバルの撃ち出した衝撃波は三体のガジェットを粉砕し、将臣の衝撃波は二体を行動不能にした、完全に破壊しきる威力は出ていない。

「ティアごめん！一体討ち漏らした！」

「悪い俺だ！間合いが遠かった！」

慌てて引き返したガジェットを追おうとするが既に足にきていた、しっかりと上がっていなかった足は瓦礫に躓き転んでしまった。

（大丈夫任せなさい！）

慌てて体を起こしながら離れていくガジェットを見る、スバルも既にウイングロードで後を追っている。

だがスバルが追いつくより先に狙撃ポジションに移動していたティアナの多重弾殻射撃がガジェットを貫いた、恐らく前もって討ち漏らしのフォローに回っていたのだろう。

「さっすがティア！」

「ま、当然よ」

グラムをイージスに納め立ち上がる、訓練が終わった事でアドレナリンや集中がキレたのかどっと疲れが押し寄せて来るのを感じた。

「何はともあれこれでお終い、だよな？」

独り言のように呟いた言葉には誰も反応しなかった、別に無視されている訳ではなく普段から愚痴や文句、弱音など独り言を言う頻度が高いからだ。

「みんなお疲れ様、今日の訓練はここまでにしようか」

空からモニターしていたなのはちゃんが降りて来た、別ルートでガジェットを待ち構えていたスバル君とキャロちゃんも直ぐに合流した。

「今の訓練の反省と良かった所をしっかりイメージしてね」

元気、とは言えないが負けじと元気なスバル達に合わせて返事をする。

「あ、将臣士長はちょっと残ってくれないかな？」

「え？あぁ…了解」

なんだろう？思い当たる節があり過ぎる。

互いに騎士甲冑とバリアジャケットを解除し、皆が先に行ったのを見計らってなのはちゃんが口を開いた。

「訓練…これからもっと辛くなるよ、将臣君は大丈夫？」

別に馬鹿にしている訳でも皮肉でもない、純粋に心配してくれている。

「平気平気、体力はかなり付いて来たし！」

なのはちゃんは相手が困っていたら手を差し伸べる子だ、だから僕はずっと昔から同じ表情で、同じ視線で答える。「ほうっておいてくれ」それが僕の願いだときっと気付いているのだろう。

本当に悲しい目も、弱い表情も、決して見せない。辛いと思う事はあるけれどやっている事は簡単だ、信頼される人間になる力がない癖に、わざと信頼されないよう振る舞ってる自己満足なのだから。

「…将臣君は昔言ってたヒーローになれた？」

「これからなるんじゃないか？」

ヒーロー、なれる事ならなってみたい。

「そっか、ごめんね時間とらせちゃって」

「別に、お喋りは嫌いじゃないし」

なのはちゃんは何かもっと別の事を言いたかったのかもしれない、でも僕は彼女に謝られるのが嫌だった。謝る事なんてないんだから。

なのはちゃんと別れた僕は遅めのシャワーを浴びた、あの後座ったら膝が笑って立てなくなってしまったからだ、我ながらかなり情けない姿だった。

「ただの一般人レベルなんじゃないのかな…これ」

見た目には結構鍛えていると思う身体、抑えているとは言えそこそこやれると思っていた自分につい苦笑いを浮かべてしまう。

元々人間が使ってるのは３０％の筋力、それを更に抑えればそりゃ平気を下回るのは当然だ。魔力の強化がなければ訓練にはとてもついていけない。

とは言えリミッターなしでも実力はＡＡ。…ＡＡは言い過ぎかな？うん、言い過ぎだよね。測ってない事を良いことに僕は高望み中である。保有魔力Ｂだから持久力もないのにさ。

以前クロノ君に実力を隠して嫌われ役を演じる理由を聞かれて僕はこう答えた。

「僕が表だって手を出す事で未来が大幅に変わるかもしれない、それに戦力が増えれば人間だれでも油断するよね？それで皆の実力が

知ってる未来より低くなったらダメなんだ」

そんな人達ではない、そう信じ切れずネガティブな道を選ぶのは僕の悪い所だ。

「それに期待されたくない、答える自信がないから…。でも全く関わらないくらいなら反面教師になった方がいいと思ったし、ほら、いざ死んだ時に嫌な奴なら悲しみも少ないから」

この時はクロノ君に殴られそうになった、それも当然かもしれない。

でもさ、中途半端な力と知識でなのはちゃん達と戦って手助け出来るなんて思考はできなかった。

それは本当に手助けになるのか？助けてるって自己満足じゃないのか？もちろん僕がやってる事もその意味では自己満足だ。

そういう道を選べなかったのは僕がおかしかったからだ、だってそうだよ。

短いながら僕には二人分の人生と記憶がある、おかしくならない方がどうかしてる。僕は僕が嫌いだ、無責任な責任感と正義感を持つ僕と、自分に自信が持てない僕が共存してるんだ。

その二人が互いに考えて選んだ妥協点が『今の現状』だ。

ほうっておけないけど力を貸す自信がない。

力を貸して悪い方向に行ってしまう気がする。

いざという時、なんとか力になってあげたい。

皆に罪悪感は感じて欲しくない。

僕はダメな奴だ。

僕でも出来る事がある。

ただ平和に生きたい。

例え死んでも人の役に立ちたい。

多分僕はいつか本当に狂ってしまうだろう、前世のこの記憶をただの『妄想』と言い聞かせている今もこれなんだ、認めつつある今の僕はきっと危ない。

いっそ二重人格なら救われたかもしれない、いや…そう思ったからダメな自分を演じて痛みから逃げているんだったか…。

やれるかじゃない、やる。なくても見つけ出す。一度決めたら迷うな。好きな物語の主人公の言葉だ、強くなろうと思うのではなく、なる。その決意があったからこそ僕はまだ灘将臣でいられるのだと思う。

◇

「アグスタ？確かホテルだったか？」

「そう、そこで行われるオークション、取引許可の下りたロストロギアをレリックと誤認してガジェットが来るかもしれないから、今回はそれらの脅威からの護衛が任務」

気になってはいたけど取引されるロストロギアには大した力はなくて、ただの骨董品という事なのだろうか。

でも今より優れた技術で作られたものなら何かしか新技術発見の可能性がある宝物だよね、ちょっと興味あるなぁ。

お金は、ないけど。

「だから今日は体をゆっくり休めて明日に備える事、いいかな？」

「「「「「はい！」」」」」

思わぬ休息時間の大幅アップに素直に返事をしてしまった。

そろそろ危険度が上がるだけあって体は休める時に休めておきたい。

今日はいっぱい栄養をとって何時もより早く長く寝よう。

「あ、将臣士長ちょっといいですか？」

「シャーリー……どした？」

「グラムの容量アップの件でお話が」

う…イージスだけじゃとても魔法のプログラムは収まりきらない

からグラムにもかなり詰め込んでるんだよね、それでハードを最新版に改装して欲しいって頼んでいたんだった。

「明日までに終わるか？任務なんだよね」

僕の趣味は魔法収集と言う事になっている、理由はいつか全ての魔法を使いこなせる男になる為と断言した。それは無理だよと自分の嘘に呆れた。

「大丈夫ですよ、ちょっと預かりますね」

「じゃぁよろしく」

飾り気のない銀のリングを左手から外してシャーリーに渡す、これがグラムの待機状態だ、因みにイージスもデザインは同じで色がブルーのリングだ。

「じゃぁ四時間後くらいに連絡しますから」

「あ、いや明日の朝でいいんだけど」

「ダメですよ、しっかり点検しますが実際に扱って点検して貰いますからね！」

「…わかったわかった」

多少時間は減ったけど普段より休める事は変わらないんだ、ここはシャーリーの仕事の速さとこだわりに感謝しないとなぁ。

それに明日はアグスタ警護か、ティアナちゃんがが焦ってるようには見えないのは僕がいるからかな？才能がなくても連携や作戦でどうにかなる、助け合えるって思ってくれたのかな。

まぁ…それでも僕は足を引っ張ってるにひ引っ張ってるから個人の役割の重要性に気付いたって可能性が互いかなぁ。

「じよぁグラムをよろしく頼むよ」

「任せて下さい！」

兎に角明日はティアナちゃん達をしっかり見ておいた方が良さそうだ。

第十話

思わず見惚れた僕の美的感覚は正常の筈だ。

地球のデザインとも六課の制服とも違う目の前のドレス、この任務がなければ僕は絶対に見られなかったであろう美女三人のドレス姿が目の前にあった。

「凄い似合ってますよなのはさん！」

「あはは、そうかな？ちょっと落ち着かない感じ」

スバルちゃんが憧れの人のドレス姿に目を輝かせていた、というよりも全員が三人のドレス姿に歓声をあげていた。

「じゃぁ予定通りうちらは中の警備につくから、外は頼んだで」

あ…、固まっている内に三人が行ってしまった。まぁ、褒めるにしても気の利いた台詞は言えないし、良かったかな。

「じゃ、配置に付きますか」

それにしても予想より配置場所がバラけるな…、シャマルさんが感知してから合流出来る距離だけど、多方向から来られたら互いに援護出来る距離じゃないな。

シグナムさんにヴィータちゃん、二人が討ち漏らす数は少ないし、ザフィーラさんとシャマルさんがいるから無理ではない計算なのか。ルーテシアちゃんが手を出さなければ余裕の筈だったんだな。

「将臣士長なにやってるんですか？」

「んぁ？あぁ、グラムのハードがバージョンアップしたからちょっと見てただけだ」

突然デバイスを振り始めたからスバルちゃんを驚かせてしまったようだ。

向上したのは魔法の処理速度とメモリ容量だけなのだけど、やっぱりなんとなく振って違和感を確かめたくなった。

「そうだったんですか。そう言えば将臣士長のデバイス、盾の方ってカートリッジが３０発も込められるんですよね？」

「あぁ、カートリッジ欲しくなったら分けてやるから言えよ」

イージスはマガジンが三つ差し込める、とは言え訓練でカートリッジロードを際立って多用する訳でもないので他人から見れば補給用に見えるかもしれない。

「あ、はい。その時はお願いします」

「おー」

スバルちゃんと雑談しつつグラムを数回振り、ちょっと体が温まった所でイージスに戻した。

そろそろかな？

オークション開始前にはガジェットが現れる筈だ。

（クラールヴィントに反応！ガジェット多数接近！）

「来たか」

すぐさまセットアップしたシグナムさんとヴィータちゃんが、反応のあった方向に飛んで行った。

本当ならルーテシアちゃんとガリューを押さえたいけど、何分居場所がわからない。

地下駐車場に来るガリューを相手する事は出来るけど、下手に刺激してガジェットにガリューが加わった戦いになる事は避けたい。

「イージス、俺の甲冑を」

騎士甲冑、というよりは騎士服を身に纏う。エクシードモードと同じく僕の騎士甲冑には本来の姿があるが、　なにぶん魔力が低く僕が維持出来る時間は短い、普段はこの継続時間重視の甲冑しか装着出来ない。

「よっしゃぁ！気合い入れてくぞ！」

◇

困った事になった、明らかに知る未来よりも状況が悪化している。

戦闘開始から十数分、ガジェットの動きがよくなった。ルーテシ

アちゃんが動き出したんだろう。

そして転送されて来た無数のガジェット?型、その中にミサイルを装備したガジェット?型が二機混じっていた。

きっと僕がいる事で、僕が知っている戦力より多くガジェットを投入して来たに違いない。人数だけでカウントすれば確実に戦力は増えているんだから当然だ。

兎に角こうなったからにはやれる事をやるしかない、リミッター解除も視野に入れて、今出来る全力を出す。

「シャマル先生の指示に従ってヴィータ隊長が来るまで凌ぐぞ！」

本来ここでティアナちゃんが反発する、でもこの展開は多少無茶しないと打破出来ない。明らかに?型は高火力、長距離攻撃仕様だ。

「でもこれ以上下がったらホテルが！」

「ロストロギアをレリックと誤認してるなら派手な攻撃はしない！」

「そんな事誰が証明出来るんですか！？私達の仕事は逃げる事じゃありません！」

「逃げるとは言ってない！守りに徹するだけだ！攻めて抜かれたら終わりだぞ！」

エリオ君とキャロちゃんが来ない、何でだ？ガリューと鉢合わせたのか？

将臣とティアナが念話ではなく、口頭で言い合っている間にスバルが突進した、恐らくは念話でティアナが連携を指示したのだろう。

「っ！馬鹿野郎！」

探り合いと睨み合いの均衡は崩れ、ガジェット？型がレーザーでスバルを狙う、ウイングロードで上空を駆けるスバル、囮役として敵を引き付けている。

（逃げ腰になったら終わりだ、私とスバルたけでもやらなくちゃ！）

四発同時ロードの誘導弾による多重弾殻射撃、ガジェット？型を先に片付ける作戦のようだが将臣は嫌な予感しかしていなかった。

「？型が動いてないぞ！スバル、ティアナ！ＡＭＦ効果範囲が伸びるぞ！退け！」

今ＡＭＦを全開にされれば、まずスバルちゃんがウイングロードを失って敵のど真ん中に落ちる、幾ら防御が固いと言ってもバリアやシールドが使えたらの話だ、ティアナちゃんの砲撃魔法も、カートリッジの魔力制御に時間がかかっている、恐らく撃つ前に消されるか制御出来なくなるに違いない。

せめて自分は冷静でいようと思っていたのに、気付いたら走っていた、いつ走り出したのか自分でもわからない。

前回のように放心する訳にはいかない、そんな気持ちが先走ったのかもしれない。

「うぁ！？」

「ＡＭＦ！？この距離までっ！？」

将臣の視界の中でスバルが落下を始める、間に合ってくれと願ったティアナの射撃もやはりＡＭＦの影響で不発したようだ。

「スバル！」

左手を突き出す、既にガジェットの攻撃が僕とスバルちゃんに始まっていたが、自分の防御よりスバルちゃんの救出しか頭になかった。

今の薄い騎士甲冑ではガジェット？型のレーザーですら貫通する、現に左肩に焼けるような痛みを感じる、それでもただ一直線に走る、縮められた一瞬に一生後悔はしたくない。

伸ばした手で作り出したのはチェーンバインド、ＡＭＦを発動するガジェットを拘束するのは無理だがスバルちゃんなら話は別だ。

「ＡＭＦ範囲外に出てエリオと合流するぞ！ヴィータ副隊長がすぐ来る！」

「は、はい！」

落下中のスバルちゃんをチェーンで絡め取り、全力で引き後ろに投げる。身体強化とバインド持続にカートリッジを二発使った、すぐにこちらも振り返り離脱を開始する。

「空牙！」

地面に衝撃波を打ち込み砂埃を巻き上げる、有人操作の今は動作は精密だが故に視覚に頼っている筈だ、自立稼働と違い的が見えない以上攻撃を少なからず躊躇する筈。

「ティア！」

「え、あ、私…」

「退くぞ！時間は十分稼げた！」

冷静になったティアナは僕が言っていた事を理解してくれたらしく、僕に対して初めてすまなそうな表情を見せた。

砂埃が拡散し薄くなるとガジェットがこちらに向かって飛び出してきた、兎に角？型のＡＭＦ効果外を目指し走っていた僕達はある程度距離が稼げていた。

時間的にもヴィータちゃんが来る筈だ。

そのままＡＭＦ効果外まで下がると、ほとんど同時にガジェット？型が空から降り注い小さな鉄球を受け爆発した。

（よし、間に合ってくれた）

残りのガジェットから僕達を守るように鉄球を打ち出した真紅の甲冑を纏った騎士が上空から降り立つ。

「無事かお前ら！？舐めた真似しやがって！行くぞアイゼン！」

ヴィータちゃんはそのまま攻撃を再開、実体弾とデバイスの物理

攻撃により瞬く間にガジェットを破壊し一掃した。

これがエースと呼ばれる者達の実力なのだと実感し、戦闘の終息に安堵した。

「おめーら怪我はねぇな？」

「「は、はい」」

「エリオとキャロがいないんだが？」

「安心しろ、ガジェットと戦ってたがザフィーラが助けた」

良かった、あっちにも転送されてたのか。

「お前らは引き続きホテル周辺の警護だ、あたしとシグナムは討ち漏らしがないか検索してくる。将臣はシャマルの所で治療してもらえ」

「いや…俺の治療よりサーチ優先してくれよ、大した怪我じゃないからな」

肩と左足にちょっと傷を負っただけだし、最後まで気は抜かない方がいい。

「じゃぁ将臣は応急処置してから復帰だ、いいな？」

「了～解」

◇

帰りのヘリの中でシャマルさんから治療を受けた僕の傷は殆ど完治していたけど、六課に帰ってからメディカルチェックを受けるようなのはちゃんからキツく言われた。

「そうだスバルには帰ったら飯奢って貰おう」

「え！？」

「あぁん！？助けてやったろーが！」

何か言いたげだったスバルとティアナの出鼻を挫く為に、自ら話題を振る。

「俺が超ナイスなアドバイスしたのに聞かないしなぁティアナは」

「う…」

ジト目で見るとティアナちゃんは恥ずかしそうに俯いた。

「流石前回それでビビってた奴の言葉は説得力があるな」

「いやぁ今回も攻め込むなんて怖くてとてもとても」

ヴィータちゃんが冗談っぽく毒を吐いてきたのでそれに乗った。

じ、ジト目が皆から帰ってきた。

「ほ、ほら！あれだけ強いＡＭＦだと俺やれる事逃げしかないし！結果的にナイス判断だったし！大丈夫だよね！？」

「ふむ、まだ恐怖を克服する訓練は終わりそうにないな…」

え…あれはそろそろ、生傷が耐えないし。

「と、兎に角将臣士長ありがとうございました！助かりました！」

「私も…話を聞かず勝手な事してすみませんでした」

うぅ…こうやって真面目に謝られるのは凄い苦手だよ、やっぱりノリでは流せないかぁ。

「まぁ俺に謝るより次に生かそうぜ！その為の経験と訓練だろ？」

「それ昨日なのはが言ってたような…」

フェイトちゃんなら気付いてくれると思ってた、フォローありがとう。

「それに……きっと明日からはなのは隊長に厳し～い反省メニューが組まれるに違いない」

「あはは、私ってそんな風に思われちゃってるのかな？」

「あ、てかそれだと俺にも影響あるじゃん！」

なのはちゃん苦笑いしてるけど、事実絶対訓練メニューのレパートリーとパターンは増えて行くと思うなぁ。

ＡＭＦの脅威については今までかなり教え込まれたし、今回みた

いな状況を想定した訓練もあった。

今回ティアナちゃんやスバルちゃんがミスしたのは僕が原因でもある。

自分達がやらなくちゃいけないと思わせてしまった原因は少なからずあるし、守りに回るにしてももっと言い方があった。

「兎に角みんな任務お疲れ様」

事件の後処理でいないはやてちゃんに変わり、なのはちゃんが締めくくり、僕達のアグスタでの任務は完全に終わった。

第十一話

念を入れて昨日に引き続き朝から医務室で僕はメディカルチェックを受けた。

正直シャマルさんのメディカルチェックは一番緊張する。

体の蓄積ダメージなんかが露見する可能性が一番高いからだ、とは言え毎回訓練で筋肉痛だとごまかしている。

深く追求されないのは多分僕が『闇の欠片事件』でかなり痛めつけられた事を知っているからだ。

あの時は再起不能とまではいかないまでもかなりのダメージを受けた、特に即戦力である両腕のリハビリに苦労したし、治療やリハビリではシャマルさんにかなりお世話になった。

同じ理由で僕は検査は最低限のものしか受けていない、イージスの話では本格的な施設やデバイスを使って徹底的に検査しなければ大丈夫、との事だったけど念には念を入れておきたい。

「かなり疲れが溜まっているみたいね、訓練厳しい？」

「かなり、やっぱり若い奴には敵わないな」

「もう、アナタだっていくつも変わらないでしょ」

苦笑いするシャマルさんに休める時にはゆっくり休むよう厳しく言い聞かされ、その後医務室を逃げるように去った。

時間的には余裕があったのだが、つい小走りで訓練場に向かってしまう。

そして、訓練場には思わぬ人物がいた。

「え、なんで！？」

「なんでって…久々に会ったと思ったらそれですか」

ヤバい今のはかなり素だった、六課以外の場所だったら確実にギンガちゃんと読んでいた気がする。

「なんでギンガがいるんだ！？」

考えられる事は何かの用事で来たか、知る未来より早く六課に出向して来たかだ。

そうなると、ギンガちゃんももう出向してくる時期か、同じ部隊だから特に何もしなくても評価は底辺だよね……喜んでいいのかな？

いや…そうじゃなくて、明らかに少しではあるけど未来が変わっているって事には違いない。

「あ、ギン姉と将臣士長って同じ部隊なんだっけ」

「おぅ、後輩が自分より偉くなるのって結構キツいから、お姉ちゃんにこれ以上出席しないように言っといてくれ」

「聞こえてますよ将臣士長！」

ギンガちゃんは陸戦Ａの魔導師、部隊では良く模擬戦をした。結果は言わずもがなだけどね。

「挨拶も済んだ所で今日の訓練行ってみようか」

「ふふんギンガ、鍛えられてパワーアップした俺の力を…見せてやろうじゃないか！」

「はいはい」

「軽っ！年上だぞ！」

「階級は私の方が上です」

「嫌な姉ちゃんだなスバル」

「え？あ、そんな事は」

軽口を叩き合いながら朝の訓練は始まった。訓練メニューにギンガちゃんは驚いていたけど、やはりバテバテの僕を見て苦笑いしていた。

これまでの事件から考えると、やはり僕が知る未来とは細部が違う、分岐した未来の可能性が濃厚になってきた。

事件そのものは変わらないにしても、細かい戦力や人員の移動タイミングが違っている。僕の存在が展開を変えてしまっている可能性は否定出来ないものの、細部まで記憶通りに展開されるという考えは捨てた方がいい。

「ふっ！」

「見切っぐおぁ！？」

ギンガの白いリボルバーナックルがイージスでガードした左手を弾き飛ばし腹部に突き刺さる。

リボルバーナックルの前面に魔力での膜が展開され威力が強化されていたらしい。

勿論初見の技ではないのだけど、以前とモーションや繋ぎまでの技が違い防御を誤った。

スバルちゃんやギンガちゃんの攻撃は砲撃魔法と比べて魔力ダメージより物理的ダメージが大きい、非殺傷設定とはいえ衝撃と痛みはかなりのものがある。

「…う〝ぇ」

「将臣士長撃墜、大丈夫？」

「ギリギリ」

判定役のなのはちゃんが僕の負けを宣言し目の前に降り立つ、朝食後だったら吐いていたかもしれない。

「じゃぁ次が朝の訓練最後、複数のガジェットからの護衛を想定した模擬戦をやろうか。護衛対象は……将臣士長でいいかな？」

「意義なし！なのはさん愛してる！」

なんだかちょっと寒気を感じた、調子に乗りすぎたかなぁ…。

多分僕がへばっていたからと言う理由プラス、実際に足手まといになる可能性が最も高いから護衛対象に抜擢されたんだろうな。

決して好きじゃない相手に親身になったり、差別や雑な扱いしないこの部隊とメンバーには本当に驚かされる。

「抵抗はしていいんだよな？」

「勿論、自己の判断と護衛との連携も任せるよ」

とりあえず訓練で連携だけはマシになったから目立ったミスは最近ない、連携しなかったら毎回撃墜されて終わってると思うし。

まぁだからと言って僕の実力は相変わらず底辺な事には変わりない。

「みんな気合いいれて俺を守るんだぞ！」

僕を守るって訓練に皆のモチベーションが上がるのかどうか、非常に疑問ではあった。

◇

現在僕は久々に私服を着ている、遂に原隊復帰を命じられた訳じゃない。六課所属初の休日だ、ずっと２４時間勤務だったので初の

外出でもある。

思わぬ休日に皆驚いていた、1日何をするかあれこれ話し合っていた。

いつ休みになるかハッキリした日にちは分からなかったけど、僕は休日の行動を前々から考えていた。

ヴィヴィオちゃんを保護するエリオ君とキャロちゃんの近く、市街を見て回るつもりでいる。流石に尾行までするつもりはない。

ま、まぁ兎に角出遅れない位置にいるのが予定。今回は前回より更に危険が高い、ナンバーズが出て来る上にヘリも狙撃されるからだ。

なのはちゃんが間に合わなかったらヘリは撃墜されるし、フォワードの皆もルーテシアちゃんとの戦闘がある。

今の所単純に考えれば良い方向に向かっていると思うけど…何がきっかけで取り返しのつかない事になるか分からないし…。

「あ…時間ヤバいな」

僕は今回協力を依頼した人物との待ち合わせがある為、行動開始はエリオ君やスバルちゃんよりも早い。

移動手段はバイク、車の免許もあるのだけど肝心の車を買う余裕がない。

「お？それ将臣のバイクだったのか」

「なんだヴァイスか」

「何だとは何だよ！」

僕のバイクは中身こそミッドのものと差異はない、ただデザインやタイヤ形状が地球の方が好みだった僕は外観とタイヤを地球のものに変えている、一応法律の範囲内の改造だ。

ヴァイス陸曹は入局やら年やら階級差で接するべきか悩んだ結果、互いにタメ口で話すようになっていた。

「悪いけどバイクの話はまた今度な、人と待ち合わせしてるんだ」

「何！？まさか女か？」

「じゃぁまたな！」

アクセルをひねり一気に整備工場を飛び出す、あのまま行くと外出するタイミングを逃してしまいそうだったのでやむ終えないだろう。

時間的にはギリギリ間に合う筈、お願いだから道が混んでいませんように！

急いでいる時こそ冷静に、無理な運転はしない！そう焦る自分に言い聞かせながら目的地に向かった。

……

……

…

「…セーフ、だよね」

「アナタは急に誘っておきながら遅れてくるんですね」

「ごめん…なさい」

腕時計を確認すると僕が指定した待ち合わせの時間から１０分も経っていた。

「時間もないのでしょう？移動しながら言い訳は聞きます」

「本当にすみません」

今回協力を依頼した女性は何を隠そう僕がＢランク認定試験のペアだ、現在は空戦のランクＳを取得して地上本部で勤務している。

名前を…

「バイクですか…」

「ごめん、言い忘れてた」

「今回はちゃんとあの変なキャラではなく、本来のアナタで対応しているので大目に見ます。スカートも予想して避けましたから」

「助かるよ」

彼女との付き合いは結構長い、結構というか…累計時間はトップかもしれない。

ヘルメットを渡して彼女がバイクに乗ったのを確認してから改めて走り出す、目指すは市街。

「で、どういう心境の変化ですか？私に頼るなんて」

「未来が分岐しているのは確実だからね、良くする事に力を注ぎたいんだ」

「今までもそうして来たのでは？」

「今まではなるべく本来の流れのまま進行してくれるよう見守っていただけだよ」

念話のおかげで走行中でもしっかりと会話する事が出来る、腰に回された手が凄く気になるのはきっと事故ると自分だけではなく同乗者も傷つけてしまうからだと思う。

「それにしては明らかに所々手を出してしまっているようですね、その場のテンションや気持ちを優先させてしまうなら道化を演じる意味をかんじませんが」

「ぅ……そりゃ僕も人間だし、つい感情に任せた行動とかしちゃう時もあるけどさ」

後々考えると自分でも『なぜ？』と思う行動をとっている事は確かだ、ずっと同じ考え、ずっと同じテンションでいられる人間は多分いない。

どんな人間にもブレはある、そのブレをいかに小さく出来るかで人格の中心、人の心が決まるんだと思う。

「それで開き直って助力を得る事にしたと」

「六課やスカリエッティ側に急な戦力の増減をさせない範囲なら未来は全く違う形には分岐しないと思うだ」

例えばヴィヴィオちゃんを死なせてしまったり、ナンバーズの誰かを今回捕らえたりすれば大きく未来が変わってしまうだろう。

だから被害の軽減に留めれば未来のブレは少ないと思う。

と言うよりは今回ヘリの狙撃という、明らかに人の命が狙われる事態に僕がビビっている。

「協力を要請された訳ですが、それは命令ですか？」

「いや…命令なんて出来る立場じゃないよ」

「私はアナタの融合騎です、命令するのは当たり前の事では？」

うぅ…何でこうなんだろう、僕はそんなつもりじゃないんだけどな。

「融合騎でも、命令を聞く理由にはならないよ。自由に生きて欲しいって前に言ったよね？」

「ではそのように…。しかしアナタも本当にヘタレですね。主であるなら私に好きに命令出来るというのに自由を与え、自由にさせた

と思えば協力して欲しいと頭を下げる」

そりゃ…だってそんな奴隷みたいな真似誰だって嫌じゃないか。

「良い事をしていれば全て丸く収まる訳ではありません、どこかで妥協しないと八方塞がりになりますよ？」

「そうかもしれないけど、僕はやりたい事をやっているだけだから」

「分かりません、アナタが何を考えているのか、アナタがどうしたらアナタ自身を大切にしてくれるのか、分かりません」

第十二話

「新人達は休みでもお前に休みはなしか」

「仕方ないよ、それに皆頑張ってくれてるから」

「今やっているのは教導メニューか？」

「うん、ちょっと修正中」

今私がやってるのは将臣君の訓練メニューの大幅な修正、能力値が平均よりちょっと低い将臣君だけど、デバイスの映像で見たアグスタでの頭の回転の速さは平均以上だった。

（やっぱり将臣君も場数を踏んで来てるんだもんね。なのになんであんなに普段ふざけてるんだろう）

訓練自体にはしっかり参加してくれる、でも時折明らかに私達を遠ざけようとしているように見える、それも将臣君がそれを望んで…。

寂しい目じゃなくて、力強い目で私達から離れようとする。ずっとその理由を聞きたいと思っているけど、将臣君がそれを聞かないで欲しいと思っている事もわかるから、将臣君のするがままに流されてしまった。

私の記憶にある将臣君は努力家で、真面目で、人に迷惑や心配をかける事が凄く嫌いな男の子だった。

将臣君が変わったのは私が魔法と出会った時と殆ど同じ時期、その頃から私を避けるようになった。

友達でも他人でもない距離を続けて、それでも私から完全に離れて行く事はなかった将臣君。

悩んでいる、でもそれは私が聞いてはいけない悩み。いつか将臣君から話してくれるのかな…

「高町？」

「あ、ごめんシグナムさん！」

「上の空だったが、何か心配ごとか？」

「う、ううん！大丈夫ちょっとメニューでで悩んだだけだから」

ぶつかって行けないもどかしさはあるけど、それなら私は将臣君を鍛える自分の役割に専念しよう、きっと無駄にはならないし、お互いに踏み込むきっかけがいつか生まれるかもしれない。

「そうか。将臣の体力の無さはあまり責められんが…動体視力は問題無さそうだ、私との訓練で時折当てる気で振った木刀を避けるからな」

「と、時折って…」

「あぁ…最初の一回は主に呼ばれ単純に手元が狂ってしまったんだが、その時に太刀筋を見て避けていた。まぁ三回に一回の割合で当

たるがな」

訓練前に良く将臣君が鼻血だして来る理由がわかったの…。

◇

「で、どこに行くつもりなのですか」

「…よ、予定は未定です」

市街での行動は決めていたけど、当初は一人で適当に時間を潰すつもりでいたからどうしたら良いか分からないぞ。

「最低ですね」

ぐ…だって女の人と出掛ける事なんてないし、昔二人で地球にいた時は買いたいものがあるから出掛けてただけで、人を楽しませるプランなんて僕には思いつかないよ。

「映画…とか？」

「呼び出しがいつあるか分からない状況でですか？」

「朝ご飯は…」

「済ませて来ました」

なんかちょっと怒ってるなぁ…。

「そうですね、久々にあったのですからどこかでゆっくり話しましょう」

「あ、じゃぁ喫茶店でいいよね？」

「はい、女性にリードされてしまうアナタの相変わらずの名前負けっぷりに安心しました」

それは言わない約束だって…言ったのに！！

僕の将臣と言う名はちょっと変わっている、将に仕える者という意味が込められた名前だ。なんでそんな意味を込めたのか知る術はない。

ただ彼女には昔から将（王）の家臣なのに王（自分）を家臣にしているとか、仕える事前提の男にしては鈍くて名前負けしてるといじられる。

でもきっとこの名前は良い将（上司）と臣（部下）、簡単に言えば良い仲間に囲まれますようにと言う意味で付けられたんじゃないかとも思っている、ちょっと無理やりかもしれないけどさ。

雑談しつつバイクを走らせる事五分弱、喫茶店を見つけた僕達はバイクを停め入店する事にした。

「アナタとの主従関係の破棄に伴って私は自由の身になった訳ですが」

「ずっと前からそう言ってたよね？て言うか念話で話そう？ね？」

し、視線が…周りからの視線が。

「念話でも構いませんが、喫茶店でただ向かい合って見つめあっている私達は周囲から浮きますが…」

「やっぱり普通に話そう」

では、と断ってから彼女は言葉を紡いでいく。

「変身魔法も解除しますし、恋愛なども自由という事で良いんですね」

「……変身魔法は、ちょっと…色々マズい事になりそうだし」

絶対「あれ？もしかして姉妹か何かですか？」って事になるよ、目に見えてるよ。

「勝手ですね、それに恋愛の方は無視ですか…そうですか」

「いや、ほら…そう言うのは個人の意志を尊重したいし、個人の自由だし」

命令は嫌だ、でも自由にした相手に無理をお願いしちゃうのがヘタレって言われる由縁なんだろうなぁ。

「……」

「……えっと」

なんで無言なんですか？

「答えはＮＯです」

そう言って変身魔法を解除した瞬間、喫茶店の中がざわめいたのは僕の聞き間違いではないだろう。

素顔を知っていた僕でも心臓が一度大きく鼓動した程だ。多分返答と行動に驚いたからだと思う、思いたい。

彼女との出会いは約十年前、『闇の欠片事件』の時だ。

既に満身創痍だった僕は、一番相性の悪いであろう相手との遭遇に半ば投げやりになっていた。

護衛を必要としない高火力、高防御力の砲撃魔導師。どう接近するか、どう守りを突破するか考えを巡らせたけれど、残された選択肢は玉砕覚悟の特攻しかないように思えた。

王のマテリアルは広域戦闘タイプだった事もあり、詠唱の隙を与えない手数とクロスレンジの戦闘に持ち込む事で辛くも勝利を得た。

今回は万全の状態でも１チャンスがあるかどうかの相手、傷付いた僕は近付く前に撃墜されるとしか思えなかった。

しかし、砲撃は来なかった。自我を持ちつつも素体達の記憶も持つ彼女は僕に罪悪感を感じていたようだった。

自分の思念体が生まれてしまう事を危惧し、闇の書事件の際は関わらずにデバイスを入手するという大決断をしたのだけど、結界内

に入った事で記憶が少なからず読み取られたのかもしれない。

彼女の謝罪の言葉、それを聞いていられなかった僕は精一杯自分の過ちだと語り、謝罪した。

夢が覚めたらと嘘をつき、心の中で騙している人達にいつか全てを話、嘘と身勝手を償う事を約束しながら彼女を斬った。

理解者を得、そして失った瞬間だった。

二体のマテリアルの消滅を感じ取ったのか、現れたもう一体のマテリアルと戦いになったのはすぐ後だ。

あちらも誰かと戦ったのかダメージはあった、肉を斬らせて骨を断つ、そんな気持ちで挑んだ僕だったが殆どダメージを与えられず、シグナムさんに助けられなければ死んでいただろう。

問題が起こったのは事件が終わって一週間後の事だ。

自分以外誰もいない部屋、どの部屋をどの時間に探そうとも家主は僕以外はいない。

自分でいられる空間なのに、そこは凄く虚しくて、何よりも寂しかった。

治療を受けたとは言え日常生活も満足に出来ない僕は、戦いの日から家の外には一切出ず殆ど眠って過ごしていた。

ただでさえ人より時間を切り詰めて自分を鍛えなくちゃいけないのに、流石に鍛える余裕などある筈もなく、日ごとに衰えていくような不安と傷の治りの遅さに一人荒れていた。

本来ならシャマルさんに来てもらい、定期的に治療を受けるべきなのはわかっていたけど、リインフォースの寿命を考えると自分の治療に時間を割いて欲しくなかった。やっぱり家族は一緒にいるべきだと、そう思った。

「ぁ……くそ！…ぐっ」

ギプスで固定された手からドリンクの缶が転げ落ち、それを苛立ちに任せて蹴り飛ばす。

ドリンクの蓋も満足に開けられず、少し動かしただけで悲鳴を上げる体に苛立って、良く物に当たり散らすようになっていた。その度にまた体が悲鳴を上げ、傷口が開いてしまうとわかっているのに、ここでは誰にも自分を偽らなくて済む油断と、一人という状況が感情に任せて僕を動かした。

唯一の話し相手であるイージスも大破し、修理と調整の為にアースラに預けてあった。それが原因と言うのは卑怯だけど、慰め励ましてくれる存在のいない僕の部屋は僕の八つ当たりで荒れ放題だった。

「う〝あぁぁぁぁぁ！！あ〝ぁぁぁぁっ！」

騎士としての、そしてこれからの自分の生命線である右手を壁に叩き付けようとした時、自分以外誰もいる筈がないこの確かに声が聞こえた。

「やめて下さい」

確かにそう聞こえた気がして寸前で拳を止めた、殴りつけていないのに、振った衝撃だけで僕は痛みに膝をついた。

「誰か…いるの？それとも前世の記憶の次は、遂に幻聴まで聞くようになったのかな？僕は」

寝よう、起きていると頭がどうにかなりそうだ。もしかして夢でなら、少しはマシな気分を味わえるかもしれない。

「幻聴ではありません」

声、いや、直接頭の中に響いてきたその言葉に慌てて辺りを見回した。当然だ、聞き間違いでなければ今の声はなのはちゃんのものだったからだ。

一応全ての窓や扉には鍵をかけていたのだけど、物音を聞いて入ってきたのかもしれない。

「なのは？なのはなのか？」

マズい台詞を口走った、そう思った僕は慌てて自分を偽り始める。

「……違います、私は…」

左手の銀色の腕輪、ストレージデバイスである『グラム』から声が聞こえてくる事に、その時ようやく気付いた。

「そんな…だってグラムはストレージデバイスで」

一瞬、グラムにはＡＩが積まれていないと、そう言おうとしてし

まった自分が酷く残酷な人間に思えた。

「確かにこのデバイスはストレージデバイスのようですね、それに私は一時的にこの中の空間を使わせてもらっているに過ぎません」

「なら君は…誰？」

「覚えていないのですか？まだ夢を見ているのですか？仲直りする約束をした筈ですが…なら今目を覚ましてあげましょう」

グラムが光り輝き、その光りの先にはっきりと人影を見た。声を上げるより先に、顎に強い衝撃を受けて気を失った。

「とりあえずアナタには睡眠が必要です」

薄れ行く意識の中で確かにその言葉を聞いた。これが僕と彼女の二度めの出会いであり、消滅する筈だった彼女が斬りつけたグラムの空き容量に自身をコピー保存、闇の書の防衛プログラムの構築体、マテリアルとしてではなく。

自身の基礎構築データと、融合騎としのプログラムだけを選び抜いて、僕のついた嘘を律儀に実現する為に、彼女は生まれ変わってまで会いに来てくれた。

第十三話

「見ていられませんね」

そう言ってシュテルちゃんは自分の体の完全な構築やチェックも後回しにして、僕が日常生活に復帰出来るまでずっと手助けしてくれた。

初めての洗濯、初めての料理、初めての掃除、自分だって大変だった筈なのにそれを決して見せようとはしなかった。

「大部分のデータは切り捨ててしまいましたが、この程度造作もありません」

そんな言葉を何回聞いただろうか？彼女はグラムの容量問題もあり必要最低限なプログラムしか残せず、融合騎となったのは偶然だと言っていたけど、頭の良い彼女が再生機能よりも先に融合騎のプログラムを保存するミスは犯さないとわかっていた。

彼女もなかなか頑固者なのだとつい笑ってしまったものだ。

イージスがアースラで本格的な修理と改修を受け、バージョン２として戻って来る頃には彼女も安定し、グラムを媒体とする必要性はなくなった。

一人ぼっちから二人、そして今三人になった我が家には、あれだけ憂鬱な雰囲気はいつしか霧散していた。

彼女と話し、イージスの言葉にちゃんと耳を傾け、ずっと一人で

抱え込んでいた気になっていた僕は、一人ではなかった事を実感した。

イージスはずっと語りかけ、身を案じてくれていたのに僕は機械的な反応としか考えておらず、耳を傾ける余裕も勝手に無くしていた。

余裕を与えてくれたのは優しい女の子、力を貸してくれる相棒に、いくら突き放そうと身を案じてくれる仲間達、その為になら惜しむ事はない。

◇

「ところで、最近収束のコツを聞かなくなりましたね、会得したのですか？」

「スターライト・ブレイカーはちょっと無理かなって」

魔力の収束から発射まで恐らく十分近くかかる、そんな時間を一人で稼ぐのは無理だし、仲間がいたとしても違う魔法で攻撃したほうが効率的に思える。

「ルシフェリオン・ブレイカーです」

「えっと…」

「アナタが覚える収束砲の名は？」

「ルシフェリオン・ブレイカーです」

彼女のなのはちゃんへの対抗意識はたまに出る、もっとも今のような些細な事だし、なのはちゃんのコピーではなく自我を持ち独自の道を行く彼女は姿は似れど別人だ。

「そろそろ移動しましょう、場所のめぼしはついているのですよね？」

「うん、じゃぁ行こうか」

僕達が喫茶店から出たのとエリオ君から全体通信があったのはほぼ同時だった。

幸い知る未来の情報が役立ったようで僅か2、3分の位置だった。

「スターズ5了解、すぐ近くにいるから今向かう」

「私はどうしましょうか、勝手にでしゃばる訳にも行きませんが…」

「多分今回六課は人手が足りないから、成り行きで居合わせた同じ管理局のSランク魔導師、その協力を拒む事はないと思うよ」

エリオ君に素早く返事を返してから通信を切る、そろそろお休みモードから切り替えなくちゃならない。シュテルちゃんは嫌がるし僕も好きじゃないけどまた言動を変えなければならない。

宣言通りバイクを走らせる事三分で現場に到着した、まだスバルちゃんやヘリの姿は流石にない。

「将臣士長、えっと…その人は？」

「なのはさんにそっくり…」

「よ、エリオにキャロ。この人は管理局員だ、ちなみになのはさんに似てるけど血縁関係はないぞキャロ」

「シュテル二等陸尉です、よろしくお願いします」

良し、見たところヴィヴィオちゃんに目立った外傷はなさそうだ、良かった。

「シュテル二尉は陸士１０８部隊の人でな、まぁ俺とギンガの上司だ、ランクは空戦Ｓ」

「フェイトさんやなのはさんと同じ…」

「す、凄い」

二人からすれば体長や副体長達は無敵の象徴みたいなものだし、同レベルの魔導師にちょっと戸惑ってるみたいだね。

「今日は非番だったのですが、どうやら私の部隊が担当する別の事件に関係がありそうでしたので、そのまま同行しました」

そう、非番ではあるもののエリオの通信より早くシュテルちゃんの所に連絡はきていた、本来ギンガちゃんがはやてちゃんに報告する流れは出向が早まった事でなくなったのかもしれないけど、輸送トラックの事故と生体ポットらしき物体の情報は随時シュテルに来ている。

非番だからよほど激しい戦闘にならなければ呼び出しは来ないらしいけど、呼び出される前に行動を開始したおかげでシュテルちゃんをギンガちゃんの役割だった合同捜査者にする事が出来る。

「細かい説明とかは皆が来てからにしようぜ？二度手間はごめんだしな」

◇

予想はしていたけどやっぱりちょっとした混乱が起きた。

まずシュテルちゃんとの合同捜査は簡単にゲンヤさんとはやてちゃんが承諾してくれたのだけど…。

ティアナちゃんと来たスバルちゃんが、シュテルちゃんを見るなりなのはちゃんそっくりだと驚いた事から始まり。

なのはちゃんやフェイトちゃんも驚いた様子だった、無理もない。多分何回か顔は合わせてると思うけど、その時彼女はもう変身魔法で顔を変えていただろうし、なのに今は髪型は違えどなのはちゃんそっくりだ、双子で通用する。

そこを考えるとギンガちゃんの驚きっぷりは凄まじかった、同じ部隊であり上司が今まで変身魔法を使っていた事でちょっとテンパっていた。

身分証の写真は一応素顔らしいし、登録書類とかを見る立場の人は知っていそうだけど、個人情報だし知っててもゲンヤさんくらい

なのかも。

顔を隠していた理由は自分より入局が早く、既に有名になったいたなのはちゃんにやたらと間違われたりするのが嫌だったとシュテルちゃんはごまかしますいた。

闇の欠片事件、力のマテリアル以外は僕以外に誰も姿を見ていない、変な追求をされる事は多分ないと思う。

「即席で連携するには少しランクに差があるようですね。ギンガも居ますし、私はヘリの護衛に周りましょうか？」

「お願いします、私と高町一尉は航空戦力の排除に回ります」

ガジェット？型、もう反応が出たのか…。行動が早まってるなら早く地下に向かってレリックを回収しないとマズいかもしれない。

「フォワードとギンガはレリックをお願い、無茶はしないようにね」

なのはちゃんの言葉に全員で返事を返し、セットアップ後すぐにマンホールから地下へと進入する。

兎に角ヘリの安全は確保出来た、後はレリックとルーテシアちゃん達か。

今回流石にナンバーズの誰かを補足するのは無理だ。

「ケリュケイオンに反応！ガジェット八機来ます！」

八機？ちょっと多いな、？型なら良いけど…多分？型もいる筈。

「スバルとギンガさんは前方、エリオと将臣士長は後方の警戒！キャロは索敵とフリードの火炎で援護！」

指示と同時にそれぞれ構えをとり耳を済ませる。

「来ます！」

壁の破壊音と同時に前後からガジェット？型が三機、？型が一機ずつ現れる。

（？型はなんとか出来る…？型を水面に誘導すればエリオ君の魔力変換資質雷が有効になるな）

防御力の薄い僕はキャロからの防御力ブースト受けエリオ君より前に出る。

「でえやぁぁ！」

ガジェット？型にグラムを突き立てる、貫通させるつもりが半ばまで刺さった所で止まってしまった。

（いつもより固い？く、ヤバい！）

慌てて蹴りを入れ引き抜いた直後にガジェット？型は爆発した、防御力がブーストされていなかったらかなり危険だった。

「将臣さん！」

「だ、大丈夫だ」

爆風で足元へ転がってきた僕を受け止めるエリオ君。
完全に隙だらけになってしまった僕達だがフリードのブラストフレアの支援によりガジェット？型は全滅した、そして嬉しい事に火炎弾を避けたのか？型は水路に着水している。

「今だっ！」

ストラーダから雷をほとばしらせ、間髪入れず突っ込んだエリオ君の一閃と雷が？型を深く傷つけ破壊する。

「ディバィィィン！バスタァァァ！」

スバルちゃん達も無事ガジェットを全機破壊したようだ。

「全員怪我はない？」

「騎士甲冑小破、今キャロに回復してもらってるからまぁ問題ない」

我ながら不用意に突っ込み過ぎた、安心して気を抜いていたのか？兎に角集中して、ベストを尽くさなくちゃ。

「レリックの反応はこの辺りです」

「よし、警戒しつつ周辺を捜索しましょう」

よし、レリックの反応が移動してないと言う事は出遅れてはいないと言う事だよね。

「ありました！」

「マジか！」

予想通りレリックはキャロちゃんが発見、ガリューの襲撃に備える為素早く駆け寄る。

耳を澄ますと僕の足音以外に何か跳ねるような音が聞こえる、それは徐々に大きくなり確かに近付いて来ている。

「何？この音」

ティアナちゃんの呟きと同時に走って僕は故意に水溜まりを思い切り踏みつけ水しぶきを上げる。

（速い、それにあのステルス完全に見えないぞ！？）

水しぶきの広がりが不自然に歪む一瞬に神経を集中させる、見えずとも最低限のタイミングさえ掴めれば僕とエリオ君の反応は恐らく知る未来よりも良くなる筈だ。

「キャロ！」

キャロちゃんを守るように前に立っていたエリオ君がストラーダを振りながらキャロちゃんを下がらせる。

ストラーダの刃先が小さく火花を散らし、エリオ君の頬から血しぶきが上がる。

「っ！チェーンバインド！ギンガァ！追撃頼む！」

左手を後方に向けガリュー着地の瞬間を狙いバインドを発動する、不甲斐ない事に接近を感知したものの体が追いつかずグラムは空を切ってしまったからだ。

「敵襲！？」

「スバル！合わせて！」

「え！？わ、わかった！」

突然の事態にティアナやスバルは一瞬戸惑うが、僕の叫びに反応したギンガちゃんは透明な何かを絡め取ったバインドに向かって加速する。

「っ！？」

魔法の鎖に絡めとられたガリューはストラーダの一撃を受けた為か一瞬遅れて姿を見せる。

「ハァァァ！」

「ウオォォォ！」

姿が見えなかった為若干甘いバインドではあったが、動きを止められたガリューにギンガちゃんとスバルちゃんの拳が同時に叩き込まれ後方の壁へと吹き飛ばされていく。

大技でないから倒すまではいかないとしても、とりあえず時間は稼げた。後はルーテシアちゃんを。

振り向こうとした瞬間発生した強い爆風に体がよろめく、ルーテ

シアちゃんの攻撃ではない、熱を感じる。

「それ、渡して」

「素直に渡した方が身のためだぜ～？」

爆煙の先に現れたのはアギトちゃんとルーテシアちゃん。幸いキャロちゃんはバリアは破壊され吹き飛ばされたもののエリオ君が辛うじて受け止めている。

ティアナちゃんからの念話で陣形をとり直す。

「子供がなんでレリックを…」

「んな事よりティアナ、さっきの奴が来る前にコイツら捕まえねぇとヤバいんじゃないか？」

とはいえ冷静になっているティアナちゃんが未知数な相手をいきなり逮捕しに行く危険を犯す事はないだろう。

「いえ、まず封印処理を優先します。その間スバルとギンガさんで牽制を、残りはキャロの援護をお願いします」

「それもそうだな…了解だ」

今回の目的はあくまで安全な時間稼ぎ、下手な無理は避けたい。

「なにごちゃごちゃ言ってんだ！渡さないってんなら奪うだけだぜ！行くぞルールー！」

第十四話

ヴィヴィオを乗せ移動中のヘリに追従し飛行するシュテル。

将臣は話では砲撃を得意とするディエチと言う名のナンバーズの狙撃があると聞いていた彼女だが、それ以降の将臣が知る未来は一切聞かされていない。

（きっと話して私が独断で手を貸す事を恐れているのでしょう、それを含めてそろそろお灸を据えた方が良いかもしれません）

将臣は弱くはない、ただしそこそこの実力しかない。きっと全力を出してもシュテルの予想では話に聞いたナンバーズの数名に囲まれれば、将臣に成す術はないだろうと思った。

過去、将臣は決意した。仲間に訪れるかもしれない危機を救えるだけの、例え一瞬の力だとしても守れる強さを身に付けると。

だがそれを求めた結果、将臣は友人から離れ、恋愛や日々の充実を自分とは無縁の関係ないものと割り切り、青春を捨て身を鍛えた。

体と技能の限界を知り、手を出したのがデバイス、そしてカートリッジシステム。

それをシュテルは誉める気にはなれない。仲間の危険を減らす為、時に失敗を犯してまで仲間を遠回しに諭し、力の底上げを狙うやり方も同様だった。

将臣が嫌われ役を演じるのも、反面教師になり仲間を諭すのも、

彼の死後影響を少なくする為にやっているようにしか思えなかった。
そして間違いなく、死ぬ覚悟をしているという確信はあった。
「えっと…シュテル二尉？」
「呼び捨てと普段通りの口調で構いません、どうかしましたか？」
シャマルからの念話を受け周囲を警戒しつつ、思考にふけっていたシュテルは意識を会話に傾ける。
「じゃぁシュテルちゃんって呼ぶわね？」
「…構いません」
自分をちゃん付けで呼ぶのは今まで将臣だけだったが、なのは達と出会いこれを期に増えるかもしれないと思い、少々複雑な気分になるシュテル。
「ガジェット？型の排除に部隊長、はやてちゃんが限定解除して出撃したから、そうかからないでなのはちゃんとフェイトちゃんがこっちに戻ってくるわ。フォワードのみんなの所にはヴィータちゃんとリインちゃんも」
「分かりました」
ではそろそろですね、その呟きは通信を介していなかった為風の音でかき消された。もっともヘリの中のシャマルと外のシュテルでは例え大声で叫んでも聞こえる事はないだろう。

◇

「ぐぁっ！？」

「将臣士長！？ストラーダ！カートリッジロード！」

アギトの放った火炎を避け切れず、イージスで直撃は防御するも、将臣は広範囲に広まった炎に囲まれ、甲冑が技能を失う寸前にエリオがカートリッジを一発消費し作り出した剣圧でどうにか炎から逃れた。

「っ！エリオ悪い助かった…」

「いえ」

「さっきの女の子、上に向かって移動してます！」

「今ので逃げたか…とにかく無理に攻める必要はないけど、そろそろ副隊長がこっちに来る、それまでは見失わないよう距離をとって追うわよ！スバル！」

「了解ティア！ウイング・ロード！！」

守りに集中しつつも、一時は押していたティアナ達だが、予想より早く復帰したガリューの不意打ちにより、ルーテシア達が一時撤退する隙を与えてしまった。

時間稼ぎ事態には成功していたが地下に留まる危険性や、ヴィータが向かっているという通信から判断し、逃げるより追った方が良

いと決断したティアナの指示により、フォワード陣は素早く体制を整え、スバルとギンガが作り出したウイングロードの上を走りだす。

ケリュケイオンの感知を頼りにし、地上へ逃げたルーテシア達への追跡が始まった。

「…大丈夫ですか？」

「魔力はまだ保つ、ダメージもギリギリ通ってない」

移動中、後ろを走っている将臣にギンガは問いかける。

ボロボロの騎士甲冑は魔力により再び修繕が始まっているが、ギンガは将臣の脆さに不安を感じた。

同じ部隊だったからこそ、やせ我慢だと分かる。いや…分かるようになったのは偶然だった。

任務中、犯人の仕掛けたトラップにより爆発に巻き込まれた陸士数人が重傷を負い、人手が足りなくなった時、将臣は偶然無傷だったと現場に戻ってきた。

ランクの割に弱い人だと思っていたが、試験に受かった事含め運だけはいいのだと納得したギンガだったが、事件解決後、出血多量で将臣が倒れたと聞き、以降何気なく観察するようになった。

だから将臣は本当に痛い時には騒がないタイプだと知る事になった、もし軽傷ならば今頃無駄に騒いでいるか愚痴っている筈なのだ。

そんな時折見せる真面目な時の将臣は、先輩として見習っている事に将臣は気づいてはいない。

「捕まえてレリックを狙う理由を聞き出さないと、もしかしたら事件に関わってるかもしれないし」

ティアナがそう呟いた瞬間、地下全体が揺れ始め天井に亀裂が走った。

「おいおい…ヤバい崩れるぞ！？」

「スバルとギンガさんは先行して脱出口の確保！エリオはキャロをお願い！将臣士長ペース上げられますか！？」

「くそ！生き埋めになるくらいなら走るっての！」

次第に激しくなる揺れに焦りながらも、フォワード陣は無事崩落直前に地上へと脱出する事に成功する。

（ん？地雷王がいない？転送されたのか？）

「キャロ！あの子達の位置は？」

「もう終わった、お前らちゃんと無事みてーだな」

「ヴ、ヴィータ副隊長！？」

指示中だったティアナがつい驚きの声を上げてしまう。だがそれも無理もない話だった。

振り向いた先にはバインドで拘束されたルーテシアとアギト、そしてヴィータとリインフォースの姿があったのだから。

「オイオイ、いいとこ取り過ぎだろ…」

内心ホッとしながらも将臣が口を開く、知る展開より人物が現れる順序や時間に誤差があった為ヴィータ到着には心から安堵した。

「お前らも良くやった、後はレリックとこいつらを連れて帰るだけだな」

「そうっすね、この女の子達も無事逮捕したし」

「…逮捕は良いけど」

黙っていたルーテシアが口を開き、将臣以外の全員が意識をそちらに向ける。

「大事なヘリを方っておいてもいいの？」

「な！？」

ヴィータを含め全員が声を漏らしたのと、エネルギー反応感知の通信が入ったのは同時だった。

◇

「あの人が防いだと言うなら、私は少しやり方を変えます」

エネルギー反応を感知すると同時にシュテルは動き出した。

（こちらは私が防ぎます、あなた方は狙撃手を）

（え？シュテルさん！？）

接近していたなのはに一方的な通信を送り、同時にカートリッジを三発ロード。

「…行きます」

通信では推定オーバーＳの砲撃だと慌てた様子のオペレーターの声が聞こえたが。将臣からはＳ相当の砲撃と聞いていたが、Ｓランクの自分が護衛についた事で威力を上げてきたのだと容易に想像が出来た、だがそんな事では動揺しなかった。

エネルギー反応から数秒、シュテルは迫り来るエネルギー弾の光を捉え、そして。

「ブラスト・ファイヤーー！」

防がず、真っ向から撃ち抜きにかかった。

そして。

「っ！？バカな、でも見間違いじゃ…ない！」

撃ち終え、イノーメスカノンのスコープで護衛の魔導師を撃ち抜きヘリに当たったか確認していたディエチは、慌ててスコープから目を離し走り出す。

「ど、どうしたのディエチちゃん！？」

「ほ、砲撃が来る！」

「え？」

二人がいたビルが緋色の、まるで壁のような閃光に飲み込まれたのはその直後だった。

手応えを感じ、遥か先の狙撃手に向けていたルシフェリオンを下げる。

「お疲れ様です」

相殺にカートリッジ二発、射程距離延長と命中範囲拡大に一発、計三発をロードしたルシフェリオンは余剰魔力と熱を放出しつつ、主同様になんでないように返事を返す。

「護衛任務を続けます」

恐らく今頃はフェイトとなのはが狙撃手を追い詰めているだろう、シュテルは将臣から頼まれた仕事を終えたものの、万が一に備えそのまま気を緩めずヘリの護衛を続けた。

◇

「狙撃を押し返して攻撃って…」

「す、凄い…」

通信を聞いたスターズの二人が安堵と共に呆ける中、ヴィータの怒りは頂点に達していた。

「テメェ！仲間がいんのか？どこだ！」

「ヴ、ヴィータ副隊長落ち着いて！」

「うるせぇ！」

自分も止めに入ろうとしたギンガが、ふとエリオとルーテシアの間に立つ将臣が、普通ヴィータに視線が行きそうなものを何故か足元に視線を動かし気にしている事に気付いた。

疑問に感じ声をかけようか迷った瞬間、地面から手が移動して来るのを発見した、恐らく将臣とエリオからは死角になっている。

「エリオ君足元に何かいる！」

「え？うぁ！？」

「いっただきぃ！」

ギンガの叫びと同時に地面から現れた謎の女がケースを奪い取り再び地面に潜るように消えてる。

「くそ！仲間か！？」

そしてルーテシアへの注意が逸れた瞬間、逃げたと思われた謎の

女が今度はルーテシアを連れ地面へと潜っていく。

「反応…なしです」

リインフォースが反応のロストを告げ、ヴィータが拳を地面に叩きつける。

「くそ！あたしのミスだ…気を抜いた…ロングアーチ、すまねぇ関係者に逃げられた…レリックも…」

ヘリの無事を確認し、気が緩んだ一瞬をつかれた。頭に血がのぼっていたのも原因だろう。

「なのは隊長達も逃げられたか…やれやれ」

空気を読まない発言をする将臣に視線を向けるが、ティアナは落胆するヴィータに恐る恐る声をかけた。

「あの…ヴィータ副隊長？」

「報告中だ、後にしろ」

「いや…実はですね」

言いづらいのか口ごもるティアナに変わり、スバルがキャロの帽子を取る

意図を察したティアナはかけていたシルエットを解除して見せる。

「ヴィータ副隊長見て下さい！レリックは無事です」

「内部で封印するちょっと時間があったので、私のシルエットで細工を…」

「お…お前ら」

「そんな悪知恵を…つか俺聞いてないんだが？」

口を滑らせるか、態度に出ると思われていたと分かりながら、将臣は一応言っておく。

セインに攻撃、又は確保しようかとも迷ったが、結局リスクを考え見逃した。

（スカリエッティが作戦を変えてきたら、もう後手に回るしかないしね…）

完全敗北かと思われたが、当初の目的であるレリック確保と少女の保護を完遂した面々は、先程より明るい雰囲気を取り戻していた。

（将臣士長…不意打ちを知ってた？でも、まさかね）

将臣の行動に不信感を抱きつつ、ギンガは将臣を見つめた。

第十五話

「改めて、シュテル二等陸尉、協力ありがとうございました。あはは、それにしてもなんか知ってた相手の顔が変わっただけなのに、変な感じだね」

「無理もありません、ですが以前と変わらぬ対応で構いません」

「それにしても…本当になのはとそっくりだね、姿だけじゃなくてジャケットやデバイスも」

事件終了後、ヘリを護衛したシュテルは、情報の整理と任務協力の終了後にお礼を兼ねてなのは達に食堂に招かれた。

保護した少女は検査の為、既に聖王協会の病院に預けられており、明日改めて引き取る事が決定している。

「管理局入りしたのは高町一尉の方が先ですので、良く間違われました」

「無理もないよ、付き合いが長い私達は別として、普通は血縁関係はあると思っちゃうんじゃないかな？あ、もしかしてそれで変身魔法を？」

以前何度か会った時には顔は違っていた、おそらく間違われる事を避けたかったからだと思うが、何故今更止めたのかフェイトは気になったがあえて聞かなかった、人には聞いて欲しくない話題もあると知っているからだ。

「はい」

「うぅ～、なんかごめんねシュテルちゃん」

なんとも言えない気持ちになり表情を少し歪ませるなのは、自分のせいとも言えるシュテルの変装の理由に困惑が隠せないようだ。

「アナタが気に病むことはありません。私が好きでやっていただけですから」

自分と瓜二つ、そしてデバイスや使用魔法まで似過ぎているシュテルに対し、なのはとフェイトは少しの不安と疑問を抱いているが、ロングアーチの調べで確かに登録は十年前に素顔でされている為、考え過ぎだとは感じつつフェイトはプロジェクトFの可能性をつい考えてしまっていた。

「将臣と一緒にいたんだよね？仲良いの？」

「そうですね、悪くはありません。ただ今回一緒だったのは成績が芳しくないと小耳に挟み渇を入れに来ていただけですので、執務官の思う所の浮ついた話ではありません」

「同じ部隊だもんね。シュテルちゃんも六課に出向して来てくれると有り難いんだけどなぁ」

とは言え、そう心の片隅で可能性として考えているだけの彼女達は、シュテルを年の近い知り合いの局員程度にしか認識しておらず、対応には誘導尋問などの類はない。

「部隊長の八神二佐と、ゲンヤ隊長からはそれを進められましたが許可が出るかどうかわかりません。」

「ふむ…そのお二人の許可が出ているなら大丈夫だろう、不正な引き抜きと言う訳ではないのだからな」

バトルマニアと囁かれるだけあり、シュテルの実力に興味がある烈火の将はどことなく上機嫌だった。

「だと良いのですが…」

「そうなった暁には是非お手合わせしたいものです」

「そうですね、是非。心踊る戦いになる事でしょう」

「あはは、今日のご飯も美味しいね、なのは」

「え！？あ、うん！そうだねフェイトちゃん！」

ポーカーフェイスの人は皆好戦的なのだろうかと思いつつ、今にも話の流れで戦い始めてしまいそうな二人の雰囲気をなんとかしようと周りが気が使う。

フォワード陣はただ苦笑いをするしかなく、面子が面子だけに会話というより聞かれた事に対する受け答えしか出来ない。だが現在、事件に関わったメンバーが殆ど揃っている中で、将臣だけは事件終了後自室に籠もってしまっている。

将臣本人が、『撮り溜めたアニメを見ないと死ぬ！飯？カップ麺が山とあるからいい』と去りながら告げた為、メンバーは相変わらずだなと思いながらさして気にせず食堂に来たのだが…。

「これで…よしっと」

人が来た場合に備え地球のアニメを再生し、ベッドに倒れ込む。

わざわざ地球のアニメを見ている事にしているのは、ミッドの作品では見ていない事がバレる危険があるからだ。

部屋に籠もる理由を考えた結果なんとなく思いついた言い訳だが、悪くない言い訳だと思っている。

「ふわぁ、眠い。…イージス？今日リミッター上げてないよね？」

『はい』

「そっか、じゃぁやっぱり…衰えか」

テレビを付けたまま、将臣は目を瞑り眠りに入る。

イージスの掛けるリミッターは、強化する部位を部分的に区切り、強化されていない肉体に負担を掛けすぎない動きに制限するものだ。

これにより通常の三分の一以下になる筋力を、リミッター使用前と近い状態にまで強化で引き上げている。

が、あくまでもこれは安易に無茶をする将臣を制御し休ませるべく、イージスが提案したものであり、使う筋肉はローテーションで満遍なく使用しているとは言え使わない筋力は徐々に弱まる。

ガジェットを固いと感じたのも、普段以上に体が疲労したのも使っている筋力が休ませている間に弱ったからに他ならない。

本来ならばリミッターなどかけず、将臣が自重し長期的な治療と休養を取るのが一番なのだが、それをするなら将臣からデバイスを取り上げ拘束するか、事件が全て終わるかの二択しかないとイージスは諦め妥協案的な措置がリミッターなのだ。

（それにしても、シュテルちゃんが六課出向になった場合かなり有利になるなぁ…。問題はそうなった時どの局面でどこに参戦してもらうかだなぁ）

夢現の中、刻々と迫る最終局面を頭の中で思い描きながら深い眠りについていった。

◇

「すみませんドクター、レリックの確保に失敗しました」

「あぁ…まぁ今回は貴重な実戦経験と情報が得られたと考えよう、終わった事をとやかく言うのは非効率だ。君達は私が言わずとも自分達で学習していくのだからね」

生真面目に報告するトーレとは裏腹に、ただただモニターに映し出される映像を口元を吊り上げ、愉快そうに呟くスカリエッティ。

スカリエッティにとって敵に位置する機動六課、しかし当の本人は自分に興味を抱かせる実験材料、又は気になる実験体のいる部隊としか認識していない。

本命の作戦まで何度戦い敗れようと、それはあくまでも経験値稼ぎ程度にしか思っておらず、そしてスカリエッティは本命の作戦は成功させる自信があった。

「クアットロとディエチは大丈夫かな？」

「はい、魔導師の砲撃を受けた事でダメージはありますが問題ありません」

殺傷設定でなくとも衝撃や痛みは発生する、何よりも魔力そのものにダメージを与えられてしまう為、戦闘機人でなければ魔力を削りつくされブラックアウトしていた可能性もあった。

「なら良かった。ふむ…あの魔導師については予想外だったが、まぁ大した障害にはないだろう」

Sクラス魔導師の一人や二人増えた程度では計画は揺るがない、と言った雰囲気を言外に匂わせる。自分の作品に全幅の信頼を向けているようだ。

「しかし…本当にこの部隊には興味をそそられるね。…捕獲対象はウーノにまとめさせた、後で妹達にも伝えておいてくれ」

「わかりました」

何故わざわざリスクを犯してまで、プロトタイプや人造人間を捕まえようとするのか、その理由や目的をトーレは共感出来なかったが、ドクターが望み命じた事になんら疑問や反抗の気持ちはなかった。

「それにしても、良くまだ生きていたものだ…少し揺さぶれば壊れてしまいそうだがね」

◇

「将臣士長起きてる？朝の訓練の時間よ」

翌日の早朝、時間になっても来ない将臣を起こす為、ギンガはバリアジャケット姿のまま扉を叩こうとした。

怪我でこそなかったものの、昨日明らかに無理を隠していた様子だった事もあり、純粋に心配していた為様子を見にきたのだ。

「予定通りになったけど…次はどうなるかな。ヴィヴィオちゃんとギンガちゃん、スカリエッティに渡すべきかどうか…」

（スカリエッティ？何？）

戦闘機人であり人より優れた聴力をもつギンガは、普通なら聞こえないであろう声も正確にその耳でとらえていた。

恐らくデバイスと会話しているのだろう。

ヴィヴィオという名は知らないが、確かにスカリエッティの名と、自分の名前が出ていた。

「下手に手を出して作戦を変えられると…ふぅ、今はまだ決められないな」

（っ！マズい出て来る！）

足音が扉に近づいた事に気付き、慌てて隣の空き部屋へと駆け込む。

「うわ！時間ヤバい！」

その直後扉が開き、将臣が慌てた様子で駆けていった後、周囲を警戒しながら外回りに出る。

「今のは一体…」

敵の奇襲を読んでいたような素振り、そして先程の言葉、ギンガの中で将臣に対する疑問は疑惑へと変わっていった。

「遅いなぁギン姉」

「あぁ疲れた…。でもギンガ一回こっち来たんだろ？」

「はい、でも起きて来ない将臣士長を探しに行って…」

「わ、悪かった」

探しに行ったギンガとは遭遇せず、将臣だけが訓練場に現れてから一時間は経過している。

「まぁその内来るだろ、ギンガの基礎はお前らよりしっかりしてるしな。良し、休憩は終わりだ」

早朝訓練、今日はなのはがヴィヴィオの引き取りの為不在、その為ヴィータが指揮を執り行われている。

「俺がいなかったら絶対探し出されるんだろうなぁ…」

「当たり前だ、お前が一番訓練しねーでどうする。それにそのままシカトされるようになったらお前お終いだぞ？」　言われる内が花、確かにそうだと頷く将臣をよそに、疑似ガジェットが次々と地面から現れる。

「ラストは模擬戦だ、設定はちょっと強めらしいからな、油断するんじゃねーぞ」

「「「「はい！」」」」

「了解…てかまじか…」

寝坊して慌てて部屋を出て来た将臣は、鍵をかけ忘れた事も、ギンガが自分の部屋に入っているとも夢にも思っていない。

「とりあえずフォーメーションはギンガさん抜き、まず様子見で牽制するわよ！」

「了解」

「了解ティア！」

「わかりました！」

「はい！頑張ろうフリード」

それぞれデバイスを構えながらポジションにつく、だがこのフォ

ーメーションも、迫り来るナンバーズの襲撃の日分断され活かす事が出来ない事を将臣以外誰も知らない。

第十六話

「急に呼び出すからなにかと思ったら…まさか子供の世話か」

「なのはさんに懐いちゃって離してくれないらしいですよ？」

「ま、子供の世話なんてやった事ないけど大丈夫でしょ。エリオとキャロもいるし、スバルも子供とかに好かれそうだしね、私はちょっと自信ないけど」

「が、頑張ります！」

「は、はい！ヴィヴィオちゃんと仲良くなれるといいねフリード」

「キュルックー」

「さらっと俺の名前がないな」

非番だったフォワード陣は仕事があるなのはに変わり、先日保護した少女、ヴィヴィオのお守りの為なのはの部屋に呼び出された。

「て言うか…エリオはともかく俺中入っていいのか？なのはとフェイトの部屋なんだよな？」

十歳のエリオと違い将臣は十九歳、無駄で部屋に入った場合、それ相応の罪に捕らわれるのは確実だ。

「まぁ流石にこれで逮捕されるような事はないですよ…多分」

「絶対ではないのか…」

「将臣士長が何もしなければ絶対です！」

（あれ？僕スバルちゃんに何か誤解されるような事したっけ？いやしてるんだけどさ、そう言う方向では何もしてない気が…）

ティアナが扉を開け一同が入室すると、将臣はつい視線を動かし部屋を見回してしまう。

「おいおい女部屋のグレードってみんなこうなのか？俺の部屋なんて……てかベッド一つしかないように見えるぞ…」

「う～、ヴィヴィオ？お願いだから良い子で待っててくれるかな？ダメ？……あ！みんなごめんね非番なのに」

上着の端を掴み、頑なに離そうとしないヴィヴィオをなんとか説得しようとしているなのはの姿はすぐに見つかった。

「いえ、自主トレもやってやる事も特になかったですし…ねぇスバル？」

「はい！全然平気です！」

「良かった、じゃぁちょっとヴィヴィオの事お願い出来る？一人は退屈みたいで…」

「はい！ほら～ヴィヴィオちゃん？お姉ちゃん達と遊ぼー」

ヴィヴィオの前にしゃがみ込んで話し掛けるスバルだが、警戒したのかヴィヴィオは涙目になりなのはの後ろに隠れてしまう。

「…びびってないか？」

「ごめんなさい、なのはさん…」

スバルが怖がられてしまった事で、やはり年が近い方が良いと言う事になりエリオとキャロが話し掛けるのだが…。

「ヴィヴィオちゃん、私の名前はキャロ、こっちはフリードリヒって言うのよろしくね？」

「僕はエリオ、えっと…なのはさんの代わりに僕達と遊ばない？」

「キュルー」

「…フリードはマズいんじゃないか？」

「ぅ…うえぇぇぇぇん！！」　将臣の呟き通り、ヴィヴィオは目の前のフリードに驚き今度こそ泣き始めてしまった。

（ヴィヴィオちゃん、確か魔法を知る為に優れた魔導師を探してて、それでなのはちゃんに近付いたって言ってたけど、普通の女の子にしか見えないよね）

泣き続けるヴィヴィオを見て、将臣は出会った時から無性に守ってあげたくなる気持ちが一層強くなるのを感じた、子供だからなのか、利用されるのを知っているからなのか、理由はわからない。

「お手上げ…だな」

「ヴィヴィオ？大丈夫だから、ね？うぅ、フェイトちゃんヘルプ～！」

上手く泣き止ませず全員がテンパり、なのはの祈りが届いたのかフェイトが現れたのはすぐ後だけ。

◇

地上本部で行われる予定の陳述会、将臣が現在一番警戒している所だが、本部襲撃前も何度かガジェット絡みの事件は起きている。

どれもさほど規模は大きくないが、時折ナンバーズらしき存在や攻撃を確認している。

直接ナンバーズとの戦闘にはなっていないものの、着々と経験を積んでいる事は確実だった。

（データを共有しデータを得る程強くなる…要は人間と同じだ、自分で考えて経験を動きに生かせって事だよね）

彼女達は機械ではない、だが入浴を洗浄と言うなど、どこか機械的な物言いもしていた。もちろん聞いた訳ではなく、将臣の記憶の中での話なのだが。

「どうしたんですか？将臣士長」

「あ？あぁ…いや、俺達は泣かせる事しか出来なかったのにフェイトは凄いなって思ってな」

エリオの言葉で我に返ると、山盛りだったサラダやおかずがいつの間にか半分以下になっている。

「僕達とも早く打ち解けてくれればいいんですが…」

「まぁ当分ここで保護するんだ、大丈夫だろ？へーきへーに」

記憶にないが、自分がヴィヴィオくらいの年の頃はあぁだったのだらうかと思う将臣。

「そう言えば今日ギンガがいないな」

もちろんいない事は気付いていたが、単に遅れているだけだと思っていた。しかしどうやら六課隊舎自体にいないようなので話題を振る為にも口にする。

「ギン姉はなんか調べものがあるとか言ってました」

「調べものね…スカリエッティ関連か？」

「う～ん、そこまでは私も聞いてません」

サラダを咀嚼しながら今後について考える。

個人のレベルも上がり、なのはは撃墜の後遺症もなく、極めつけはシュテルの六課出向、戦力的には決定的な問題はないように思える。問題があるとすればスカリエッティの策だろう。

万が一大幅に作戦が変わっていた場合将臣の持つ知識のアドバン

テージはなくなる、そうなるとその先を全く読めずに後手に回ってしまう。

そうなると結末自体が変わってしまう恐れが出て来る。ゆりかごが砲撃ポイントに到達し、ミッドが人質、罪悪感見えないは消え去る事になる。

それだけは絶対に阻止しなくてはならない。

そして、三日後遂に六課は運命の分かれ道となる、地上本部襲撃事件が発生することになる。

◇

ミッドチルダ首都クラナガン、その中心に建つ管理局地上本部。

この日、地上本部で開かれる会議の警備の為、機動六課は内外に別れ警備任務についていた。

今回もアグスタ同様に、なのはとフェイトは内部担当だが、今回はデバイスの持ち込みが出来ない為戦力としてカウントがされていない。

正式に六課に出向したシュテルを始め、シグナム、ヴィータ、ギンガ、フォワード陣、ほぼ全ての戦力が外部の警備に分散した。

振り分けに際し、同じ部隊であり連携が容易だと言う理由で、ギ

ンガが将臣とのコンビを希望。
元々コンビだったスバル、ティアナ、そしてライトニングの二人を組ませ配置する事はほぼ決まっていた為、その希望はすんなりと通った。

だが本当の理由は連携ではなく、将臣から目を離したくないというギンガの不安と警戒心からだった。

（やっぱりシュテルちゃんを六課隊舎に残すのは無理か…僕もギンガちゃんとコンビになったから事前に隊舎の救援に向かうのは無理だ、事件発生から向かっても間に合わない）

これから起きるであろう襲撃、信じられない事だが知る未来では六課の死亡者は０。だが必ずしもそうなると安心は出来ない。

実力があり、ナンバーズと戦うザフィーラやシャマルを始め、特に一般隊員の生死は多少の誤差で失われ兼ねない。

（こうなった以上、僕はギンガちゃんを守る事に集中しよう…隊舎の援護はシュテルちゃんか僕、早く動けるようになった方が行くしかない）

ソワソワと待機状態のグラムとイージスを触る将臣。あの日から数日、悩んだ末に将臣が決めたのはギンガとヴィヴィオの保護だった。

今現在までに生じた誤差、その事を考えるとゆりかご進行と航行部隊の到着にどうにもならない差が生じるのではと危惧したからだ。

自分でも驚く程あっさりとなのは達に関わってしまう選択をする

事が出来た。今までは傍観者と言われても仕方ない役立たずでいた自分が、何故こうも積極的な策を選べたのか？将臣自身も上手く言葉に出来なかった。

「しかし…俺と組みたいなんて意外だったな。あんまり相性は良くない気もするけどな」

今まで砲撃魔法を見せた事のない将臣は、現在初歩的なベルカ式近接魔法と拘束力の持続しないバインドのみ。

同じ近代ベルカ式であるギンガも近接戦は高レベルではあるがこの組み合わせの場合互いに出来る援護のバリエーションは少ない。

「…同じ部隊の仲間だから当然じゃないかな？」

「ま、やりやすくはあるんだけどな」

『こちらロングアーチ！ガジェットの反応あり！凄い数です！』

「来たか…イージス、セットアップ」

騎士甲冑を身に纏い、まだ目視出来ないながらも二人は身構え空と地上を警戒する。

『こちらシュテル、上空の敵に砲撃を開始します、地上と撃ち漏らしをお願いします』

「しゃぁ！了解！頼みますよシュテル二尉！」

「よし、絶対にここで食い止めるわよ！」

空に黒点が徐々に見え始め、それと同時に緋色の閃光が走る。
「おいおいこれは…数が多すぎるな…シュテル二尉でも、全方向から来るガジェットを抑えるのは無理だぞ」
「それでもやるしかないでしょ！」
「当たり前だ！」
建物の影から次々と現れるガジェット？型に向かって二人は走り出した。

◇

「あの動き…？型に混じって魔導師がこちらに来ているようですね」
「撃ち落とせねーか？」
「ガジェットが少ない場所を縫って飛んでいます、あれを狙うと相当数のガジェットに抜かれてしまいますが…」
空中で背中を合わせたシュテルとヴィータは息を整える、既にユニゾンしたとは言え、シュテルの護衛と地上のガジェット破壊に動き回るヴィータも、高威力砲撃と防御を連発している二人は流石に体力と魔力の消費が激しかった。
「よし、あたしとリインでやる」

「わかりました。直線狙っていないとは言え、あれだけ避けるとなると恐らくストライカー級です、気を付けて下さい」

「おう！任せとけ！」

ヴィータの進む道を作る為カートリッジをロードしたブラストファイヤーを本部目指し飛行する魔導師へと放つ。

「避けられました、流石にこの距離では厳しいですね。ガジェットの爆発で弾道も読まれてしまいますから」

「十分だ！行くぞアイゼン！」

ガジェットが掃討された射線を一直線に飛び、本部に接近中の魔導師に向かって行くヴィータ。

「旦那！なんか来る！」

「む…管理局の魔導師か、やはりすんなり通してはくれんか」

長距離砲撃だけならば本部へたどり着けたものをと内心歯噛みしつつ、男は猛スピードで先回りしたヴィータを迎え撃つ為動きを止め槍を構える。

（ヴィータちゃん！敵は二人、しかもベルカ式です！）

「あぁ、片方は前に逃がした奴だな…お前らこの先になんの用だ？これ以上進ってんなら逮捕する！」

「前と雰囲気が違う？ユニゾンしてやがるな！旦那！あたしたちも

！」

「あぁ、頼む」

「話す気はねー見てーだな、仕方ねぇ…ちょっとぶっ叩いて喋らせてやらぁ！」

グラーフアイゼンを振り上げ突進するヴィータを前に、眼前の騎士達は慌てる様子を見せず、ただ静かにユニゾンインとつぶやく。

頭髪や装備など、一部が金色に変わり、アームドデバイスらしき槍は炎を纏い始める。

そして難なくヴィータの初撃を受け止め、鍔迫り合いが始まる。

「恨みはないが、通させて貰おう」

「面白ぇ、この鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン、そして」

（祝福の風、リーンフォース）

「あたし達を倒せるならな！」

第十七話

「流石に、防ぎ切れませんね…」

最後のカートリッジを消費したブラストファイヤーを撃ち終え、後ろを振り返ると本部が誇るフィールドには未だに無数のガジェットが取り付き、内部を無力化しているのが確認出来た。

内部の発電機関も破壊されたらしく、敵の増援はなんとか落ち着いてきたものの、未だに劣勢な事は間違いない。

「そろそろ高町なのはと、テスタロッサ・ハラオウンにデバイスが届く筈…それで立て直せればいいのですが」

ＡＭＦの影響で念話は通じない、通信も途切れたままであり、最後の通信では六課隊舎にもなにかあったようだが、シュテルは六課に向かうと言い出したエリオとキャロを援護し向かわせる事が精一杯だった。

シグナムとヴィータも出ているものの、制空権の確保は殆どシュテル一人が行っているのが現状だからだ。

それに、ヴィータは謎の魔導師と好戦に入ってから連絡がつかない、シグナムが援護に向かったらしいが念話が通じない状況では既に確認のしようがなかった。

魔力と体力、双方ともそれなりにあると自負するシュテルだが、やはり限界はある。現に魔力は限界が見え始め、カートリッジは底をついた。

砲撃魔法もさる事ながら、本部や自信に対する攻撃の防御に使う魔力もバカにならない。

何度も本部への狙撃をガードし、それでも散弾タイプの砲撃は前回のように押し返そうにも分裂した弾丸が本部に届いてしまう。故にシュテルは大規模なバリアやシールドでそれを防いで来た。

「防衛ラインを下げるしかありませんね…」

ビルに着地し、ありったけの魔力弾を生み出す。

「パイロ・シューター！」

生み出された３２発の魔力弾は残存ガジェットに降り注ぐ、魔力切れの危険も出て来たシュテルは、ガジェット爆発に紛れた後方への撤退を余儀なくされた。

（将臣、どこで何をやっているのですか？）

「待てギンガ！行くな！地上のガジェットはどうすんだ！」

「内部の発電機関が破壊されたのよ！？あのタイミングじゃまだガジェットはそこまで内部には入ってない筈、ＡＭＦ下でそんな事が出来るのは高レベル魔導師か戦闘機人しか考えられない！」

「憶測だろ！いくな！ここはどうすんだ！」

ギンガと将臣の担当する防衛ラインには他の管理局員もいるが、複数のガジェット？型に苦戦し、？型に至っては撃破はギンガ、時

間をかければなんとか将臣が撃破出来る程度であり、攻撃面は二人に依存していた。

ＡＭＦの影響下で戦える魔導師が少ないのだ。

そして将臣も又、リミッターを徐々に緩めなければ対応出来なくなってきている。それだけ余裕がないのだ。

とは言えリミッターを完全解除して戦わないのには訳がある、難しい理由も考えもなく、単純に持たないからだ。一時は確かに戦力アップが見込めるだろうが、時間が経てば動けなくなり今のリミッター状態より状況が悪化するのが目に見えていた。

そして、そうわかっていながらもやむを得ずリミッターを外し始めている自分に対し焦りが生じている。

「ガジェットの増援も減ってる！それに中の人達はデバイスも持ってないのよ！？」

将臣の腕を振り払おうとするが、右手を掴む将臣の左手はなかなか離れない。

「知ってる！だが今は目の前の仕事に集中しろ！今お前がいなくなったらここにいる人間はどうする！？」

「知らない所で…、知らない人なら誰が死んでもいいって言うの！？」

「目先の仕事も出来ない奴に人の命が救えるか！人の命に優先順位をつけるな！」

振り払おうとしていた腕を止め、ギンガは将臣を睨み付ける。足を引っ張る事しかして来なかった相手に言われるには過ぎた言葉だった。

「やる前からそうやって悪い方にばかり考えて、結局見捨てる口実じゃない！私がいないとアナタが困るって言えばいいじゃない！」

「あぁ困る！だからお前は残れ！内部には俺が行く！お前が抜けたらここは長くはもたない！分かってるんだろ！」

「え！？ち、ちょっと！」

予想外の返答に加え、予想以上の力で引き寄せられたギンガはよろけ、言葉と同時に走り出した将臣の事を見送る事しか出来なかった。

「な、なんであんなに必死に？」

将臣と言う男はひねくれ者だ、小さな事を大げさに言い、本当にマズい時は黙っている。

臆病と思えば何も考えず飛び込んでいったりする、人の命を軽視する事はなかったが、今まで共に仕事をした中であそこまで必死の将臣を見たことがなかった。

（もし…もし仮に将臣が事件になんらかの関わりがあって、今私に内部にこられちゃマズいとしたら？）

保護した少女の名はヴィヴィオだった、それを将臣が知っていた

理由を考えた時、ギンガの中で将臣は限りなく黒に近いグレーの存在だった。

（ごめん、やっぱり信じられない）

「大型ガジェット破壊後、一時離脱します！」

◇

（早くなのはさんにコレを届けないといけないのに）

（今戦ってる時間はないのに…この状況じゃシルエットは使えない。ダメージ覚悟、バリアを張って無理やり突破するしかないわね…）

デバイスを渡す為地下通路を移動していたスバルとティアナの前に、ノーヴェとウェンディ、戦闘機人の二人が奇襲を仕掛けた。

無数の誘導弾に囲まれてしまった二人だが、このまま大人しくしているつもりは流れ。

「案外簡単だったっスね～」

「どうせ中には敵はいないとでも思ってたんだぜ、コイツら」

楽しそうなウェンディと対照的に、ノーヴェは退屈そうに二人に近付いていった。

「オレンジ頭の方はいらないんだよな？」

「そっスね、必要なのはタイプ・ゼロだけっス」

（タイプ・ゼロ？とにかくこいつらの狙いはスバルか）

（ティア！）

（大丈夫、攻撃と同時に防御、そのまま駆け抜けるわよ）

誘導弾に囲まれている為打撃は敵も出来ない、その為攻撃は砲撃魔法か飛び道具しかないと推測をたてる、ティアナは無意識にクロスミラージュを持つ手に力を込め、スバルにバリア展開を指示するタイミングを計る。

「悪く思うなよ」

ノーヴェがガンナックルをティアナに向ける。

（今！）

その瞬間、スバルがカートリッジを一発ロードしたプロテクションを展開。

二人を包みながら範囲を広げたバリアは、ガンナックルからの射撃と周囲の誘導弾に接触するが破壊されず逆にそれら障害を排除する事に成功する。

「ぐっ！」

「うおぉぉぉ！！」

誘導弾爆発の余波でよろけたノーヴェに、爆煙の中から飛び出したスバルの拳がガード越しにノーヴェを捉え後方の壁に吹き飛ばす。

「ノーヴェ！？うわっ！？」

それを援護しようとしたウェンディだが、ティアナが放つ魔力弾に足を止められてしまう。

「スバル！行くわよ！」

「うん！」

後方にクロスミラージュによる射撃で威嚇しつつ、追撃はせず走り出すスターズF、優先順位は最初からデバイスを届ける事と決めている為、余計な欲は出さない。

「アイツらぁ！！」

「一杯食わされたっスね」

すぐに二人を追おうとするが、姉であるチンクから通信が入り足を止める。

『お前達、すまないが手を貸してくれ。ファーストと交戦中だ』

「チンク姉？く…わかったよ」

「了解っス」

◇

「く…強い」

防衛ライン周辺の大型ガジェットを撃破し、将臣を追って内部に入ったギンガだが、ナンバーズと鉢合わせし交戦する事になった。

爆発する刃物を使う敵相手に、得意のクロスレンジでの戦闘に持ち込む事で善戦しているが、マントが作り出すハードシェルと言う名のバリアに阻まれ決定打が与えらんない。

「大人しくついて来る気はないか？あまり手荒真似もしたくない」

「誰が！」

リボルバーナックルを構え戦う姿勢を見せるギンガ。

だが援軍の到着を待ち、堅実な立ち回りをするチンクに付け入る隙がない。

（あのバリアを破るのにもたつくと、あのナイフ的になる…破るなら一撃、一瞬で本体まで）

カートリッジを二発ロードし、リボルバーナックルの全面に小さく硬質なフィールドを形成する。

（貫く気か…だが！）

「近づけさせると思うか！」

両手に持ったスティンガーを連続で投げつけ、ギンガを足場ごと爆破する。

「ナックルバンカー！！」

ダメージを受けつつも、爆煙から飛び出したギンガは左手を振りかぶり一撃必倒の一撃を展開されたハードシェルへと叩き込む。

「く…！？」

「これで…！」

ハードシェルに罅が入り、突き破ろうとした瞬間、ギンガの脇腹に魔力弾が直撃し大きくのけぞってしまう。

「うらぁぁ！」

体勢を崩された所に乱入して来たノーヴェの跳び蹴りを受け、ギンガは壁へと叩きつけられてしまう。

「お待たせっス、チンク姉」

「ウェンディ！ノーヴェ！良いタイミングだ」

「ぅ……増援、でもまだ」

歯を食いしばり立ち上がるギンガだが、単純に人数が増えた頃、そして前衛と後衛のバランスが相手にもたらされた事、それだけでギンガの優位性や付け入る隙は限りなくゼロに近くなった。

（まだ動ける…けど、例え退くにも逃げ切れるかどうか）

リボルバーナックルを構え、依然として交戦の姿勢を崩さないギンガをよそに、ナンバーズの三人はゆっくりと自分の優位なポジションに間合いを変えていく。

ギンガの勝機は一点突破による個別撃破、だがそれをナンバーズに行うにはカートリッジの魔力増強が必要不可欠だ。

しかしナックル内部のカートリッジは、既に先ほどのロードで使い果たし、シリンダーを付け替えようにもそんな隙はない。

「仲間に来られても面倒っス、ちゃっちゃと捕まえて帰るっスよ」

「あぁ、だが油断はするな、かなり出来るぞ」

「わかったよチンク姉」

そして四人を一瞬の静寂が包み込む、互いに攻め込む隙と場所をさぐり合う、静かだが戦況の流れを掴み、流れに乗る為の重要な攻防だ。

後衛であるチンクがあえて隙を作りギンガを誘うが、判断ミスが即敗北に繋がるギンガはそれに釣られない。

（どの道一斉に来られたら持たない…何か策を…これはっ！？）

なんとか逆転の糸口を模索するギンガだったが、突然周囲を無数のナイフに囲まれる。

（…この数のナイフが爆破したら）

「奥の手はとっておくものだ…安心していい、ドクターから殺すなと言われている…行動不能にはなってもらうがな」

（まずい、防御を！）

タイミング的に防御は可能だった、だが恐らく敵はそれを見越した上で、展開されたバリアやフィールドを破壊し行動不能に陥る爆発を起こすだろうとギンガはわかった。

その瞬間、防御より速くギンガは体に軽い衝撃を受けた。爆発音が耳に届いた。

痛みはない、自分は防御に失敗し死んだのか。それとも、奇跡的にバリアの強度が爆発を上回り無傷なのか。

恐る恐る開けた視線の先には天井と、見慣れた同僚の傷付いた顔が映り込んだ。

「間に合って良かった…」

「将臣…士長？」

第十八話

僕は焦っていた、破壊された発電機関の場所にたどり着いたものの、チンクちゃんの姿がなかったからだ。

他のナンバーズとも遭遇しておらず、宛もなく地下を走り回った。

あの様子では多分ギンガちゃんは遅かれ早かれ地下に入るだろう、そして…多分ナンバーズと戦闘になる、そんな気がしてならなかった。

「先回りしようとしたのが裏目に出た…確実に遭遇するならギンガちゃんと入るべきだった」

焦る僕の耳が爆発音を捉えたのは随分走り回った後だった、消費魔力や体力の事を頭から捨て、カートリッジを五発ロードした。

「イージス！ソニックムーブ！」

この高速移動を、僕はカートリッジ無しでは長時間維持出来ない。

体のリミッターも解除し、反射神経がギリギリ付いてくる限界の速度で疾走する。

漸く視界にナンバーズとギンガちゃんを捉えた時には、既にギンガちゃんが追い詰められた後だった。

（間に合え！間に合え！間に合え！間に合え！）

僕が今から着地しバリアを展開するのは間に合わない、急制動にも限界がある。

（加速して、突っ切る）

まだ余裕があったカートリッジ五発分の魔力を全て速度向上に回す、反射神経は既に遅れ始めている。

両手を広げ、ギンガちゃんを抱く事に集中する、幸いギンガちゃんは動いておらず、僕の軌道も一直線だった。

ギンガちゃんを腕に納め、爆発前にそのまま離脱出来ると思った瞬間、恐らく僕の気配に気付いたのだろう。

予想よりも早く爆発が起こり、一瞬バリアが遅れた。それでも途中まで前面に展開したバリアが盾になり、爆発を完璧ではないにしろ遮りなんとか抜け出す事が出来た。

ただ甲冑が普段使っているノーマルフォームだった為に、僕はナイフの破片に防御を抜かれ左目を失ってしまった。

それでも…

「間に合って良かった…」

「将臣…士長？」

「話は後にしよう、動ける？」

「は、はい」

やっぱり混乱しているのか、ギンガちゃんは珍しく緊張しているように見える。

「くそ、援軍かよ」

「案ずるなノーヴェ、私達の優位はまだ揺らいでいない」

「しっかし、あんなに速く動けるなんてクワ姉から聞いてねーっス」

距離感が計り辛い、これはまずいかな…。

（ギンガちゃん、僕が魔法を使うと同時に全力で撤退するよ？殿は僕がやるから、気にせずただスバル達と合流する事を考えてね）

（え？あ、でも）

（ベルカ式だけど僕はロングレンジもこなせるし、いざとなればソニックムーブで逃げられるから、僕が後ろの方がいい。彼女達の狙いはギンガちゃんなんだしね）

（…わかったわ）

よし…なら早速。

「スティンガーブレイド！イージーシフト！」

カートリッジ一発ロード、本来室内で使う魔法ではないのだけど、弾幕にはうってつけで、魔力変換資質がいらない事もあり結構得意な魔法だ。

生み出した無数の魔力剣をナンバーズに向かって撃ち出す、ウェンディちゃんはノーヴェちゃんをかばってのガード、チンクちゃんはハードシェルを使っている。

ギンガちゃんは作戦通り後ろの通路を走り出した。よし…これで僕が足止め出来れば…。

◇

何が起きたのか今も良くわからない。

いや、わかっているんだ、本当は。私は疑ってた人に助けられたんだ…怪我もしてた、きっと私を助けた時に…。

まだ爆発が聞こえる、足止めしてくれているんだ。

冷静になり始めた今だから分かる、多分将臣士長は逃げる気なんてなくて、最初から足止めに残るつもりだったんだ。きっと人に言っても信じて貰えない、私が逆の立場でも信じないだろう。

でも何故だかあの人が必死に足止めしてくれていると、敵ではなかったと信じている自分がいる。身勝手だ…ちゃんと、謝らなきゃ。

「ギン姉！」

「ス、スバル？どうしてここに！？」

「さっき戦闘機人と戦って、もしかしてギン姉も狙われてるんじゃ

ないかって。良かった…すぐなのはさんとティアも来るよ、外は落ち着いて来たから」

やっぱりスバルも狙われたんだ…スカリエッティ、どうして私達を狙うの？私たちも戦闘機人だから？

「兎に角丁度良かったわ！私と来て！将臣士長が大変なのよ！」

「将臣士長が？」

なのはさん達を待った方が確実だ、でも先行して合流した方が将臣士長も楽な筈。

「こっちよ！」

「あ！待ってよギン姉！」

冷静になった私は、リボルバーナックルの空になったシリンダーを排出し、新しいシリンダーを装填する。

私とスバルだと前衛しか出来ないけど、将臣士長はロングもこなせると言っていたし、あの魔法は普段将臣士長が使っている魔法とは比べものにならない難易度のものだった。

だからきっとあの人が出来ると言った以上出来る筈、普段からは想像もつかないけど、あの人は弱くないような気がする。

「ギン姉！ギン姉ってば！」

「え？何？」

「もう！ずっと読んでるのに～！将臣士長が大変ってどういう事？」

「戦闘機人三人と戦ってるのよ、一人で」

きっとスバルは今何故そんな事になったか考えている、将臣士長が残って私が逃げる状況がわからないのだろう、無理もない。

「スバル！疑問も質問も後！この曲がり角の先にいるわ！」

構えを取りながら二人で一気に突撃する、でも…そこには見たくなかった光景が広がっていた。

まず目に入るのはおびただしい量の血、そしてその上に立つ三人のナンバーズ、そして。

スバルに似たナンバーズの一人が、血だらけの将臣士長の髪を乱暴に掴んで持ち上げていた。

「な…なに、これ」

スバルは一瞬状況が解らなくなったようだった、無理もない。こんな場面なんて誰が想像出来ただろうか…。

「…嘘、間に…合わなかった？」

「タイプゼロが二人一編に…どうするチンク姉？」

「目的は果たした、それにウェンディが運べる人数にも限りがある、退こう。」

「思ったより疲れたっスからね」

三人共ダメージはある、だからこそ変だ…早すぎる、きっと何か負けた理由がある筈…。

「逃がすと、思う？」

ウェンディと呼ばれたナンバーズが、大きなケースに将臣士長を詰め込み始めた、まるで物を扱うような手つきだ。

「悪いが退かせてもらう、ノーヴェはウェンディと一緒に行ってくれ」

「え？でもチンク姉は？」

「姉は大丈夫だ、セインが来るまで適当に時間を稼ぐ」

駄目。…逃がさない！「行くわよスバル！…スバル？」

「…返せ、将臣士長を返せぇぇっ！！」

混乱していたスバルが激情に任せ、戦闘機人モードにシフトしてしまった。

「スバル！」

「ウオォォォォ！！」

私の静止も耳に入っていないのか、将臣士長の入ったケースをも

つウェンディと言う戦闘機人に一直線に殴りかかる。
弾幕を張りながら割り込んだノーヴェを、マッハキャリバーを破損させながも蹴り飛ばす。
「スバル駄目！」
慌てて援護に回ったが、スバルは自分やデバイスのダメージ無視の攻撃を繰り返した。
「ウェンディ！ノーヴェ！いけ！」
スバルがガムシャラにチンクのバリアを破壊しようと、拳を連続で突き出す最中、負傷したノーヴェと将臣士長を拉致したウェンディが撤退の素振りを見せる。
そちらを追う私だったが、先ほど同様ナイフの突然の出現に、足を止め防御せざるおえなかった。
爆煙が晴れると既にナンバーズ二人の姿はなく、傷付いたスバルが恐らく爆発前にバリアを貫通され、振動破砕を食らったのであろうチンクが横たわっていた。
「く…！」
「将臣士長を返せ、返せよぉ！」
「落ち着いてスバル！あなたもデバイスもダメージが酷いわ！」
デバイスはほぼ全壊、身体も重傷、敵はもう成す術はないらしく動かない。無茶しなくても逮捕して居場所を聞き出せない筈。

「ギン、姉…」

疲労とダメージで倒れこむ妹を抱き止め、ナンバーズを振り返る。

「何故将臣士長を攫ったの？」

「……」

「答えて！」

スバルを寝かせ、逮捕の為に詰め寄った瞬間、床から手が現れその手に掴まれたチンクというナンバーズは沈むように床に入っていく。

「しまった！」

ナンバーズの会話に出て来たセインという言葉、魔法名や作戦ではなくこのナンバーズの名前だったのだと悟ったが既に遅く、床にリボルバーナックルを叩き付けたものの既に二人はいなくなっていた。

「そんな…こんな事って……」

立ち尽くす私と気を失ったスバルがなのはさんと合流したのはすぐ後だった。

地上本部崩壊は免れたものの、六課隊舎は全壊、謎の騎士と交戦したヴィータ副隊長とリイン曹長は、リイン曹長がヴィータ副隊長を庇い魔力切れによりブラックアウト。

六課隊舎の防衛にあたったメンバーの中、数多くの負傷が出た中でザフィーラさんとヴァイス陸曹が意識不明。

そして、ヴィヴィオと将臣士長が攫われてしまうという結末を迎えた。

◇

負けた…出し切る事も出来ずに、負けた…。

僕の身体も、僕も…思っていたよりずっと脆くて、魔法も、技術も関係なかった。

器が壊れてるんだから、意味ないよ。

…せめて…ギンガちゃんを守れていたら、事件が無事に終わってくれていたら、もうそれでいいや。疲れてちゃった…。

「残酷だがまだ何も終わってはいないよ。いや、これから始まるのさ！楽しい祭りがね」

誰…？

「私かい？そうだね、君の父親という事になるかな」

父親？嘘だ、僕には父さんも母さんもいない。

「本当にそうかな？良く思い出してみるといい、君がいつから独りぼっちだったのか」

いつから？…たしか、魔法を…いつ？父さんに頼んで道場に…

「あぁ、無理に思い出す必要はないよ、今はゆっくり休みたまえ、目が覚めたら全てを教えてあげよう」

…そうするよ、なんだか、とても疲れた。

「ただこれだけは覚えておくといい、私達は君の大切な家族だ。そして君は私達の大切な家族だ」

家族…僕の、大切なもの。

第十九話

スカリエッティによる管理局地上本部襲撃から一週間、隊舎を失った機動六課は廃艦予定だった次元航行艦アースラを移動可能な拠点としていた。

「みんな集まったな？指揮系統もようやく落ち着いた所で、みんなに聞いて貰いたい事があるんよ」

スターズとライトニング、そしてギンガが席についた所で部隊長である八神はやてが口を開く。

「捜査に関しては進展なしや、相変わらず地上本部は協力を拒んでる。だから六課はレリック事件の捜査、その捜査線上にスカリエッティがいるっちゅうスタンスや。ここまでは一昨日も話したな？」

全員が静かに頷いたのを確認し、はやては話を続ける。

「今からする話は半分はうちの推測やから、そういう可能性として聞いてな？」

はやてが隣りのグリフィスに合図すると、モニターに二枚の顔写真が映し出される。一週間前に攫われたヴィヴィオと将臣だ。

「まず…ヴィヴィオが攫われた理由は恐らくその出生が関わってる、それ以上の事は何ともいえん…情報が少なすぎるんや」

人造魔導師であり、発見時レリックを所持していたヴィヴィオ、

ただの子供ではない事は誰しもわかったが、スカリエッティが何故攫ったのか、何をやらせるのかまでは見当がつかない。

「問題はこっち、灘将臣についてや」

ヴィヴィオ以上に攫われた理由が謎だった人物、その為彼についてこの一週間はやてはは調べ回った。

「将臣士長はウチらの幼なじみでな、一番付き合いが長いのはなのは隊長で、次がフェイト隊長なんや。なのは隊長？将臣士長の両親にあった事あるか？」

「え？…えっと、小学生の時に何度か」

何故今更そんな事を？はやてとグリフィス以外の全員が疑問に思った。

「この書類、本人が入局の時に書いたものなんやけど…両親は将臣士長が生まれすぐ亡くなってる事になってるんよ」

「え？でも…」

そんな筈はない、将臣は幼少時道場に通っていた、そしてそれを頼みに来た父親となのは会っている。その後も幼少時に何度か両親とは会っている。

「それでな、クロノ提督にも協力して貰って調べたんや。管理外世界の事やからちょっと時間がかかったんやけど…そしたら、両親どころか灘将臣なんて人間は存在してなかったんよ」

「それ…どういう事？」

訳がわからず黙っているなのはの隣りで、フェイトが口を開いた。

◇

「ドクター、やはり彼は」

「ふふ、あぁ。彼は人造魔導師さ、それも古代ベルカの人間、聖王を守護する騎士のコピーだ」

培養液の中で眠っている将臣を見上げほくそ笑むスカリエッティ。

「ただ彼は失敗作でね、作った研究者もすぐに計画を破棄したようだ…だからコレが生きているのを見た時は良く生きていたと感心したよ」

「しかし彼は管理外世界の管理局員とレジアスからの資料では書かれていましたが…」

「何も間違っていないよ、ただ管理外で作られた人造魔導師というだけさ」

灘将臣の両親は研究員だった、成長速度や能力を確認する為、あえて魔法のない管理外世界で研究を開始。

夫婦である研究員の元、コピーに成功した将臣の観察を開始。

管理外世界にした理由として管理局の目から逃れると言う事と、刷り込みにより将臣が優れた魔力資質や技術の持ち主に無意識に近づいてしまう為、将臣本来のスペックと成長速度を調べる為魔法のない世界が選ばれた。

当初将臣にはプロジェクトのコードネーム以外に名前はなかったが、将臣が聖王ではなく、聖王の騎士だと言う事が分かり、その事から両親役の研究員が地球の名に合わせ命名した。

聖王でない事で将臣の破棄が研究所の中で検討されたが、聖王を守護する騎士の力は未知数の為、聖王の研究と付随し研究は続けられた。

だが変化は突然訪れた、地球があるロストロギア事件の舞台になったのだ。研究所は撤退、人造魔導師としても、守護騎士としても明らかに失敗作であった将臣はそのまま破棄される事が決定され、両親役の研究員にその指示が下った。

しかし、九年に渡る生活で情が移っていた研究員は、将臣の記憶操作に止まり、必要なくなった地球の研究資金を残し地球を去った。

その時、以前から何度か記憶の調整を受けていた将臣の思考は、急遽施された記憶操作処置の不具合と、自身が唯一オリジナルから受け継いだレアスキル『予知』の兼ね合いもあり記憶が混同し、精神的に不調をきたす事になる。

記憶操作で歪められた予知の記憶を持つ将臣は、元々自分が前世の記憶を持つ人間だと思っていたが、両親が生まれた時からいないという記憶の上書きをされ孤独を感じるようになる、

以後、本能的に魔力資質の高いなのはに近付くという行動をとり

がちになるが、本能的に動く自分と、予知を見た元々の自分、そして操作を受け幾つもの記憶と人格を持つ人格がごちゃごちゃに交わり、将臣は無意識下でなんとか予知通りの未来を迎えるべくなのはと距離を置こうとするが、結果的に嫌われる事でつかず離れずの距離をキープする事に止まってしまう。

将臣のなのは達を助けたい、仲良くなりたいという欲求はデータ収集の刷り込み効果であり。

逆に弱気になり嫌われようと振る舞うのは予知通りの未来を迎え、かつ自分に極力データを集めさせないようにする将臣本来の使命感と葛藤でもある。

「まぁ私より早く彼に気付いた老いぼれが根回ししていたようだが、壊れる前に回収出来たのは良かった」

「どうなさるおつもりで？」

「彼は心身共に限界だった、まぁ心は上書きするよりリセットしたほうがいいだろうね…身体の方はもう処置が始まっているよ。楽しみにしているといい」

◇

将臣が何らかの事件に関わる、身元不明人物という事実を聞いた六課メンバーは戸惑うばかりだった。

好感や信頼が持てる人物かと言われれば多少怪しいが、普通の人以上の感覚や突飛した能力もなかった。

特に不幸を背負っているようにも、何かを隠しているようにも見えなかった。

「それから…将臣士長についてウチより詳しい人がおるんよ、今回身元調査してくれたんもその人や」

『通信ですまないな、次元航行艦隊提督のクロノ・ハラオウンだ』

「クロノ？」

フェイトが驚きつい声を出してしまう、仲は悪くなかったがクロノが自分達以上に将臣を知っているとは思っていなかったからだ。

『実は彼を六課に出向させたのは僕とナカジマ三佐なんだ』

「クロノ提督が？」

『なのはが疑問に思うのも無理はないが事実だ。今思えば…やけにすんなり許可が降りた時に良く調べるべきだった…』

そこからクロノは以前将臣と一騎打ちの果てに敗れた話を始めた、そして将臣が異常なまでになのは達に関わろうとしている反面、何故か一定以上近寄らないようにしていた事も。

「どうかしてる…」

「ちょ、ティア！」

「だって自分の人生をただの知り合いの為に潰してるのよ？明確な理由もなく！」

人は自分が愛する者、自分の信念の為になら人の為に命を賭ける事が出来る。

逆に、理由も信念もなく命をただ他人に捧げる事は有り得ない、必ずしも理由は存在する。

将臣に皆を守りたいという理由があるにしろ、必要以上に信頼されたくないにしろ、もっと効率のいいやり方はあるのだ。

『そうだな…僕も何度も説得したが、彼はそれを変えようとしなかった』

「でも…スカリエッティが将臣士長を攫った理由っていったい…だってもし味方ならあんなに痛めつけたりなんて」

スバルはあの光景を思い出したのか小さく身震いする。

『ブラフの可能性も捨てきれないが、友人としてはそれはないと信じたいが…』

「将臣士長は私を助けてくれました！演技の訳が…」

「ギンガ…難しいかもしれんけど、一つの可能性として頭に入れといてくれへんか？みんなもや」

将臣が敵である可能性は０ではない、そう前もって皆に伝えたはやてだったが、やはり理屈でわかっていても感情の部分では誰一人それを現実にあるとは考えていなかった。

◇

『ある研究者の私的日記』

遂に聖王と思わしき細胞サンプルを入手、プロジェクトＦの技術を用いクローンの作成を開始。

クローンの作成に成功、しかし聖王としての能力の有無は以前として不明。

純粋な成長に伴う魔力値の上昇を把握する為０番を管理外世界へ移送、尚世話役として魔力資質を持たない研究員二人を同行させる。

投薬によりリンカーコアから魔力を強制噴出させた結果、聖王でない可能性が９５％まで上昇、尚一般的な幼児と比較した所、身体的に弱く虚弱であった為やむなく投薬により身体機能を強化。

作成から八年、思考に年齢以上の落ち着きが見てとれる、度々記憶を操作した事が原因と思われるが確証はない。

プロジェクトＦの技術提供者であるプレシア・テスタロッサが、とあるロストロギアを奪取すべく行動を開始、

管理外世界からの撤収と０番の破棄を決定。

あれから十年、遂に本物の聖王を生み出した我々の前に更なる幸

運が訪れた。０番が生存していたのだ、０番には聖王同様に魔力資質の高い者に近付きデータを集める事を本能的に刷り込んである、０番を回収すれば聖王にそのデータを移植する事が出来る。

聖王の成長は順調、問題は０番だ。あれの寿命はそう長くないと予想される、いち早く捕獲しなければならない。

明日聖王を目覚めさせる事となった、今まで得たデータで既に並の魔導師以上の力を持つ為十分に警戒が必要だ。

日記はここで終わっている

第二十話

「ＩＳスローターアームズ」

投げられた六枚のブーメランブレードが、空中でそれぞれ自在に軌道を変え目標に襲いかかる。

「この瞬間を待ってたよ！」

空中で身を翻し、なんとかブーメランブレードを避けていた将臣は、カートリッジを一発ロードし魔法陣の展開された両手を広げる。

それと同時に操作されているブーメランブレード六枚が全てバインドによって空中に固定される。

「っ！」

セッテは法則性も持たず、もちろん安直な軌道もさせていない六枚のブーメランブレードが、バインドによって無力化された事に流石に驚いたが、相変わらず無表情のまま一歩間合いを外すに止まる。

そのままセッテ撃墜の為にカートリッジを一発ロードした将臣は左手をかざす。

「ブラスト」

「ライドインパルス！」

「ファイうわ！？」

魔法名を口にし魔法陣を展開するが、発動より早く、先程まで安全距離を取っていたトーレが予想を超える速度でカットに入り、慌ててバックステップを行う。

「ほう…避けたか」

「やっぱり速すぎて設置型のバインドじゃ拘束出来ないか」

一応は警戒し自分の死角にはバインドの罠を設置しと置いたのだが、バインドは対象が通り過ぎてから発動するという徒労に終わっていた。

「なら」

グラムをイージスから抜くとカートリッジを二発ロード、高速移動魔法であるソニックムーヴを発動する。

「面白い」

ライドインパルスを起動させ、空中で互いに残存のような魔力光による紫と銀の光の線を残しながら何度も斬り合う。

（押されてる…なら一か八か！）

カートリッジを一発ロードしソニックムーヴを継続、だがトーレの方が速い為逃げに徹されると将臣には砲撃しかない、だが見失ってしまいそうな速度で動くトーレに大威力の砲撃など当てられず自信もない。

（斬り合いの一瞬だ、そこで隙を作れれば）

右手を振りかぶり一直線にトーレが突進してくる、だが恐らく右手では攻撃して来ない、罠、駆け引きに違いないと将臣は思った。

「グラム！セカンドフォルム！」

片手剣型ストレージデバイスのグラムにもセカンドフォルムが存在する、扱いが難しく将臣も使いこなすまでに時間がかかった奥の手だ。

持ち手を残し、１０センチ程度の小さなひし形の金属片となったグラムだが、次の瞬間残った持ち手からはグラム本来の刀身をかたどる形で魔力刃が形成され、２０に及ぶ刀身の欠片も同様に４０センチ程度の魔力刃を形成する。

「ブラスタービットとシュランゲフォルムからちょっとアイデアをね…行け！ブレードビット！」

「く！だが！」

（欠点としては操作に意識を集中するから誘導弾が使えない事だけどね…）

ブレードビットを攻撃に見せかけ、攻撃によりトーレの通る道筋を誘導する。前もって攻められるタイミングと方向がわかっていれば迎撃する事は難しくない。

（ここだ！）

「ブレイズキャノン！」

ブレードビットをかいくぐり、将臣へ接近したトーレだが、直後タイミングを合わせた将臣の砲撃を身に受け吹き飛ぶ。

「ぐ…やるな」

「しまった、浅い…」

発射速度と魔力変換資質の必要がない為良く使う魔法だが、カートリッジのロードなしでは将臣の攻撃力はオリジナルに届かない。

（カートリッジをロードしてたらバレてたろうし…チャージに時間がちょっとかかるディバインバスターとかも避けられてたろうし…）

魔力と集中力の消費が激しいグラムのセカンドフォルムを解除し、牽制の為誘導弾のスフィアを形成しようとするが…。

「私を忘れていませんか？」

「セッテ！？うぐっ！？」

背後からブーメランブレードを持ったセッテに斬りつけられ、地面へと一直線に落下する。

「ぐ…」

（裏をかいたつもりが…油断した…確実に無力化するべきだった）

衝撃で砕けた床から這い出すが、防御なしの状態で受けたダメー

ジは深刻だった。

「ふぅ…よし、今日はここまでだ」

「お疲れ様でした」

将臣の前に着地したトーレは将臣に肩を貸し立ち上がらせる。

「ありがとうトーレ姉さん」

「魔力消費を抑えたいのはわかるが、ちょっと距離が離れるとフィールドを解除するのは悪い癖だ、不意打ちの一撃で落ちるからな」

自分で歩こうとするが、膝が笑ってしまっている為そのままトーレに肩を借り歩く事になった将臣。

「途中までは良かったがな…あのビットの消費魔力はバカにならんな」

「あれ本来は三発ロードで使うものだしね」

「何故ロードしなかった？それに誘導弾でも事足りた作戦だと思うがな」

「流石に連続で模擬戦やるとカートリッジの数がね…消費と供給が間に合わなくて、それにカートリッジロードなしの誘導弾だとセカンドフォルムより遅いし威力がないから」

カートリッジ制作は暇な時間で行っている、だが連日の模擬戦でイージスの中には常に7～5発入っていればいい方だ。

「ふむ…ドクターに頼んでおこう」

「ありがとうトーレ姉さん」

◇

「シュテル二尉…」

「どうしました？ギンガ」

シュテルの部屋を訪れたギンガは俯き、影を帯び髪から覗くその表情は、精神な疲れがそのまま出ているかのように暗かった。

「その…将臣士長の事で……あの」

「迷わない事です」

「え？」

なんと言って切り出すべきか、それ以前に自分が何を言いたいのかすら分からず、気が付いたらここに来ていたギンガはシュテルの言葉にようやく顔を上げる。

「あの人と向き合う時、一番大切な事は迷わない事です。あの人が迷っている分、向き合う私達は迷わずに、真っ直ぐに」

将臣がシュテルのロードになりたがらず、シュテルに自由を与え

たたがったのも彼が人を拒絶しなければならないと感じていたが故だ。

将臣は人に甘えたかった、自分を想ってくれる人物が欲しかった。だがそれを拒まねばならなかった、迷いが故にだ。

だからこそシュテルは将臣が苦しまぬよう、つかず離れずの距離感で見守ってきた、見捨てる事も、愛情を与える事も将臣を苦しめるとわかっていたからだ。

将臣の支え、どうにもならなくなった時の支えになりたい、その気持ちは今もずっと変わってはいない。

「だから、ギンガもあの人を疑わないで下さい。誰よりも自分を信じらんない彼を、私達が信じてあげましょう」

「……シュテル二尉と将臣士長は…その、どういった」

「友達…なのでしょう、あの人の中では、まだ」

微笑と言うより、苦笑いのような、少し呆れたような表情で笑うシュテルを見て、ギンガはなんとなく将臣とシュテルがどういう間柄なのかわかった気がした。

「ふふ…苦労してるんですね」

「苦労させるのがとても得意な人ですから…」

将臣は敵になる、そんな事はシュテルはずっと前から考えていた。

殻を破る事なく、殻の中が自分の世界だと思い込み、将臣が迷いのない只の人になる時が来た時、きっと将臣は善悪を超えただ求めるものの為に、その事のみの為に生きるだろうと。

将臣が欲しかったものはずっと近くにあった、ただ伸ばす手を自分で止めなければならなかった。

だが今はきっと、甘えさせ堕落させる、一時の甘い手を差し伸べた者がいる。それに溺れる事を責める事は出来ない。

だからこそ願い、信じる。

（殻を破るのはあなた自身の仕事です、破って下さい、そして手を伸ばして下さい）

◇

「ビンゴ…ここがスカリエッティのアジトで間違いないね」

「凄いですねロッサ、こんな場所にあるアジトを見つけだすなんて」

ミッド自然保護区、その一角にある洞窟の前で聖王教会の騎士、シスター・シャッハと管理局で査察官を務めるヴェロッサ・アコースは事件解決の大きな一歩を踏み出していた。

管理局地上本部襲撃から二週間、あれ以来全く動きを見せていなかったスカリエッティのアジトを遂に突き止めたのだ。

「おいおい、いつまで僕を子供扱いする気だい？おっと…やっぱり只じゃ返してくれないみたいだね」

洞窟内部、そして周囲を囲むように無数のガジェット？型が現れ始める。

「戦闘はあんまり得意じゃないんだけど…そうも言ってられないみたいだね」

「任せて下さい、カリムとあなたを守るのが私の務めるですから！」

ヴィンデルシャフトを構えカートリッジを二発ロードするシャッハ、彼女は陸戦ＡＡＡの騎士、数は多いがガジェット？型相手ならば足をすくわれる可能性はほぼゼロだ。

「頼もしいね、でも僕も男だ、少しはやるって所を見せないとね」

二人がガジェットとの戦闘を開始した頃、ナンバーズはそれぞれに与えられた任務達成に動き出していた。

来たるべきゆりかご浮上、その下準備の大詰めである。

「ドクター、侵入者です」

「おや、予想より随分早いね…まぁ手遅れには違いないがね」

モニターにはガジェットを切り刻むシャッハが映し出されるが、その他のモニターにはアインヘリアルを制圧したナンバーズ達が映し出されている。

勿論全員が制圧を完了した訳ではないが、制圧間近なのは間違い

なかった。

「アインヘリアルの制圧、全て順調です…13番目も問題なく動いています」

「ふむ…まだ彼を警戒しているのかい？」

「…はい、洗脳処置もされていない人間があれだけ協力的になられると、やはり裏があると考えてしまいます」

将臣に行った処置は刷り込みと記憶操作を取り除く事、と言ってもそれは記憶や人格の消滅なくしては不可能、故に行われた処置は厳密には削除ではなく、やはり上書きに過ぎない。

捕獲当初、治療の為薬により半ば眠っていた将臣にスカリエッティは幾度となく語り掛けた。自白剤などという無粋なものを使いはしたが殆ど無意識下で受け答えする将臣の言葉は理性が働かない分真の将臣の意志であり、願いであり、欲求だった。

それを元に本来の将臣と思わしき人格を、時間をかけ丁寧に上書きしたに過ぎない。

消しゴムで消せなかった文字の後を修正液で白くしたような処置だ。

失敗すれば今まで将臣を苦しめてきた記憶操作の二の舞になる事が懸念されたが、元々あった欲求や思考は上書きされる事で強調され、他の記憶や刷り込みを上回った。

揺さぶりに対する耐性をつける為記憶を残し、あくまでも自発的

な協力を望んだ結果が現状だ。

「彼はね、自分を愛してくれない人間の為に死ぬ事より、自分を愛してくれる者の為に生きる事を選んだんだよ、それは当然の事だ」

「彼は管理局の騎士、私達は本来敵の筈では？」

「人は素直な生き物だよ、誰だって自分の為に生きている。自分が好きだから人を守り、自分がその人間を好きだからその人間の為に死ぬ」

聞き入るウーノに一度微笑を浮かべスカリエッティは続ける。

「彼はずっと、ただ愛して欲しかったんだよ、そして自分の意志で人を好きになりたかった。そして、その為なら死ねる男だ。ずっと飢えていた彼だ、善悪さえかなぐり捨てて殉じるのも理解出来る」

その飢えをむき出しにさせたスカリエッティにはわかっていた。

自我と欲求が強まり、自分の意志で人を好きだと自信を持てる将臣は善悪を無視し、今まで人の為に生きてきた分だけ自分の為に生きるだろうと。

第二十一話

アースラの会議室に集まった六課の面々の表情には、今まで以上の緊張が見てとれた。

それと言うのも数分前、シスターシャッハにより遂にスカリエッティのアジトが判明した事と、同時に地上本部の戦力であるアインヘリアル、及びその防衛にあたった部隊が全滅したからである。

そしてそれを成した者の中には、カーキ色の騎士甲冑を身に纏った六課が良くしる人物も含まれていた。

「シスターシャッハの協力でスカリエッティのアジトがようやく判明した、六課はこれより幾つかのグループに分かれて動いてもらう事になる……みんな覚悟はええな？」

現在アインヘリアルを破壊したナンバーズの内、将臣を含めた四名が地上本部を目指し廃棄決定都市を移動している。

ガジェット？型も確認されており、スカリエッティのアジトに全員で踏み込む事は出来なくなっていた。

「アジトへはフェイト隊長となのは隊長に行ってもらう、ガジェット担当はヴィータとシグナム、残りはナンバーズの逮捕や、うちとリインは指揮と状況に合わせて援護に向かう」

このタイミングで動き出した事に裏がある事を薄々感じているはやては、スカリエッティのアジトにフェイトとなのはという絶対的

な存在を向かわせ、起こるであろう不測の事態の対象用意として自身とシグナム、ヴィータを融通の効くポジションに配置した。

シュテルとギンガをフォワード陣と共に向かわせたのも、いざという時の為を考えた結果だ。

（先手をとれれば全員で乗り込めたんやけど…過ぎた事言ってもしゃーないな）

「みんな、今回の事件これで終わりにするよ、覚悟はええな？」

全員が力強く頷き、それを見たはやてが解散と作戦開始の命令を下した。

ヘリで移動するフォワード陣と、ここから地上本部へ向かうシグナム達、ブリッジでの指揮があるはやては素早く退室し、会議室にはフェイトとなのはだけが残った。

「いよいよだね…フェイトちゃん」

「うん、スカリエッティさえ逮捕出来れば今回の事件は終わる。私はスカリエッティを逮捕するから、なのははヴィヴィオを助けてあげて」

なのはが思いつめ、責任を感じている事は明らかだった。そしてきっとまた無茶をするであろう事も。

「ううん、大丈夫。二人でしっかりスカリエッティを捕まえて、それからヴィヴィオも助ける。フェイトに無理させられないもん」

「私はなのはが無理する方が怖いよ、だからスカリエッティは私に任せて！」

「私もやるよ」

「私がやるの！」

わざとらしく不機嫌そうな表情を見せるなのはに、ようやくフェイトはなのはの気負いを和らげられた事を感じて微笑む。

「む～、フェイトちゃんちょっと頑固」

「なのは程じゃないよ」

互いに笑みを漏らす、互いに暗く沈んでいる姿は似合わないと心底思った。

「これが終わったら私謝らなくちゃ…」

「え？」

「将臣君の事避けてた事、無理させちゃった事」

「私もだ…でもどうしてこうなっちゃったのかな、話し合う事は簡単に出来た筈なのに」

自分でも不思議なもので、将臣とは長い付き合いではあるが、一歩踏み込んでいく事が出来なかった。得体がしれない所はあったし、変わっている人だとも思った、だからこそあのなのはが話し合わず避けていた事が不思議だった。

「なんかね…将臣君を見てると、触ったら壊れちゃいそうって思えたんだ。将臣君も私が話し掛けると凄い辛そうで…ううん、今のは言い訳かな。本当はどうしていいか分からなくて、いつか向こうから歩み寄ってくれるって思っちゃったんだ私」

「話そう、これが終わったら…皆でちゃんと」

「うん」

◇

現場に向かうヘリの中、スバルは何度めか既に分からなくなる程ため息をついていた。

「私達…戦うんだよね、将臣士長と」

「今まで何回も模擬戦で戦ったじゃない、なに緊張してんのよ」

弱気になっているスバルにティアナは敢えて余裕の表情を作りながら背中を軽く叩く。

もちろん口で言ったような事は考えてはいない、クロノ提督の話が嘘や誇張でなければ将臣はＡＡＡ＋の魔導師に勝った経験がある。

ただのまぐれ、そう言ってしまうのは簡単だが、そんな言葉は自分の首を絞めるだけだ。

「…やっぱりスカリエッティに何かされちゃったのかな、それとも、ヴィヴィオが人質に…とか」

「これから会って、話して見ればわかるわよ。いいスバル？将臣士長がどんな状況でもあんたがやる事は変わらない。犯人逮捕と将臣士長の保護、違う？」

願わくば犯人の中に同僚の名が入らぬ事を祈りながら、ティアナは保護という言葉を強調する。

「うん、そうだよね…頑張ろ！ティア！」

「ふぅ、あんたが単純で助かったわ、励ますのも楽よ」

「えぇ～！？ちょ！ティア酷いぃぃ！」

その時、作戦区域にさしかかった事を知らせるブザーが鳴り二人は動きを止める。

「いよいよですね…くどいようですが、各人無理はなさらぬよう…伏兵や分断される可能性もゼロではありません」

立場上フォワード陣とギンガの上官にあたるシュテルは、慣れていないのかそう言う性格なのか淡々と注意と指示を言い聞かせてながら全員の顔色を確認する。

「迷えば迷っただけ自分と仲間が危険に陥ります…考える事と、迷う事は違います。間違わないで下さい」

それだけ言ってシュテルは開いていくハッチに向かって歩き出す、ヘリから降りれば待っているのは戦い、だが降りなくても戦いは消

えない。

「出ます」

ハッチ解放と同時に身を空中へと踊らせる。

（撃墜してでも連れて帰ります、アナタが望んだ家族と言う居場所は、少なくとも今いる場所ではありません）

黒と紫のバリアジャケットに身を包み、相棒であるデバイスを構えながら自由落下する。

（見えます）

完全なアウトレンジ、デバイスを通してようやく人と判別出来る距離だった。

「ブラスト…」

呟きと同時に足元とルシフェリオンの前方に魔法陣が展開され、シュテルは魔法陣に立つ形で宙に止まる。

カートリッジの薬莢が二発排出され、ルシフェリオンの前に魔力が収束されていく。

通常のチャージより長いそれは、なのはの使うディバインバスター＋と同系、むしろ同じとも言える魔法。

「ファイアーー！」

拡散気味に打ち出した魔力による砲撃は、アウトレンジからという事も相まって、広域殲滅魔法と言っても納得してしまうような範囲を問答無用で制圧した。

「牽制は成功…後はギンガ達の追撃ですが」

牽制の意味合いが強かった為、今の砲撃は範囲こそ広かったが決定打にはならない。

故に打ち合わせよりも広範囲に拡散させ、廃墟を広範囲に渡って破壊する事で伏兵を探ったのだが…。

（少しやり過ぎました…廃棄都市でなければ首ではすみませんね）

肉眼で瓦礫の山を確認しつつシュテルは現場へと飛んだ。

◇

「と…ギリギリか。危なかったね」

「チクショーやりやがったな！」

「助かったッスよマサオミ」

「只でさえ少ない魔力が減ってしまいましたね」

将臣の展開したバリアが砕け、瓦礫を押しのけながらウェンディ、ノーヴェ、ディードの三人は辺りが瓦礫の山と化している事に驚く。

将臣がカートリッジを三発消費しバリアを作らなければ、やられないにしても確実にダメージは受けていただろう。

「来るよ！」

将臣の言葉と同時に上空から無数の誘導弾が降り注ぐ。

散開しそれを避けたナンバーズと将臣だが、同時に出現した二本のウイングロードが壁となり４人を分断する。

（ノーヴェ姉さん！右だ！）

「でやぁぁぁぁ！！」

「テメェか！」

ウイングロードに気を取られたノーヴェの着地を狙い、スバルが死角から打撃を繰り出すが、寸前で気付いたのかノーヴェはガンナックルで受け止める－

（ディード姉さん、合わせて！）

「チェーンバインド！」

「な！？」

ティアナのシルエットにより透明になり隙を伺っていたギンガだが、バインドにより拘束され姿を表す。

「ＩＳツインブレイズ」

動けないギンガに双剣を容赦なく叩き込み吹き飛ばすと、ディードとウェンディは将臣の前に陣取る。

（こっちの動きが読まれてる？）

スバルとギンガの援護の為フリードのブラストフレア、ティアナのクロスファイアで４人を牽制し一度距離を取る。

「マサオミもう良いっスよ、あんま使うと本当に早死にするっスから」

「うん…でも厄介な人が来る前に数を減らしたいから」

「別にお前の力がなくてもそんなに時間はかからねーよ」

将臣の持つレアスキル『予知』、今まで使い方も存在もしらず、投薬により発動し未来を垣間見た事があるだけだったが、スカリエッティの元でその存在が明かされ、将臣はその使い方をこの二週間で学んだ。

まだ全てを使いこなせる訳ではないが、数秒の先読みは造作もない事だった。欠点は先読みしている間は『現在』の状況が見れない事と、見た未来の分だけ体力を削られる事だ。

（ギンガさん、大丈夫ですか？）

（えぇ…防御は間に合ったから平気よ）

流れを掴むつもりが完全に飲まれてしまった、ティアナは策を巡

らせつつ後方からシュテルが合流する事を待つプランを組み立てる。

（３０秒後も動きなし…二分後は？ん…まずい砲撃が来るね、こっちから動くしか無さそうだよ）

予知で先を知り居場所を探るが、合流を最優先にしたティアナ達に動きはなく、予知した未来を変える為将臣達はティアナ達を探し動き出す。

「あんま離れ過ぎちゃダメっスよ」

「攻撃は私とノーヴェ姉様にお任せを」

「そう言う訳だ！しっかり護衛と援護しろよウェンディ！」

「そうだね…でもちょっと時間ないし手伝うよ。アルタス・クルタス・エイギアス…」

目を瞑り、詠唱を開始した将臣を見て瓦礫に身を隠すエリオは慌て念話を送る。

（ティアナさんまずいです！アレ広域攻撃魔法です！）

（く…プラン変更！このまま全員連携して戦うわよ！）

ティアナも別にシュテルがいなければ勝てないと思った訳ではない、時間的制限もない現状では５人で攻めるよりシュテルを加えた六人で攻めた方が効率的と判断したに過ぎない。

（かかった…思ったよりバラけてるね）

将臣は目を開けブラフだった詠唱を中断、攻めに転じ隠れていた場所からスバル達が動き出した未来から居場所を特定する事に成功する。

「簡単に変わるんだな…未来なんて」

風の音でかき消されてしまう程小さく呟き、将臣は念話で姉達に敵の居場所を伝えた。

第二十二話

「アークセイバー！」

「リボルバーシュート！」

互いにショートレンジからの牽制により、自分のリズムでクロスレンジへと持ち込もうとするが、事前にスバルの使用魔法を予知していた将臣は圧縮魔力刃で打ち出された風圧をかき消し、誘導能力を有する魔力刃と同時に時間差で攻め込む。

「スバル避けて！シールドに咬ませるのが狙いよ！」

アークセイバーとその軌道に沿い接近する将臣からの攻撃を防ぐ為、シールド展開を試みるスバルだが、直前に響いた姉の言葉に慌てて横飛びしウイングロードから飛び降りる。

アークセイバーを回避し危機は脱したものの、将臣はスバルが飛んだのと同時に動き出していた。

「まずは一人」

将臣はなウイングロードを作るよりも早く、バインドにより固定されてしまうスバル。

「バインド！？」

「スバル！」

まるで予知しているかのような動きと連繋を崩す為、あえてウェンディにティアナ、ノーヴェにギンガ、ディードにエリオとキャロがそれぞれ戦うと言う戦法をとったティアナ、一見未だに押されているように見えるがナンバーズや将臣の動きに先程までのキレはなくなっていた。

個人戦になった事で将臣に全員分の予知と、念話の時間がなくなったのが理由である、ティアナは能力を看破する前に対処法を偶然行っていた。

「よそ見してんじゃねー！」

「く、トライシールド」

ノーヴェの跳び蹴りを最小限のシールドで受け流しつつ、なんとかスバルの援護に向かおうとするが、ギンガの距離では将臣の魔法発動を止める術がない。

「アクセルシューター！」

カートリッジ二発ロードによる２０発の魔力弾の四方攻撃、バインドの破壊やシールドでの防御を考慮しあえて砲撃は選択しなかった。

『プロテクション』

着弾の瞬間、マッハキャリバーがスバルを包み込むようにバリアを展開するが、全てを防ぎきる事は出来ず粉々になり幾つかの魔力弾がスバルに直撃する。

「く…将臣、士長……操られてるだけ…ですよね？敵だったなんて事、ないですよね？」

未だにバインドは健在、両手両足の自由を奪われたままスバルは声を漏らす。

「いや、僕は正気だよ。僕の意志でやってるんだ」

「そんなの嘘だぁ！」

残りの魔力を一気に放出しバインドを破壊すると、すかさず戦闘機人モードに切り替える、この姿ならば魔力の心配はいらない。

「一撃必倒ぉぉぉ！ディバイィィィン！」

自分へと続くウイングロードを駆け上がってくるスバルを見ながら将臣は笑う。

「嬉しいな、そう…もっと本気を見せてくれ。ジェットザンバー！！」

スバルの行動は既に予知していた、だからこそ将臣は試してみたい事があった。

カートリッジ四発ロード、魔力変換資質の必要な魔法の為圧縮魔力刃にやや遅れて刀身が電気を帯びる。

「バスタァァァァァ！！」

「切り裂け！」

ジェットザンバーを振動破砕を発動させたリボルバーナックルで受け、そのまま刃に沿って将臣へと接近したスバルは左手を突き出す。

将臣も何とか押し切ろうとするが、互いの力のせめぎ合いに振動破砕で弱った刀身は耐えられ呆気なく魔力刃は粉々になる。そして…

圧縮されていた魔力が青い閃光になり将臣を包んだ。

◇

「…ここがスカリエッティのアジト」

「ヴィヴィオはここに」

「まだ相当数のガジェットがいると思われます、すみませんが私はロッサ護衛に回ります、お気をつけて…」

シスターシャッハ、ヴェロッサと合流したフェイトとなのははスカリエッティのアジトに通じる洞窟の前にいた。

「はい、この子がいれば道はわかりますから、アコース査察官とシスターシャッハはそちらの任務を遂行して下さい。行こうなのは」

案内役である『無限の猟犬』の一匹を一度撫で、深呼吸の後真剣な表情を浮かべるフェイト。

「うん、フェイトちゃん」

「何かわかり次第随時連絡するよ、あまりむちゃはしないようにね、はやてが悲しむ」

その言葉に二人は頷くものの、ヴェロッサは二人がこの場面で無茶をしない筈がないと薄々感づいてはいた。

案内の為猟犬が先行し、なのはとフェイトもそれに続いて移動を開始する。

「ＡＭＦが濃い…」

「うん、戦闘機人に有利な状況を作ってる…きっと私達のことも待ち構えてるに違いない、気をつけてなのは」

「うん」

施設内は幾重にも厳重なセキュリティーが張り巡らされており、そな並大抵の者なら簡単に命を落とす事であろうセキュリティーの数々をヴェロッサの『無限の猟犬』の探索、そして案内によってフェイトとなのはは無駄な体力を消費する事なく、最小限の妨害だけを突破し内部を進んで行く。

しかし、内部を進むにつれ数を増すガジェット、そして濃度の高いＡＭＦにより、猟犬の案内があるとは言え通常よりも多くの魔力を消費せざる終えない状況に陥っている、だがそれでも二人は迷う事なく突き進んでいく。

「ハーケンセイバー！」

「アクセルシューター！シュート！」

金色の刃と桃色の弾丸がガジェット?型を中心に、惜しみなく展開されるガジェット群を次々と破壊する。

スカリエッティがこのまま大人しく逮捕される筈がない。だが例えどんな罠が待ち構えていようとも二人は進む事を止めない。

この先に大切な子が、そして逮捕しなくてはならない犯罪者がいる。

全てを無事終わらせ、そしてまた皆と時を過ごす為に、心の中で渦巻く強い想いを現実にする為に。

◇

「パイロシューター！」

空中に展開された無数の魔力スフィアが打ち出す砲撃は、さながら豪雨のようだった。

将臣を擁するナンバーズは予知による連携が崩された事により優位性を失い、そしてシュテルがアウトレンジからロングレンジの射程圏に入り、本格的に戦闘に参加し始めた事で一気に窮地に立たされた。

予知があれば巻き返す事は不可能ではないが、肝心の将臣はナン

バーズで言う所のタイプゼロ、スバルとの戦闘中の為予知するタイミングがない。

「……相変わらずむちゃくちゃな火力だなぁ」

ディバインバスターの直撃を受け、瓦礫の山へと突っ込んだ将臣だったが、幸いそれでシュテルの砲撃範囲から出る事が出来た。

瓦礫から這い出た自分を見つけたのか一直線に現れるウイングロード、そしてその上を走るスバルに視線を向ける。

「魔力…ごっそり削られたな」

騎士甲冑の上着は既になく、残ったインナーも焦げ跡や破損が目立つ、防ぎきれなかった衝撃はそのままダメージとなり、瓦礫に突っ込んだ事も相まって打撲と切り傷は２０を超えるだろう。

ディバインバスターを自らの技に昇華したスバル、一方将臣はただそれらを使っているに過ぎない、言わば借り物なのだ。

予知した未来で競り負ける事は知っていた、だが予知する前から負ける事はわかっていた。

（未来を知っていても、行動を変えなければ未来は変わらない…最後の憂いは絶てた…かな？）

身勝手極まりない話だが、将臣は悔いの無い生き方は無理でも、少しだけワガママを言って見たかった。

１９歳、なのはと出会ってから実に十年あまりの日々は言わば自分の迷い、そして恐怖との戦いだった。

生まれや、自分がどう仕組まれていたかなど、色々と辛い事実を知った今でも別に誰かを恨んだり、自暴自棄になる気はなかった。

むしろ全てを知り、自分がすべき事、そして自分の結末を決められた事に救われたような気さえする。

スカリエッティから真実を聞き、記憶と精神を安定させられた事は、自分との勝負に負けた事と同義かもしれない。

しかし彼の人生に置いて何よりも優先されて来た事は、勝つ事ではなく、目的を果たす事に他ならなかった。

遂に、そして始めから持ち、自分を苦しめた元凶でもある力を知り、将臣の目的はほぼ達せられた。

同時に将臣は自分の未来が完全に閉ざされた事を静かに受け止めた、いや…ワガママを言いたくなった事が最後の反発だったのかもしれない。

人に尽くして生きて来た人生、葛藤で潰れた青春、愛情を求められない日々。例え嫌われていようと、軽蔑されていようとも、大切な友人、仲間の為に生きた日々は自分らしく生きたものだった。

その中で味わって見たかったものが、家族の愛情であり、人を愛する事だった。

ナンバーズやスカリエッティを家族と重ねるという、自分の為のワガママ。

そして不安だった未来の変化も確かめられた。悔いはある、だが嘆く事はない、後悔するならば全てを否定しなくてはならない。予知を持って生まれた時点でどうすることも出来ない悩みなのだから。

（未来は簡単に変わる、だから変えないようにするのはむずかしい…変わらない、変えられないのは過去だけだ）

立ち尽くす将臣にスバルが迫る、魔力ダメージによるノックアウトを狙っているのだろう、左手には圧縮された魔力が輝いている。

将臣はグラムをイージスに納め、ゆっくりと左手を突き出しながらカートリッジをロードする。

一発、また一発と薬莢が排出されていき、同時に固く握った右拳を腰深く構えゆっくりと後ろに引いていく。

「手加減はしないよ…と言うより制御は効かないんだ」

完成度は高くない、唯一発動するかどうか確率は半分以下の魔法、確実に使うならば準備に五分以上の時間がかかる未完成魔法。

予知はしない、全ての結末は知っている、だがこの勝負の勝敗は知らない。

「集え明星、全てを焼き尽くす焔となれ！」

魔力を誘導し収束させる左手が熱い、完成した姿を見せたけて、

遂に完成させられなかったこの魔法が自分に講義しているかのようだった。

だが同時に実践では絶対に上手く発動してくれる気がした、この魔法を作った人物と同じく、苦言を遠慮なく言ってくれる、そして律儀な女性と同じように、この魔法も律儀に自分に応えてくれる気がした。

練習で出来ない事は本番では出来ない。今でもそう思っている、故に今信じるのは積み重ねが起こす奇跡、都合の良い結果を描く只の願望、自らの力がたった今進化するという愚かな願い。

左手に誘導され収束された魔力は、体の前方に魔力の塊として球体を形作り、赤く、力強く輝いている。

「ルシフェリオン・ブレイカァァァァ！！」

集めた魔力を打ち出す為右腕を突き出す、同時に太陽に腕を突き立てたような激しい痛み、衝撃と共に広がり視界を埋め尽くしていく光の中で、確かに星光が突き抜けて行くのを感じた。

第二十三話

作戦開始から丁度３０分後に事態は急変した。

ガジェットによる襲撃を想定し、シグナム、ヴィータ、そしてはやてとリインがその迎撃を担当、しかし襲撃自体は想定通りあったものの。

その数ははやて達の予想を遥かに上回っていた、以前あったダミーでのごまかしではなく、全て実機で過去最高数を軽く上回る数が現れたのだ。

そこからは想定外の連続だった。

地上本部襲撃時同様に、ガジェット対処に動き出した地上本部へと向かうオーバーＳランクの騎士、ゼスト・グランガイツを補足したシグナムはそちらの迎撃に、スカリエッティ逮捕の為アジトに潜入したなのはとフェイト、二人からようやく入った通信はスカリエッティ逮捕の朗報ではなく、スカリエッティにまんまと欺かれたと言う苦い報告だった。

アジト内にスカリエッティやナンバーズはおらず、高濃度のＡＭＦ下でのガジェットとの戦闘はなのは達を消耗させる事を成功させた。

そしてあろう事かスカリエッティは戦闘機人の素体をあえて残し、なのはとフェイトが最深部に到達したと同時に施設の自爆装置の起動と隔壁のロック、ＡＭＦを全開にしたのだ。

モニター越しにスカリエッティはフェイトを揺さぶり、そしてなのはには拘束されたヴィヴィオを見せつけた。

その間にも迫る自爆のタイムリミットと無数のガジェット、なのははやむなくブラスターモードを使用、フェイトは自爆装置解除に徹した。

そして大きな地響きと共に浮上するスカリエッティの切り札、その名も『聖王のゆりかご』。

唯一ナンバーズを逮捕し、残るは将臣の逮捕のみだったシュテル達も、スバルが魔力ダメージによりブラックアウト、庇ったギンガも魔力切れにより戦線を離脱、ティアナ、エリオ、キャロはそれぞれ出撃したガジェットの足止めの為に急増された108部隊の防衛ライン支援、そして浮上したゆりかご対処に出撃した部隊の指揮を一時的に任されたシュテルはゆりかごへと急行。

突然の自体に誰もが焦り、管理局全体が慌ただしく動き回る中、管理局員でありながら全てを知っていた人物はガジェット出現に紛れ姿を消した。

◇

「痛ぅ…ちょっと無理し過ぎた」

騎士甲冑を解除し、目を瞑りながら痛みの残る右腕を左手で握る。打撲や切り傷など意外は目立った外傷のない右腕だが、未完成のルシフェリオン・ブレイカー発射のダメージが脳にセーブされてしまったかのように焼き付いていた。

「なのはちゃんの脱出はまだまだ先、シグナムさんはゼストさんを斬る…ルーテシアちゃんは母親ごと施設を爆破しようとした事を知って戸惑ってるし、スバルちゃんとギンガちゃんの復帰もまだ先、はやてちゃんとシュテルちゃんはゆりかごへ、ヴィータちゃんはフォワードと１０８部隊でガジェット対処…よし…結末は変わってない」

目を開き、カートリッジのマガジンを入れ替えながら空を仰ぐ。

幼少の頃、最初に予知し前世の記憶と思っていた展開とはかなり違ってしまったが、やはりなのは達は自分よりもずっと強かったと改めて思った。どんな逆境でも彼女達は全力を尽くして平和な未来を作っていく。

未来に向かって生きている輝きを感じる。

「ゆりかごの中には義父さんと、残りの義姉さん達がいる…ＡＭＦも強い……それに、ヴィヴィオちゃんの強さは初代リインフォースさん並みだ…」

自分では勝てない、だがなのは達ならば勝てる、その未来はもう見えている。

「結局僕は何がしたかったんだろう？」

このまま何もしなくても事件は終わる、むしろなにもしなければ未来は変わらずに結末を迎える事が出来る。

予知を得た事でなのは達を助ける事は出来ないと知った、彼女達

は自力で乗り越えていけるからだ。

それならばと少しワガママに生きてみた、未来の変化も調べた。

結果的に未来は簡単に変わるが、それは自分が予知した未来と異なる事をした場合のみで、なにもしなければ未来は変わらない。

ただ黙って見ているのが最良だと知った時、全て終わったのだ。

ルシフェリオン・ブレイカーも、自分のある願望と弱音を吐き出したくて使ったにすぎない。失敗しても成功しても満足だったのだ。

皆が現在（今）を生き、未来（先）を目指しているのに。

何故自分は常に過去を生きているのか。

予知とは残酷な力だ、未来を見ると言う事は未来がなくなると言う事だ。

将臣から言わせれば過去を振り返っているのとなんら変わらない、夢も希望もない、あるのはただ結末だけ。

知らないからこそ、わからないからこそ未来は怖く、そして希望と夢が持てる。予知を使わず生きる事は出来る、だが将臣は気付いている。

絶対に使うだろうと、人はある力を使いたくなる、そして自分は理由があれば絶対に予知を使う、人から言わせれば完全な自業自得だ。

「いっそ寿命が尽きるまで予知を使って、寿命が足りなくて予知出来なかった未来に憧れながら死ぬっていうのもいいかもね。…冗談だよイージス、心配しないで」

そう言った将臣は特に理由もなく立ち上がっていた。

魔力は時間が経てば回復するがそんなに時間はない、カートリッジは後６マガジン分、６０発ある。自分で使うだけなら十分過ぎる程ある。

右腕は生き方と罪への罰のように痛む、それでも動いてくれる。

後は気持ち、今でも助けになりたいという気持ちは死んではいない。だが理性は知っている、何もしない事と戦う事に結末の変わりはないと。

そして予知が教える、移り変わる未来と経緯と、そして結末を見た時間の分だけ命を吸って教える。

「ずっと知っている結末にする為に生きて来た、でも…結末が知りたかった訳じゃないんだ。僕の未来を、返せ……返してくれ」

◇

「スカリエッティ…絶対に逮捕しないと」

施設の自爆解除に奮闘するフェイトだが、同時に身を守る為元々苦手な部類に入るバリアを維持し続けなくてはならず、精神力と魔

力はどんどんすり減っていく。

ガジェット?型の相手をするなのはも消耗が著しい、ブラスターモードはまだ1とはいえガジェット相手に使わされるとは思っていなかった。

次々に現れるガジェットはなのはではなく、システムやフェイトを優先的に狙って攻撃する為出て来たと同時に撃破、撃たせてしまった攻撃は必ず防御しなくてはならない。

「これは…キリがないね」

自爆を解除すればフェイトも攻勢に出られる、だが動けない状況に変わりはない、戦闘機人の素体として捕らわれている人々がいる、ガジェットを全て倒すかシステムにハッキングして活動を止めなければ状況は好転しないのだ。

「なのは、ごめん後少し持ちこたえて！」

「私は、大丈夫だよフェイトちゃん。フェイトちゃんはそっちに集中して！」

床や天井から湧き出すガジェットにアクセルシューターを次々と撃ち出し破壊していく、どこに素体の人々がいるか分からない状況では下手に壁や床を破壊してガジェットの増援を防ぐ事も出来ない。

サーチャーは相当数巻いたが施設内を検索するには時間がかかり過ぎる、特定の人物を探すのではなく、絶対に人がいないと断言出来るまで全て探し尽くさねばならないからだ。

恐らくシスターシャッハとヴェロッサ、制圧部隊も今頃ガジェットに襲われ足止めされている事だろう。それにここまで濃いＡＭＦ下では隔壁を破る威力の魔法を使うのは一般局員では厳しいだろう。

「ヴィヴィオ…待ってて、絶対に…助けに行くから」

乱れ始めたの息苦しさを意志の力で頭の中から追い出す、絶対に自分達は大丈夫だと信じて。

◇

「ふむ…ノーヴェ達が捕まったか」

「将臣は捕まってはいませんが、行方はわかりません」

ゆりかご、その最深部でスカリエッティとウーノは戦況をモニター越しに観察していた。

此処までノーヴェ達が捕まるというアクシデントを除けば、ほぼ全てが順調に進行しているといえた。

「彼はなかなかに複雑な思考の持ち主だ、それに私達や管理局からも姿を眩ませている所を見ると、どうすべきか迷っているんだろう」

『予知』そのスキルがもたらす恩赦と、それに伴うアドバンテージは誰もが羨むものだろう。

だが無限の欲望とさえ言われるスカリエッティは、そのスキルを欲した事は一度もない。

犯罪者と認定され、違法な研究をする彼ではあるが科学者には違いない。科学者は歴史学者は数学者とは違い、『答え』を探している訳ではないのだ。

故に全ての結果と結末を知ってしまう予知というスキルに利用価値や原理などの興味はあれど、自らがそれを持ち得たいとは思わないのだ。

だからこそスカリエッティは将臣に興味があり、同情と自分の技術で生まれた作品の一つとしての愛情に似た感情も持っている。

自分が持てば絶望するであろうスキルを持つ将臣、そのありのまま行動を観察する為に、スカリエッティは邪魔だった刷り込みを消したのだ。

（彼の葛藤、その行き着く先には興味をそそられる…見せてくれたまえ、君の決断を）

第二十四話

「う…ここは」

目覚めたスバルが最初に見たのは青空だった、耳を澄ませると少し遠くで戦闘音が響いている。

（仮設の…救護所？そっか、私将臣士長の攻撃で）

魔力ダメージにより、魔力ゼロのブラックアウト状態に陥っていたと悟ったスバルは戦闘機人モードへとシフトする。

もちろん戦う為だ、魔力の回復を待っている余裕はない。

「スバル、気が付いたのね？良かった」

「ギン姉？どうしてギン姉がここに？」

振り向いた先、自分が寝ていたのと同じ仮設ベッドに腰掛ける姉、見た所目立った外傷はなく、なぜここにいるのか疑問だった。

「私も魔力ダメージでちゃっと動けなくなっちゃって、任務も変更されたからスバルが起きるのを待ってたの」

将臣のルシフェリオン・ブレイカーからスバルを庇おうとし、その威力にシールドごと飲み込まれ、意識は失わなかったもののギンガも魔力ゼロの状態になりここに運び込まれていたのだ。

「任務の…変更？」

「ええ、私達はヴァイス陸曹のヘリで『ゆりかご』に向かう事になったの」

「ヴァイス陸曹意識が戻ったんだ！良かったぁ。……あ、でもゆりかごっていうのは一体」

『ゆりかご』という聞き慣れないキーワードにスバルは首を傾げるが、ベッドから立ち上がったギンガはヘリの中で説明すると告げ、スバルに右手を差し出す。

「まだやれる？スバル」

「もちろん！」

姉の手を握り返し、左をついてベッドから勢い良く降りた。

◇

「ここに来たのは帰還か？それとも…裏切りか？」

「トーレ義姉さん…ごめん、通して欲しい」

「私が通すかどうか、先を見ているお前ならわかっているだろう」

既にに満身創痍、それでも将臣はゆりかごへとたどり着いていた。

侵入されるまでスカリエッティ側が気付けなかったのは、恐らく

何十、何百通りのルートと手段を予知で検討し姿を眩ませてきたからだろう。

だが変えられない未来もある、ゆりかご内部に入った時点で察知される事はどの未来でも確定していたため、将臣は敢えてナンバーズがいない遠回りの場所ではなく、聖王の間まで一番近いルートを選択した。

それが最も困難であり、敗北の結末が見えている未来のルートだった。

「みんなを裏切る事になるけど…自分のやりたいようにやるって決めたから」

イージスがカートリッジを一発ロードし、その瞬間ボロボロだった騎士甲冑が新品同様に再生する。

「正気か？管理局にも追われ、私達とも敵対する事になるんだぞ？」

「狂ってるのかもね…でも僕の意志だ」

将臣がグラムをイージスから抜いた瞬間、トーレもインパルスブレードを展開し、ライドインパルス発動を発動する。

互いに模擬戦で手の内はほぼ知り尽くしている、トーレが警戒すべきは将臣の予知によるカウンターと設置型バインド。

移動場所や攻撃が全て筒抜けになる為、将臣のカウンターと設置型バインドの進行ルート前置きは驚異だ。

逆に将臣が警戒すべき事はスピード、予知中は現在の光景を見れない、予知する未来を断片的にすればそれは一瞬で済むが、攻撃や移動ルートにカウンターやバインドを合わせようと思えばその場面を正確に見る必要がある。

少なくとも1～2秒は無防備になる、トーレのスピードに対しその隙は致命的だった。

「イージス！」

一瞬で視界から消えたトーレの攻撃を防ぐ為、全身を包み込むバリアを展開し身を守る。

その判断は正しく、展開した瞬間斬りつけられた背後のバリアに亀裂が入った。

（く…カートリッジをロードしないと強度も時間も保たない…）

立て続けに入れられた二撃めによりバリアは粉々に砕け散る。だがバリア破壊前にカートリッジを一発ロードした将臣はソニックムーブを発動し高速移動を開始する。

「考え直すなら今だぞ？私も弟に手をかけたくはない」

カートリッジを断続的にロードしソニックムーブの持続時間を伸ばし、未だに速度で上回るトーレの攻撃をなんとかイージスとグラムで凌いでいく。

速度がある程度同じ領域に達した事で、トーレの姿を先程よりハッキリと視認出来るが高速戦では分が悪かった。

「義姉さん…ごめん！」

一瞬心を揺さぶられる将臣だが、グラムを握り締め自分の考えを押し通す。

自分の決断の遅さが、自分の無力さが、自分の優柔不断さが今を作ってしまった。

（だからこそ…迷わない、迷えない）

将臣にカートリッジの多段ロードと、何よりも予知の時間を与えない為にトーレは直線的な機動で将臣に接近する。

間合いは剣である将臣の方がやや長いが、懐に入られた場合には分が悪く、手数や取り回しのしやすさもインパルスブレードの方が優れている。

「紫電一閃！」

「そのパターンはもう見た！」

カートリッジロードと同時に炎を纏わせたグラムを上段に構え、一直線に接近したトーレに振り下ろす。

これは将臣が得意とする『裏を掻く戦法』の初歩であり、ダミーの炎を纏わせたグラムの大振りを避けさせ、左手に発動させた『紫電一閃』で敵の防御を意識の向いていないタイミングで抜き倒すという不意打ちの一種である。

だが既にトーレは模擬戦で他の妹に使ったそのパターンをデータの共有により学習していた為、グラムを左手が届かない右に避け、通り抜けざまに蹴りを腹部に叩き込み将臣を床へと叩きつける。

「ぐ……パイロシューター」

床に激突した将臣は痛みに耐えながら飛び起き、追撃を加えようとするトーレを八つの魔法弾で牽制する。

（やはり魔法のレパートリーは多いが、即戦力になる魔法は時間がかかる故に使えないようだな。この場面で一度見られている手を使うとはな）

魔法弾を難なくかわしたトーレは更に速度を上げる、将臣がトーレを一撃で倒す為にはカートリッジロードが必要不可欠、そして大技になる程発動時間とカートリッジ数は増えていく。

ベルカ式の紫電一閃や、グラムを使ったミッド式斬撃魔法ジェットザンバーは脅威であるが、それでも紫電一閃は間合い、ジェットザンバーは砲撃魔法程ではないが発動時間に数秒を要する。

そして何よりそれが来る、それだけしか来ないと前もって分かればスピードで劣る将臣の太刀筋はトーレを捉える事は出来ない。

「お前の負けだ、将臣」

「いいや、勝つのは僕だよ…義姉さん。チェーンバインド！」

チェーンバインド、将臣が唯一『使える』魔法としてなのは達の前でも使っていた得意魔法。だが今将臣が作り出したのはただの鎖

ではなく、鎖で作られたネットだった。

視界を覆う三つのネットを見てトーレは気が萎えるのを感じた、こんな場当たり的な、しかも魔力が足らず三つのネットでようやく通路の幅になっている中途半端な魔法。せめて一つのネットで通路全てを覆い尽くすサイズがあれば避ける事は無理だったかもしれない。

その時はネットを斬るか、距離を取るしか手段はないが、眼前のネットにはネットと床、ネットとネットの間に隙間、抜け道が出来てしまっていた。

「そんなもので私を止めるつもりか？」

ネットは一つ５ｍ、三つ合わせれば広い通路をほとんどカバーしていたのだが、トーレはネットとネットが触れないように僅かに離れている隙間をくぐり抜けあっさりとそれを避ける。

予知の時間を稼ぐ為にヤケになったのかと、やや気分を害されたトーレは一直線に将臣に向かおうとした、その時。

「避けられる事は分かっていたんだ！ブレイズキャノン！」

「なっ！？」

隙間をくぐり抜けて来る事を想定していた将臣は、速射出来るブレイズキャノンをチャージを更に短くし威力は二の次にしたショートバージョンでトーレに撃った。

砲撃はトーレを倒す威力はもちろんなかったが、衝撃で吹き飛ばし、『避けた後方のネット』に突っ込ませるには十分だった。

そして将臣はまだ予知を使っていない、培ってきた経験と努力、純粋な実力によってトーレを圧倒したのだ。

「僕の勝ちだよ…義姉さん」

「く…予知させまいと安易に攻め過ぎた……お前本来の強さを考えていなかった、私の負けだ」

カートリッジを二発ロードし、更にバインドで拘束しようと将臣がゆっくりと左手を向ける。

『ＩＳ…ヘヴィバレル』

第六感が働いたと言うべきか、将臣が背筋に冷たいものを感じ後ろを振り返る。その瞬間、天井を突き破り降り注いだエネルギー弾に将臣は飲み込まれた。

予知していない未来は将臣も知る事は出来ない。もし、トーレを倒す為に予知を使っていたならばわかったであろう奇襲も、実力で倒してしまったからこそ、予知による察知は出来なかった。

◇

スカリエッティのアジト、その最深部でガジェットを破壊していたなのはだが、突然ガジェットが動きを止めた事で砲撃を中止し後ろを振り返った。

「止まった…フェイトちゃん？」

「ううん、私じゃないよ、私は今さっき自爆装置を解除してガジェットを止めようとしてた所だから…」

ＡＭＦが働いている事から施設は正常に機能している、だからこそガジェットが動きを止めた理由が分からなかった。

「なのは！後ろ！」

「っ！」

レイジングハートを構え後ろを振り返る、その瞬間後方の隔壁がバラバラに切り刻まれ、隔壁の向こうからマフラーをした昆虫のような使い魔が現れた。

「あれは…たしかエリオ達が戦った使い魔、なのは下がって、私がやる！」

フェイトがザンバーを構え浮き上がる。

「待って、ガリューも私も、戦う気はない……」

不意に言葉と無数の羽音が響く。その言葉を発したのは、ガリューと呼ばれた使い魔の後ろから現れた小さな少女だった。

「君はたしか…」

フェイト同様に警戒したなのはが呟く、少女の方にも見覚えがあったからだ。

「…ガジェットはこの子達が止めてくれてる、だから…今の内にシステムを操作して完全に止めて…」

この子達、というのが少女の周りを飛ぶ小型の使い魔だと理解した二人はガジェットが止まった理由も同時に理解した。

以前アグスタでガジェットの動きが有人操作に切り替わりよくなった、今は逆に有人操作で動きを止めているのだ。

全てのガジェットではないにしろ、この付近のガジェットを止めるだけでもかなりの数が存在する、フェイトは少女の言葉通りすぐにハッキング作業へと戻る。

「君はスカリエッティの仲間じゃないの？」

「ドクターとは友達、でも…ここには私のお母さんがいるから、ここが壊れるのも…人が死ぬのも嫌」

「そっか、そうだよね」

敵対する理由は人それぞれある、だが互いに手を取り合う理由も同じように幾つも存在し、案外それは簡単なものだ。

（将臣君が敵になったのにも理由がある…でも、やっぱり分かり合えないなんて事ないんだよね）

第二十五話

「命中確認中…それにしても、良かったの？撃っちゃって」

「あらディエチちゃん、それ、撃った後に聞くの？」

最大出力での砲撃、ただし壁抜きだった為、威力的にはＡＡクラスの威力しか出ていないが、非殺傷設定になっていない砲撃は十分人を殺める事が出来る。

感覚的に九分九厘当たったと確信しているディエチだが、着弾地点は煙が充満し、艦内である為なかなか空気が循環せずなかなか視界が確保出来ない。

「そうなんだけどさ…もし死んでたらどうするのかなって」

「ふふ、何言ってるのディエチちゃん？そんなの決まってるじゃない、死んでればよし、生きてたら死ぬまで・撃・つ・の・よ」

人差し指を立て、楽しそうにディエチに告げるクアットロ。

将臣が敵対すると決め、ここに攻め込んできた時点でスカリエッティの将臣に対する『将臣の決断』という興味はなくなり、そして聖王に今まで将臣が集めてきた魔法の知識のコピーが済んだ事で、将臣の必要性はなくなった。

「……別に、殺さなくても良いんじゃないかな」

「あら、ディエチちゃんが撃たなかったらトーレ姉様が殺されてた

かもしれないのよ？」

複雑な心境を『しかたない』と割り切り、スコープを覗き爆煙が晴れるのを待つ。

「それに一応アレは低く見積もってもＡＡクラスの実力はある訳だし、ディエチちゃんも箔がつくってものじゃない？」

「…興味ないよ」

少しずつ薄れていく爆煙に目を凝らし、一射目よりも複雑な心境でトリガーに指をかけ直す。

（…油断した、今の砲撃はディエチ義姉さんか。く…ダメージが、でも予知する時間は十分あった）

虫の知らせ、第六感と言うべきか、真上からの砲撃をギリギリイージスで受けた為直撃だけは避ける事が出来た。

予知を使いこなせるようになってから、そのスキルが原因なのか時折やけに感が冴えたり危険を察知したりする事が多く、今回もそれに助けられたと言っても過言ではない。

故に将臣はいつか予知が日常的に、そして少しでも身に危険や疑問に思った事があれば発動するようになるのではないか、もしくは無意識に短時間、一秒に満たないほんの僅かな時間の予知を繰り返している為に勘が冴えていると感じているのかも知れないと危惧している。

爆煙に紛れ、床を這ってその場からの移動を試みる将臣。

イージスは中破、自身もやせ我慢するには大き過ぎるダメージを受けてしまった。今出来る事はその場から少しでも離れ時間を稼ぐ事のみ。

（なのはちゃんにシュテルちゃん、それにフェイトちゃんとヴィータちゃん…五分後にはやてちゃんと…ぐ…今は何とか、４人に目が向かないように…時間を稼がないと、時間を…一秒でも）

ズルズルと体を引きずった後には血の道が出来上がり、爆煙はまだ完全には晴れないもののその音と痕をクアットロとディエチが見逃す筈もなく、少しずつ動き離れていく将臣にディエチは砲身を向ける。

「…本当に撃つよ？」

爆煙ではっきりとは視認出来ないが外す可能性はゼロに近い、将臣が何かしない限りほぼ確実に当たる。

「ディエチちゃんが撃ちたくないなら、私が変わってあげてもいいわよ」

「…いい」

クアットロに任せた場合、おそらく楽には死ねない。ガジェットで痛めつけられ、苦しみ足掻く様を楽しむに違いない。

（なら…いっそ一撃で、楽にしてあげた方がいい）

「ＩＳ、ヘヴィバレル」

撃ち抜いた壁、その範囲内で狙える位置に将臣は今も這いずっている、既に立ち上がるどこか這う事も満足に出来ないようだった。

「……く！」

引き金を引く瞬間、生まれて初めて目をつぶった。指先にはいつもの繊細さはなく、普段よりも重く感じる引き金を乱暴に引いた。

当然銃口はブレたが、それでもエネルギー弾は将臣に向かっていき、再び大きな爆発と煙を巻き上げた。

遮蔽物のない今回の砲撃は、Ｓクラス相当の威力を発揮していた。

「ふふ、じゃぁディエチちゃん？新しい侵入者がいるみたいだから、そっちの迎撃に向かいましょう」

「…あぁ」

◇

「はぁ…はぁ…この先に、スカリエッティと…ヴィヴィオが」

アジト同様に高密度のＡＭＦ下の中、フェイトは時折フラつきながらも通路を進んでいく。

「ハラオウン執務官と高町一尉は少し下がって下さい」

見かねたシュテルがなのはとフェイトの前に出ながら呟く。

「シュテルちゃん…でも」
「おめーらはあたしらより魔力使ってんだ、道中はあたしらに任せればいいんだよ」
後方を警戒しながらヴィータがシュテルに続く、もちろんシュテルとヴィータも消耗しているがなのは達程ではない。
「おいシュテル、あたしとポジション変われ」
「はい、その方が効率が良いと思っていました」
二人に反論の隙を与えずシュテルが後方警戒、ヴィータが先頭にチェンジする。

「ありがとうシュテルちゃん、ヴィータちゃん」
「べ、別にお礼を言われるような事じゃねー！」
「効率を考えた結果です、気にしないで下さい」
なのはが申し訳無さそうに呟くと、ヴィータは照れ隠しなのか声が少し大きくなり、シュテルは相変わらず淡々と返事を返した。
『なのはさん！聞こえますか！？』
「シャーリー？」

『良かった、ユーノ司書長からの連絡でゆりかご内部のデータが見つかったのでそちらに転送します！』

なのはは皆に見えるよう、モニターを拡大し内部図を表示する。

「え…これ」

「機関部と聖王の間の場所…真逆じゃねぇか！」

「それに、多分スカリエッティがいるのは最深部…妨害もある筈だし、何より逃がす訳には」

「優先順位はゆりかごの停止です…逃亡対象は外の八神二佐に任せましょう。ギンガとスバルもこちらに向かっています」

三手に別れる事も検討したが、やはり危険度の高いゆりかごの停止を優先し、機関部と聖王の間に向かう事を決めた。

「振り分けは…どうする？やっぱあたしとフェイトが前衛だから、なのはとシュテルが組みやすい方と組んだ方がいいよな？」

「いえ…私と高町一尉が組みます。ヴィータ三尉とフェイト執務官が組んで下さい」

ヴィータが理由を聞こうとする前に、シュテルはスラスラと振り分け理由を口にしていく。

まずフェイトが消耗しており、前衛をやらせるよりもやや下がり気味に立ち回り、ヴィータの援護、本来のガードウィングとして戦

ってもらった方が効率が良い事。

消耗しているなのはとフェイトを組ませるのは論外。

フェイトと自分（シュテル）ではフェイトが前に出なくてはならず、速度の違いから防御に関する援護は望めない。

なのはと自分（シュテル）が組んだ場合、ポジションや戦い方は同じだがそれ故にカバーしやすい。

そして最後にシュテルが言った一言でヴィータを含めた全員が納得する。

「私は融合騎です、恐らく高町一尉との相性は悪くありません」

「えぇ！？シュテルちゃんって融合騎だったの！？」

「言っていませんでしたか？体の構造はヴィータ三尉と同じようなものです」

シュテルの突然のカミングアウトに驚く一同だが、知らなかった事への驚きと、守護騎士システムやリインフォース？でそういう存在を知っており差別心などもなかった為すんなりと納得した。

◇

「聖王の様子はどうだい？」

「クアットロの暗示とコントロールが予想よりも強く作用しているようです、問題ありません」

「ふむ…結構。残る障害は内部に侵入した管理局の魔導師だけか」

海の戦力はゆりかごが真の力を発揮出来るポイントの到着に間に合わない。

逆転の策は機関部の破壊による速度の低下と聖王の撃破。

だがそれを阻止するには十分な戦力と策をスカリエッティは用意したと自負している。

「それと、トーレがディエチの砲撃の余波ダメージを受け戦線を離脱するとの連絡がありました、現在はチンク同様ポットの中で治療中です」

ウーノの報告を聞きながらスカリエッティはモニターに映し出したなのは達の戦いから目を離さない。

「ん？そういえば彼はどうなったんだい？」

「トーレが死亡を確認しました、遺体は素体、もしくは標本として扱う為ポットの中に」

「破損状況は？」

「四肢や臓器の損失は在りません、損傷はレベルＣです」

映し出された将臣はポットの液体の中、まるで眠るように目を閉じ漂っていた。

死因は失血死、その為大きな破損や損傷もない。

「ほう…バラバラになったものと思っていたが…残念ながら彼は人造魔導師には適合していない。サンプルとして保存する方向で頼むよ」

「わかりました」

ウーノは普段通りの声色と仕草で答える。ほんの一瞬、まばたき一回分に満たない時間、義弟だった男の表情に目を止め、モニターをまたなのは達の監視映像に戻す。

その仕草が哀れんでのものだったのか、バカな男だと呆れたのかは、ウーノ以外知る由もなく、スカリエッティは当然その仕草にも気が付く事はなかった。

◇

「ブラスト・ファイヤー！」

ガジェット出現と同時に通路を埋め尽くした炎の閃光は、それを阻むモノ全てを容赦なく焼き尽くしていった。

「気休めにしかなりませんが、これでこの通路のガジェットは一掃出来た筈です」

「ありがとう、シュテルちゃん」

ＡＭＦ状況下であるゆりかご内部では、純粋な魔力砲であるディバインバスターより、魔力変換資質『炎熱』の付与されたブラストファイヤーの方が火力は上であり、なのはの消耗もあいまってガジェット対処と制圧による安全化はシュテルが請け負っていた。

「いえ」

「それで…切り札、私とのユニゾンなんだけど」

「正規のロードでは在りませんが…魔力変換資質意外に問題点はないと思います」

シュテルがなのはと組むにあたって『切り札』、『奥の手』とも言い表したユニゾン。

元々なのはのコピーであり、そこから個性を発展させていったシュテルだが、計算では将臣とのユニゾンに比べ適合率、誤差共に高レベルでのユニゾンが可能になる筈なのである。

将臣とのユニゾンの場合、魔力変換資質である炎熱の付与だけでなく、魔力の収束、そして何よりミッド式に分類されるシュテルが慣れないベルカ式の動きに合わせなくてはならず、将臣の火力と防御力は飛躍的に上昇するが、鍛えたとは言え元々身体自体が虚弱であり、魔力の絶対値が低い将臣は負担と消費魔力の関係上戦闘継続時間が激減するというリスクが生まれてしまう。

本来ならば負担や魔力はシュテルが多く請け負うべきなのだが、

適合率の低さ故に上手く行かないのが現状だ。

「ですからベースとなるアナタは身体にダメージを残さぬよう、ここは私に任せて下さい」

ルシフェリオンを構え、なにかとてつもなく嫌な胸騒ぎを感じながらシュテルは焼き焦げた通路の先を見据えた。

なにか、間に合わなかったと言う感情が胸に湧き上がってきたが、そんな筈はない、『ゆりかごの停止』は絶対に間に合わせると自分に言い聞かせ、なのはとともに通路を進んだ。

第二十六話

「ヴァイス陸曹、なんでバイクを持ってきたんですか？」

「ん？あぁ、中は強力なＡＭＦが展開されてるかもしれねぇからな、いざという時の移動手段だよ。ま、ギンガからの通信で頼まれたんだけどよ」

ヘリの操縦をアルトに任せ、解放されたハッチからガジェット？型を狙撃しヘリの安全を確保するヴァイス。

ヘリの中にはギンガ、スバル、ティアナ、そして二台のバイクが固定されている。

「ギン姉が？」

「うん、ちょっとね」

赤いバイクはミッド製のヴァイスのバイク、もう一台のシルバーと黒のバイクは内部構造以外全て地球製の将臣のバイクである。

『ギンガちゃん、バイクを持ってゆりかごに行って。大丈夫、邪魔にはならないよ』

将臣やナンバーズとの戦闘終了直前、将臣から一方的に言われた念話での言葉、自分でも驚く程すんなりと実行に移してしまっていた。

「将臣士長のバイクは何度か運転した事があるから私が乗るわね、

ティアナはスバルを乗せてヴァイス陸曹のバイクをお願い」

「あ、はい！」

「良かったぁ、私に運転しろって言われたらどうしょうかと思ったよ～」

「「それはないから」」と、姉とバディーに見事にハモられながら突っ込まれたスバルはわざとらしく落ち込んだ仕草をする。

これから更なる修羅場に行くとは思えない三人のやりとりに、ヴァイスは頼もしさを感じた。

◇

「おかしい、ガジェットばかりでナンバーズの妨害がまるでない」

「なのは達の方に集まってんのかもしれねーし、さっさと機関部ぶっ壊して合流しねーと」

機関部はもう目と鼻の先の距離まで来たフェイトとヴィータ。

手足が鎌のようなガジェットは次々と集まって来るものの、ナンバーズの妨害がない為これといった苦戦もなく順調に進む事が出来た。

「ここは私が抑えるから、ヴィータは機関部を。嫌な予感がするんだ」

刀身を二倍まで伸ばしたザンバーを横薙に振るい、蟻のように群がっていたガジェットを次々と両断する。

それでも爆煙の中から新たなガジェットが群がり、一向に数が減る様子はない。

「大丈夫なのか？」

「平気だよ。まだカートリッジもあるし、全滅は厳しいけど足止めなら」

純粋な破壊力においてはヴィータの右に出る者はいない、破壊範囲や射程といったものを考えなくていいこの状況ならば、フェイトが行くよりも破壊力が高いヴィータが行った方が確実だとフェイトは判断した。

「じゃぁさっさとぶっ壊して戻ってくる！無理すんじゃねーぞ！」

「ヴィータも！一人で厳しい時は無理せず戻って来てね！」

言葉と同時に放たれたプラズマスマッシャーにより生まれた一瞬の道、ヴィータは飛ぶ事に集中し、一切攻撃する事なくガジェットがその道を埋め尽くす前に包囲網を突破する。

ナンバーズが機関部で待ち構えている事を警戒するが、たどり着いた機関部には巨大な赤いクリスタルがあるだけで、ナンバーズやガジェットの姿は見当たらない。

「これが機関部か…よぉし！」

アイゼンを構え、温存していたカートリッジ三発を全てロードする。

同時にアイゼンの形状が変わり、サイズも何倍にも膨れ上がっていく。

面で叩くハンマーではなく、ドリルとバーニアに切り替わったソレは点による打撃、一点集中の破壊力に長けたものだと一目で分かる。

「いくぞアイゼン！ぶち抜けぇぇぇぇ！！」

上段に構え、雄叫びと共に鉄槌を振り下した。

◇

『闇の欠片事件』、将臣がシュテルと出会う事で孤独から救われ、同時に深く傷付きあわや再起不能にまで追い込まれた事件である。

闇の書の構築体、マテリアルと呼ばれる三騎全てと戦闘を行った将臣は、意図せずシュテルらの基礎データをグラムに保存する事になった。

これは将臣が『魔法を集める』事を無意識に強制され、見た魔法や知識全てをイージスで解析、グラムに一時保存すると言う方法をとっていた事が原因の一端とされている。

当初将臣も知らなかったが、王と力のマテリアルの基礎データもグラムに保存されており、データの破損が激しく、保存量がシュテルよりも少なかった為、復活には時間を要し、シュテルの復帰を最優先にし外部から修復を促進する目的があったらしい。

将臣がフェイトの魔法を好む傾向にある理由の一端として、同じ魔法を使う人物から手ほどきを受けたと言う理由がある。

シュテルの場合は炎熱の魔力変換と収束を将臣に教えたが、収束に関しては難易度が高く実戦レベルには十年後の今も達していないと言うのが現状だ。

一番適性がなかったと言えるのが広域魔法であり、近代ベルカ式に分類される将臣では広域魔法本来の目的を達成する事は出来なかった。

努力したからといって、頑張ったからといってそれらが必ず報われる訳ではない。

そんな事は誰もが知り、それでも報われる可能性を高める為、人は失敗より成功を信じてその道を選ぶ。

選んだ道の殆ど全てが報われる事なく、一般的に悲劇とも言われる人生を歩んできた将臣だが、それでも確かに幸せな時間、歳相応に振る舞えた時間は存在するのだ。

「エクスカリバー！」

「ぬるいわ！」

将臣の打ち出した黒い閃光は、同じ魔法であるにも関わらず二倍以上の規模を誇る真のエクスカリバーによって飲み込まれ、慣れない術式の処理に手一杯だった将臣はそのまま魔力に飲み込まれる。

「あ～…王様えぐーい」

「あれは死んだかもしれませんね」

「ふん！一応非殺傷にしておいてやったわ！塵芥とは言え非殺傷では死ぬまいて」

閃光に飲まれそのまま海に落下した将臣が浮いて来るのを待ちつつ、三人は次は誰が何を教えるかを話し始める。

「しかし本当に才能の欠片もない奴よ！我らから手ほどきを受けてあれとは呆れるわ！」

「そうかな～？マサミンも頑張ってると思うよ？あ、上がってきた」

「ゲホッ！ゲホッ！う…撃ち返さないって言ったのに…」

たまたま流れていた流木にしがみつき、捨て猫のような表情で三人を見上げる将臣。

「たわけっ！あんな錆び付いたエクスカリバーを見せられて撃ち返さんでいらいでか！」

「次は私が行きます」

「お！シュテるんやる気満々！どうしたの？」

「…先日、ブラストファイヤーを伝授したのですが…炎熱の魔力変換プロセスを省いて、ディバインバスターとして運用していましたので、そのお仕置きを」

ヤバい逃げなきゃ。

エクスカリバーの直撃で失われた魔力をカートリッジで補給し、慌てて飛行を開始する将臣。

「あ、そう言えば僕が教えた光翼斬も…アークセイバーとか呼んでたっけ」

結界外に逃げ出すつもりだった将臣だがレヴィに回り込まれ、そして左右をディアーチェとシュテルに塞がれてしまう。

「いや…ほら、だってレヴィちゃんとディアーチェちゃ…様のは名前が違うだけだし…シュテルちゃんのは炎熱省けば」

根本的には同じだし、変換プロセスがない分楽に撃てるから…つい、そこまで言った瞬間将臣の耳にカートリッジのロード音と、魔法陣の展開音が飛び込む。

「このうつけは死にたいらしいな」

「今のは流石に僕もカッチ～ンと来たね」

「トリプルブレイカーがお望みですか、勤勉ですね…では」

「嘘だよね？冗談だよね？撃たないよね？三人でバインドかけるの

はなしだと思います！」

絶対結界持たないよこれ…ていうか僕が持たないよ絶対！？。それが将臣の午前中最後の思考だった。

「ん……僕の部屋？」

魔力ダメージによるブラックアウトから覚めたのは四時間後の午後二時だった。

（無人世界だったとは言えあんまり派手にやるとバレちゃうかもしれないのにな…はぁ、まぁ僕が悪かったんだけど）

自らを転生者であり、精神的になのは達やシュテルより年上の立場だと勘違いし『ちゃん』、『くん』付けを殆ど無意識にしてしまう将臣だが、実際には彼も9歳児、口を滑らせる事もあれば取り乱す事もある。

「ていうか…台所の方から凄い焦げた臭いがする」

気だるい体を動かし布団から這い出した将臣は、壁伝いに台所まで向かう、途中で煙りを視認してからは疲れた体にむち打っ慌てて台所に飛び込んだ。

「あ、マサミンおはよー」

「な、何してるの！？」

台所には何故か椅子に座ったレヴィが、フライパンの上で炭と変わっていく目玉焼きらしき物体を眺めていた。

「シュテるんにちょっと見ててって頼まれたんだ」

「そのままの意味じゃ…く！」

煙りに目を刺激され涙をこぼしながら火を消しフライパンに蓋を被せる。

換気扇は動いているので煙りは直になくなるだろう。

「シュテルちゃんは？」

「王様を起こしにいったよ？」

レヴィの無邪気な表情を見て、元々内向的な将臣は怒るに怒れず、後でしっかりと説明しようとその場で何も言わない自分に言い訳しつつディアーチェの部屋に向かう。

シュテルに遅れる事1ヶ月、復活した闇統べる王ロード・ディアーチェ、雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシャー。

朝起きるなり動けないよう胴体を踏まれ、見下しながらサディスティックな笑みを浮かべるディアーチェと、その両脇に立つ興奮した様子のレヴィと、申し訳無さそうなシュテルを見た時は流石の将臣もなにが起きたのか理解出来なかった。

その後シュテルから治療を受けつつ聞いた話しでは、自分が起きる前に復活した二人、特にディアーチェの将臣に対する怒りは強く、レヴィも二人を倒した将臣には二人が復活した事で収まったが怒っていたらしく。

シュテルの二時間に及ぶ説得の末、一度魔法なしでボコボコにして復讐する、という事で手打ちになったらしい。

この時まだ非殺傷設定を知らない二人の魔法ならば容易に命を落としてしまう為だ。

「…ドサクサに紛れて蹴ってなかった？」

「まさか」

ディアーチェにマウントポジションをとられた時のダメージも酷いが、なまじ力の強いレヴィのパンチは誇張でなく将臣は死ぬかと思った。

バリアジャケットを展開しなければ骨の一本や二本確実に逝っていただろう。

そんな事もあり、一応は手打ちとなったマテリアル一同の恨みであったが、一応三人のロードである将臣の経済的負担だけは倍増した。

因みにディアーチェには基本的に優柔不断な将臣は頭が上がらず、灘家を実質的に支配しているのは彼女であり、将臣に『ちゃん』付けではなく『様』を付けるよう厳命している。

「入るよ？」

三回程ノックした後ドアを開ける、部屋の中は掃除が行き届いている為かなり綺麗だ、掃除しているのはシュテルと将臣というのは

問題だが。

「将臣」

「無礼者！誰が入って良いと言った！」

「え？あ…はい」

とりあえず巻き戻しのような動きでバタンとドアを閉める。

何やら二人はノートを開き考え込んでいた、ノートには見覚えがある、レヴィ曰わく『将臣魔改造計画』そのメニューノートだ。

ブルリと体に寒気が走る。兎に角あの二人の考えるメニューはぶっ飛んでいる。

手加減や理屈、効率を度外視するレヴィもキツいのだが、効率と理屈を考えるシュテルは将臣限界を見極めて生かさず殺さずのメニューを考え出し、仮にもロードである将臣の弱さと普段の軟弱さが気に入らないディアーチェは生かさず殺す、やれるかやれないかではなく『やれ、やれなくてもやれ』と言う方針なのた。

「あのー、ごはんの準備が出来たら呼びに来ます」

どういう経緯でメニューを考えるに至ったのかはわからないが、今日の遅い昼食はやはり将臣が用意しなければならないようだった。

「ねーマサミン、ごはんまだ〜？」

「ごめんレヴィちゃん、ちょっと待っててね？」

（もう目玉焼きでいいか…あ、フライパン洗わないと使えないか、
焼き焦げた卵汚れ……落ちるかなぁ）

第二十七話

金曜日、将臣にとって一番辛いイベントがあるのが金曜日だ。

何せ土日に学校はない、故に明日、明後日の事を気にする必要がない、イコール、シュテル達の容赦がなくなるのだ。

「将臣もようやく実戦の勘を取り戻して来たようですので、かねてより計画していた２ＯＮ２の模擬戦を実施しようと思います」

「模擬戦！模擬戦！」

「腑抜けのせいで予定より２ヶ月も遅れたが…まぁこれから取り返すまでよ」

「今までのがリハビリだったんだ…今までのが…リハビリ」

厳しい訓練を覚悟していたものの、模擬戦と聞き更に不安げな表情を浮かべる将臣。

怪我は完治したものの、自然には治らない箇所は多い。その部位に負担をかけぬようごまかしながら続けきたリハビリと訓練だが、どうやら上手くごまかせているようで内心将臣は安堵した。

ディアーチェの言う２ヶ月の遅れは主にリミッターに慣れ、動ける体になる為に要した時間である。

「ではペアは私とレヴィ、将臣とディアーチェという事で」

「シュテるんと一緒だー！頑張ろぅシュテるん！」

「えぇ、頑張りましょうレヴィ」

「え？ちょ、え？」

いつの間にか決まったペアに困惑する将臣、ディアーチェが嫌と言う事はないのだが、展開についていけず一人アタフタと狼狽していた。

「ちっ！まさか我がこ奴とペアとは……腑抜け、せめて足は引っ張るなよ？」

「善処します」

そうして始まった模擬戦、ペアを換えながら三戦やるつもりのマテリアル達は将臣の戸惑いをよそにある程度距離を取る。

「えっと…僕が前衛でディアーチェ様が後衛、僕の火力は低いからシュテルちゃんとレヴィちゃんの足止めがせいぜいだけど…あとは…ユニゾンとか？」

「後者はあり得ぬな」

「え…いや、でもせっかくユニゾン出来るんだし選択肢としてはありじゃ」

「メリットがない、貴様とユニゾンした所で魔法の制御と魔力供給は我がやる事になるのだろう？防御も薄い、何より我と貴様では戦い方が噛み合わぬ」

せめて目を見て罵倒して欲しかったと内心呟きつつ、将臣はどうやってシュテルの砲撃とレヴィの斬り込みを凌ぐか考えを巡らせる。

事実ディアーチェと将臣のユニゾンは融合値以前に噛み合わない、シュテル以上に遠距離と広域魔法に特化しているディアーチェはあくまで前衛であり、砲撃もミドルレンジが精一杯の将臣では互いの長所は伸びず、レベルの低い器用貧乏になってしまうのだ。

「いいか、勝ち以外認めぬ！死んでも勝て！よいな！？」

「が、頑張ります」

シュテルが開始の合図である魔力弾を頭上に打ち上げ、４人は戦闘に意識を集中させる。

「いっくぞぉぉぉ！！」

開始と同時に水色の魔力光が輝き、アウトレンジの間合いをレヴィが驚異的な速度で詰めていく。

本来ならばシュテルの射程圏がディアーチェを捉える前に広域魔法が発動出来るだけの間合いがあったのだが、レヴィのスピードは後数秒で将臣達に肉迫するであろう事は明白だった、今から広域魔法を準備しても身動きのとれなくなったディアーチェはレヴィの良い的だろう。

「っ！相変わらず速い！」

「狼狽えるな痴れ者め！レヴィはスプライトを使っておる！当てれば落ちる！」

「当たらないから平気だよ～っだ！」

レヴィの進行阻止にソニックムーブで加速し少しでもディアーチェに近付けまいと疾走する将臣。

「光翼斬！」

「アークセイバー！」

互いに牽制の魔力刃を撃ち出し、将臣はそれに平行してイージスに魔力弾を精製させ砲台変わりのスフィアを五つ配置する。

ソニックムーブと魔力スフィアでカートリッジを三発を消費した。

灰色の魔力刃と水色の魔力刃が衝突し、一瞬のせめぎ合いの後将臣の放った灰色の魔力刃は真っ二つにされ消えていく。

厳密には同じ魔法であるアークセイバーと光翼斬だが、電気の魔力変換資質の有無、込める魔力の量の違いにより将臣の刃はレヴィの刃と比べ脆く威力も低い。

「くっ！」

互いにカートリッジを使用していない同じ魔法故に、相殺出来ると楽観視していた将臣は慌ててカートリッジを一発ロードする。

追尾機能のある光翼斬をそのまま放置は出来ない、背後を突かれ

る事やディアーチェに向かっていく可能性もあるからだ。

（出し惜しみした結果がこれか！）

アークセイバー一発分無駄に魔力を消費した事に歯噛みし、左手から放ったブレイズカノンで光翼斬を撃墜する。

「電刃衝！」

その隙を見逃さず、フォトンランサーに誘導弾の性質を加えたレヴィのオリジナル魔法が将臣に向かって放たれる。

その数は八つ、フェイトのフォトンランサーと違い鋭角的な誘導ではなく、ディバインシューターと同様の自在な操作を可能にしているこの魔法は迎撃はフォトンランサーより難しいが速度面では劣化している。

「ファイア！」

展開していた五つの魔力スフィアから魔力弾をバラまき電刃衝を撃墜する将臣、同時にそのまま弾幕をレヴィに向けるがレヴィは弾幕を紙一重で避けながら将臣に迫る。

（弾幕の使う魔力はハンパじゃない…だけど魔力を渋ってたら一瞬で負ける）

将臣は弾幕をオートに切り替え周囲に設置型バインドを複数設置する。

「まずはひとーり！」

（前に戦った時は速すぎてバインドが追いつかなかった、設置型を囮にして斬られた時に捕まえるしかない！）

ハーケンフォームのバルニフィカスを振り上げるレヴィ。

設置型バインドは発動するものの、案の定展開しレヴィを捕まえる前に対象はその場を駆け抜けてしまう。

将臣はつい笑みを浮かべそうになる口元を、何とか歯を食いしばり隠す。

（今だ！）

「アロンダイト！」

将臣に成す術なしと判断したレヴィは大きく振りかぶったバルニフィカスを振り下ろす、イージスとグラムによるガードと同時にバインドを発動させた将臣だが、直後紫の魔力光が将臣ごとレヴィを直撃し二人は爆発で海に落ちた。

「ふむ…エクスカリバーを撃つ時間はなかったが、まぁスプライトフォームのレヴィは撃墜したであろう」

振りかざしたエルシニアクロイツを戻し、得意げに笑うディアーチェ。

将臣のミスは打つ手なしの演技が真に迫っていた事、そしてディアーチェと意志の疎通をしていなかった事だ。

その為ディアーチェは将臣が只撃墜されるくらいならばレヴィも道連れにする事を選択したのだった。

「うわぁ～ん！負けたぁ！」

「ふふん、ん？うつけはどうした？」

海から顔を出したレヴィは悔しそうに手足をバタ尽かせる。

その姿が目立った為浮かんでこない将臣が気になりディアーチェは海面を凝視する。その瞬間堅実にロングレンジまで間合いを詰めていたシュテルが小さく呟いた。

「まだ終わっていませんよ？ディザスター・ヒート！」

ブラストファイアー、その連射魔法がルシフェリオンから放たれ、致命的な隙を作っていたディアーチェへと炎が走り、模擬戦第一回戦はシュテル、レヴィペアの勝利で幕を閉じた。

◇

予定していた残りの二回戦は休憩を挟んだ後に実施された。

一回戦目で撃墜され海に落下した将臣、レヴィ、ディアーチェの回復待ちである。

とは言えクリーンヒットで撃墜扱いになり、尚且つ非殺傷設定で

ある為魔力、体共に問題はない。

あるとすれば『心』だろうか、信頼されず味方に撃墜されずという結果に将臣が軽く凹んだのだ。

元々マテリアル以外から信用されておらず、本人もそう振る舞っているので味方に撃墜されるという想定も当然しているし覚悟もある。

だが素の自分を知り、協力し支え合っているマテリアル（今回の場合ディアーチェ）に言葉通り全く信用されていなかった事は覚悟があっても9歳の心を凹ませるには十分だった。

「後15分後に二戦目を開始したいのですが…」

「…うん」

休憩中ずっと波打ち際に体育座りし海を眺めていた将臣に、シュテルが普段よりも柔らかな声色を意識して話しかける。

将臣が悩む時は大抵どつぼにはまり、尚且つ我が身を省みない決断をする事が多い、だが今回はディアーチェも信用云々ではなく、勘違いと効率を求めた結果の事故だった為将臣もそこまで深刻に悩んではいない。

むしろ「味方から撃たれる」という可能性をより強く想像し、それでも我を通す決意を固め直したほどだ。

余談ではあるが、もし同じ状況だった場合シュテルも将臣とレヴィを同時に撃っていたと一人呟いていた。

休憩後、将臣、シュテルペア対ディアーチェ、レヴィペアでの模擬戦が始まった。

一回目とは違い素早いレヴィが将臣とシュテルをしっかりと妨害、シュテルにより撃墜されるものの発動時間は稼げた為ディアーチェのジャガーノートが炸裂、ディアーチェ、レヴィペアの勝利で終了した。

「っ！射線に突然割り込まないで下さい」

「ごめん！レヴィちゃんが速くてつい振り回された！」

「光翼斬！」

「撃ち落とします！」

「え？僕もカートリッジロードしちゃったよ！？」

など、集団戦やコンビプレーを経験した事がない将臣がシュテルの足を引っ張る形になった。

後に将臣が人に合わせた戦い方が上手くなる理由として、三人の個性的でハイレベルな魔術師とこうしてペアを組んで戦ったからに他ならない。

三回戦目、レヴィと将臣が組んだのだが…結果はやはり将臣ペアの負けだった。

シュテルの弾幕とディアーチェの広域魔法、近付くまでに撃墜さ

れれ可能性は高く、レヴィだけ先行させた場合頭のいい二人は将臣無視でレヴィを撃墜するであろう事は容易に想像出来た。

残念ながら将臣はスプライトフォーム時でなくても最高速はレヴィに劣る。

タイミングを合わせ、左右から挟撃する事で弾幕を薄くしようかとも考えたが、相手も自在に動ける状況では各個撃破が関の山…結論的には弾幕をなんとか突破するしかないという結論に至った。

しかし、その作戦とも呼び辛い策が実施される事はなかった。発端はレヴィの発した一言だ。

「そうだ！ねぇねぇ？僕と合体すればいいんだよ！合体するとすっごく強くなれるんでしょ？」

「ユニゾンかぁ…でもディアーチェちゃ…様の言う通り……ん？僕とレヴィちゃんなら相性もそう悪くないかな？」

「なら合体しよう合体！」

「何やらアイツら騒いでおるな…」

「何か策でも閃いたのでしょうか」

数秒後、開始の合図と同時にレヴィとユニゾンした将臣の姿は髪と瞳が水色に変化し、通常時より速い速度での移動が可能になった。

但し、レヴィ単体の速度以下、将臣以上のスピードだ。

結果は散々で、まず互いの考えの違い、策と工夫で勝ちを手繰り寄せる将臣とは違い、レヴィは勢い、力押しが目立つ。

動きも上手く合わず誤差が目立ち、レヴィは将臣の体でありデバイスはグラムとイージスという事を考えていなかった為間合いや攻撃方が噛み合わなかった。

それらはユニゾンに慣れていない二人には当然の事だったが、ディアーチェとシュテルが見逃してくれる筈もなく。

呆気なく撃墜され金曜日の模擬戦は幕を閉じた。

将臣は自分に必要な技術や知識、そして経験の多さを改めて知り、苦笑いしつつも絶対にものにすると一人静かに燃えていた。

第二十八話

管理局に入局する為に、僕がミッドチルダの士官学校に入る事を決めた時、一悶着あった。

ディアーチェちゃんとレヴィちゃんが反対したのが原因だ。理由は簡単、三人を地球に残すにしろ、全員でミッドに移住するにしろ、彼女達には不自由な生活を強いなくてはならなかったからだ。

まず、地球に住む場合僕は三人のリンカーコアの封印処置とデバイスのセットアップ機能の停止をするつもりだった。

力も、便利なものも、持てば誰でも一度は使いたくなし、使わなくちゃならなくなる場面もある、それでも地球で平穏に暮らすには過ぎた力だった。

この案に彼女達三人全てが激怒した、理由は様々だったけど、僕が三人を信用していないと言う事や、自由を阻害される事など、それらの意見はもっともだった。

でも彼女達の事を僕は信用している、いや…『もしも』なんて可能性を考えてしまう僕は本当は人を信用なんてしていないなかもしれない。

ミッドチルダに移住する場合も同様の条件を出した、この場合の理由は管理局に三人が何かの拍子に才能を見いだされてしまう事を恐れたからだ、

もちろんこれも拒否された、そして次の案は方向性をかえ、全員

が管理局で働くというものだった。

ただし僕は絶対に譲らないと前ふりして条件を出した、『変身魔法による素顔の秘匿』だ。

彼女達三人は元は闇の書の構築体、そしてなのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんにそっくりだ。

今後の成長で差異が生じる可能性もあった、でもそれは先の話だ。

ディアーチェちゃんとシュテルちゃんの存在を知るのは僕だけだったが、レヴィちゃんは自分を倒したシグナムさんを含め数人に目撃されている為、一目でマテリアルと露見してしまう。

残る二人にしたって似過ぎているし、調べられれば僕との繋がりや戸籍がない事はバレるだろう。

この案にはシュテルちゃんは賛成してくれた。

もちろん渋々といった感じではあったが、合理的に判断したのだと言っていた。

ディアーチェちゃんは「何故我が顔をごまかしてコソコソしなくてはならんのだ！」と激怒、レヴィちゃんは「ぇ～、なんか面倒くさい」とへそを曲げてしまった。

話し合いは三時間に及んだが、平行線をたどるだけだった。

管理局に入らない、入るなら顔を隠す、地球に住むなら魔法は封

印、ミッドに住むのも同様。

我ながらむちゃくちゃ横暴な選択肢だ、何様のつもりなたのだろうか。

この条件の行き着く先は、結局は彼女達がなのはちゃん達と関わらない為のものであり、シュテルちゃんはそれを理解した上で博打のような策を提示して来た。

変身魔法を使うシュテルちゃんは別として、ディアーチェちゃんとレヴィちゃんはなのはちゃん達と極力関わらない部署に所属して貰おうというものだ。

とは言えディアーチェちゃん達もなのはちゃん達もあの実力なら否が応でも目立つ、管理局は巨大な組織だけどさすがに噂になるだろう、『似ている』と。

顔を変える以外の打開策としては実力を抑えてもらうぐらいしかない、そして一番厄介なのは『変身魔法の使用』に伴う書類や人事を融通してくれる協力者の存在だ。

僕の、僕達の力では限界がある。というかすぐに限界にぶち当たる。

データの改ざんはシュテルちゃんとディアーチェちゃんならなんとかなりそうだったけど、それは完全に犯罪行為、出来れば避けたかった。

彼女達の素性を黙認しつつ、ある程度権力がある人物の協力が必要不可欠…。

「クロノ・ハラオウン執務官と、その母親のリンディ艦長が適任かと思います。あくまでアナタのあげた人物と説明を聞いた中では…ですが」

「うぅん…」

（多分機動六課入りする為にも協力者が必要だし…将来は提督だから適任なんだけど…）

夢や妄想かもしれない、そんななぜか自分が知る未来を変えない為、やらなくてもいい演技と彼女達への苦労を強要する自分に益々嫌気が差しながら、僕はクロノくんに実力を示し話を真剣に聞いてもらうべく動き出した。

これから僕はクロノくんにお世話になりっぱしになる事になってしまった。

◇

「はぁ…はぁ…」

「私とした事が…読み間違いました、最初からユニゾンして挑むべきでした」

聖王の間、そこでなのはとシュテルは肩を上下させながらふらつく足に力を入れ立ち上がった。

二人の間には聖王であり、なのはの娘でもあるヴィヴィオが悠然と立ち、傍目からは挟み撃ちされる位置にいるにも関わらずその体にダメージはなく、逆になのは達のバリアジャケットは破損が目立つ。

「お願いだから…もう逃げて！」

「大丈夫…絶対、助けるから」

「いらぬ心配です、私達が負ける事など…ありえません」

戦闘開始から五分、ヴィヴィオのパワーやスピードも脅威だが、それ以上に使う魔法や技、戦術の豊富さが行動のワンパターン化を防ぎ、付け入る隙を与えない。

なのはとシュテルが知る由もないが、これらの魔法経験と技能は全て将臣が収集、会得してきたものであり、それこそが将臣の生まれた意味と価値の一つでもあった。

体をクアットロにコントロールされているヴィヴィオは涙を流し、自分を助けようと傷つく二人を見て半ば自棄になりかけていた。

「お願い、お願いだから…もうほっといて……もういいから…もう」

「良く…ない！」

涙を流しながらゆっくりと拳を構え、そして一瞬で間合いを詰めるヴィヴィオ、なのはの叫びは床を破壊する程の踏み込みの音に掻き消される。

狙いはシュテル、彼女はなのはに比べるとまだ魔力と体力に余裕がある。

本来ならなのはを先に叩くのが無難だが、クアットロはあえて二人をいたぶり楽しんでいた。

「く！」

展開したバリアに連続で拳が打ち込まれ、ひび割れた瞬間に放たれた回し蹴りがバリアバーストでヴィヴィオを吹き飛ばすより速くバリアを貫通し、シュテルは腹を蹴られ壁へと叩きつけられる。

射線上にシュテルがいる為砲撃での援護は出来ず、すかさずシューターを撃ち出したなのはだったがヴィヴィオの一連の動作はそな到達よりも速く、シューターは呆気なくガードされてしまう。

「シュテルちゃん！」

壁にめり込んだシュテルは痛みに顔を一瞬だけ歪め、すぐに追撃に備えるべく飛び出し飛行する。

「問題ありません…」

ヴィヴィオの両腕に虹色の雷が生じる、魔力変換資質を持つベルカ式魔導師の基本であり奥義ともされる、変換した魔力を拳（武器）に集めて叩き込むというシンプルだがそれ故に強力な魔法だ。

魔力弾への雷の付与はフェイトの魔法を基盤に、体を使った技や

魔法はシグナムなどその分野のエキスパートのデータが使われている。

（なのはのサーチャーがナンバーズを捕捉して倒せたとしても、果たしてヴィヴィオは止まってくれるのでしょうか）

現在ナンバーズとスカリエッティの捜索は、遅れて到着したスバル達となのはとシュテルのサーチャーが行っている。

機関部に向かったフェイト達は機関部の破壊にほぼ全ての魔力を消費し、移動速度が激減している。

そして驚いた事に、機関部を破壊された筈のゆりかごは速度を落とす事なく進行を続けている、恐らくバックアップは完璧なのだろう。

（魔法や行動が読まれ過ぎている…恐らく情報元は将臣でしょうが、厄介ですね）

少なくともヴィヴィオを操っている人物を倒せばヴィヴィオは弱体化する。

如何に技能や魔法を扱えると言ってもそれはあくまで『記憶』あって『経験』ではない。

その場に応じた使い分けは勿論、自分の体や間合いを考慮した動きに昇華させるには時間が必要だ。

その誤差を修正されリアルタイムで操られているからこそ現在の強さがある。

解放出来ないまでも、せめて動きがオートになれば勝機は十分にあるとシュテルは踏んでいた。

「ディザスターヒート！」

カートリッジを一発ロードし、攻撃の矛先がなのはに向かぬよう雷を拳に纏ったヴィヴィオに砲撃を開始するシュテル。

並の魔導師ならば防御を容易く打ち砕き撃墜出来る紅蓮の砲撃も、突出した防御力をもつヴィヴィオが防御に徹した場合、とても撃墜出来るだけのダメージを与える事は出来ない。

炎を突き破り、拳を振り上げたヴィヴィオがシュテルに迫る。

「そう何度も」

三連続砲撃の直後でありながら、シュテルはまるでダンスのように体をターンさせ飛びかかって来たヴィヴィオの背後へと滑り込む。

「ルベライト！」

すかさずバインドを何重にも重ね掛けし、追撃をなのはに任せヴィヴィオから距離を取る。

「エクセリオン・バスターーー！」

まるで打ち合わせしていたかのようなタイミングで砲撃が放たれた、バインドをかけられたヴィヴィオに直撃し激しい爆風が床や壁

を削り飛ばし砂煙をあげる。

「ヴィヴィオ！？」

「危ない！」

砲撃後ヴィヴィオを案じたなのはに無数の魔力刃が砂煙の中から降り注ぐ、雷を帯びた魔力の刀剣、フェイトのフォトンランサーやクロノのスティンガーブレイドの派生魔法だった。

シュテルはなのはと合流を目前にしながらも、慌ててブラストファイアーで魔力刃を横から迎撃、滞空する事を余儀なくされてしまう。

「だめだよ…これ以上やったら、なのはさんと、シュテルさんが死んじゃうよ」

吹き飛んだ砂煙の中に立っていたのは依然としてダメージが見られない聖王ヴィヴィオ、高魔力の結晶であるレリックからほぼ無尽蔵に引き出される魔力は只でさえ高いヴィヴィオの素質とスペックを何倍にも高めている。

「生半可な砲撃では魔力ダメージでのブラックアウトは望めませんね…」

「うん…これはちょっと骨が折れるね」

「なんで？なんで逃げないの？」

もう何度も自分は他人だと叫んだ、なのはやシュテルに八つ当た

りもした。

ママを返せと叫び、嘘つきと罵った、それでも二人はヴィヴィオ（自分）を救おうとするのを止めない。

なのはが微笑む。

「ママだからね、大丈夫、すぐ助けるから」

シュテルが当然のように答える。

「駄々っ子をあやすのも大人の務めです、それに…駄々っ子の相手は慣れていますから」

諦めない二人の視線が注がれ、そっくりな二人はそれぞれ違う仕草でデバイスを構えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4915y/

機動六課のお荷物

2012年1月8日23時55分発行